

60-697木
0
17木



著 隆 文 升 辰
學 醫 灸 鍼 明 簡

×
複
写



始





10
17

著 隆 文 井 辰

學 醫 灸 鍼 明 簡

新 最
補 增

全



60-697



最新增補
簡明鍼灸醫學全

(最終版)



元大政府試驗委員
辰井高等鍼灸學院院長
皇漢鍼灸學會會長
軍人授護會生業輔導員

辰井文隆著

著者寄贈本

著者藏版

60
697

第十三版の成れる日に

超非常時の今日、又、増訂新版を出す事になった。

嵐の如き、読者の歡待には、自ら忤怩として、赤面しながら血は躍る。

多年鍼灸の純化と向上とに、念願して勞苦した、此啓蒙的愚著も十三版となったのは、偏に我鍼灸同志の、愛育に因るものであつて、

國恩と共に、諸氏の知遇は死すとも、忘れ得ぬ所である。

されば職場奉公、同志への奉仕の誠意を表す爲に、

資料の蒐集、思索の純正、記述の明快に、努力憔悴したが、著者の、迂拙は、妥當でない解説、飽足らぬ記録も多いであらふ事を恥ず。

昭和十六年冬、太平洋の波荒れる夜深

著

者

誌

此著を著者の

先考

正義の醫人長學生學人

辰井文吾の

靈に捧ぐ

第十一版自序

著者鍼灸の一路に精進すること數十年、臨牀と共に啓蒙的育英を以て今日に至る。此幾十春秋の過程に於て、思想も、科學も、社會意識も、幾變轉した。今興亞の聖代に生きて、一臂の鍼灸報國を致し得るは微臣の光榮である。既に革新的機構の下に、厚生省の出現を見、國民厚生の行政、學問、技術方面にも、何らかの變革が到らんとしてゐる。

此の季、困難なる拙著の如きは絶版をと考へたが、本著を求められて休まぬ諸君の爲に心附く儘に増補して、第一頁より改訂を加へ、讀者の机邊に貽るものである。洋紙統制、配急制限、諸原料の入手難、勞力不足、賃銀の騰貴等、一方ならぬ困難なりしのみならず、稀なる炎暑に際して、著者健康を損じ、行届かぬ點多きは、遺憾の極みである。

今ラヂオは歐洲開戦を報じてゐる。

世界混亂だ、時勢だ、忍ばう。

讀者諸君も不滿の點は、諒恕せられたい。

聖戰第三の初秋殘暑の窓にて

著

名

第九版に就て

一、淺學非才なる著者は、一層の修業と勉學を爲さねばならぬ事を自ら之を認め、心靜かに、思索し讀書し實驗せんが爲に、暫らく著述の筆を措かんとせしが、受験生諸彦及び、求學、向上の新人等本書を探究せらるゝ事、日に繁くして、古本さへも書肆の店頭に見ざるに至りしは、著者の感奮措く能はざる所である。

一、男性知己に感ず。著者齡不惑を超へて數年に及ぶ、死も又厭ふ所に非ず、何ぞ學窓の勞苦を辭せん。知遇に酬ゆるはたゞ本書を一步たりとも前進せしむるの他なき事を思ひ、客を謝し、友と斷ち、子等の接近する事をも叱咤しつゝ、非人情的なる譏を甘受して今漸く乙亥改訂版を。

一、然れども杜撰魯魚の誤り多きを恥づ。

一、希くは鍼灸學術將來の爲に讀者の示教と叱正を請ふ。

乙亥の櫻咲く日、花に背きて

著

者

第七版の序に代へて

一、本書を公にしてより既に六星霜、一般科學の問題外に置かたりし斯學も、新時代の呼吸に觸て、今や其の科學的根據が稍々識者を肯定せしめんとするに立至らんとしてゐる、
 一、學界の此の傾向を鳥瞰して、同志と共に同慶欣快の至りに堪えない。

一、時代と共に變轉する速しき幾星霜を著者は學界の進歩に追隨せんが爲に、如何に焦慮した事か、殆ど孤獨同様の家庭生活を營んで、一途に思索し、讀書し、實驗し、記述の筆を進めたが、元來の迂愚、魯鈍今尙ほ吳下の舊阿蒙たるは汗顔の至りである。

一、改訂につぐに又補増、努力すれども、遅々として所期の効果を致さず何時になれば無疵の境地に達することが出来るのかと慚愧と共に轉た感憾無量である。

一、本書の一名を系統的鍼灸試験問題詳解と改めると同時に、舊きを捨て、新しきを加へ内容外觀共に一新して見たが校正刷りを見るに、前後せる處多し、願くは寛恕されたい。

一、學窓兎角多端なるに、寸暇あれば來客、謝すれども又來訪、校正の如きも思ふが如くならず、粗漏、杜撰、偏に讀者の理解ある同情、是正、嚮導とに待つ。

昭和第七年の孟夏

華城嶋橋畔の書窓に於て

著

者

改訂第五版に就て

第四版も又違しく賣切れてしまつた、大方好學の士の後援に他ならぬ事を思つて著者は欣快の情と共に一段と責任が加重せられた事を痛感するものである。

爰に於いて今や第五大改訂を斷行し、外觀裝幀は勿論、解剖學には骨、神經、筋肉一覽表及び種々なる重要事項、最新の學說、難問題等を始め、生理學、消毒學、鍼科學、灸科學、經穴學、病理學等全般に亘つて主要な記述を増加した結果は、字數無量十七萬數千字を増加した爲に活字を九ポイントとして密植して内容を

豊富ならしむるに至つた。故に更らに系統を正して、首尾一貫を期した、非才の著者としては大いに努力を致した積りであるが、尙不備の點が多い。切に一般學者の指導を待つものである。

本版改訂に於いて原志免太郎博士は最近の業績の轉載を快諾せられ、鍼の血液に及ぼす作用及び小兒鍼の研究に就いては藤井秀二博士の示教を、皮膚病中の灸治適應症に就いては青地博士の回答を得たる事等を爰に特筆して夫等の諸學者に深謝の意を表す。

昭和第四之炎暑の日

著

者

誌

著者より讀者へ送るの言葉 (第一版の序)

- 一、本書は、各府縣最近十幾年間の實際の試験問題を集めて、どんな難しい検定試験にでも、合格の出来る様に、工夫して詳細講義してをきました。
- 一、書名を一名簡明鍼灸醫學と名づけました如く、獨學者の爲には一種の講義録であると同時に、開業せる臨牀家の爲には無二の相談相手となるやうに、小兒科學、婦人科學等の疾病は勿論、今日迄の鍼灸教科書にないものまでも集録してあります。つまりたゞ一冊で教科書と参考書と試験問題解答集とを備へた本であります。
- 一、今學生諸君が持つて居られる答案集は、餘んまり簡單で、とても今日の進歩した検定試験には何の役にも立ちません。
- 私は永年千幾百の學生を養成して痛切に此事を感じました。
- 一、四方八方から八釜敷くすゝめられたので、教授、臨牀、研究の寸暇に、不遜ながら編著したのであります。
- 良書が多ければ、敢て私がこんな事をする必要も無いのでありますが、残念ながら良書が少ないので、私は莫大なる費を投じて、奉仕的に本書を出版したのであります。

そして本書によつて、受験生が救はれる事を、確信するのであります。

- 一、普通の鍼灸學の書籍は大きな字で、おまけに全部カナが付けてあつて、教育の進歩した今日、とてもきまり悪く、電車や汽車の中で読めぬと云ふ事を始終聞いて居りますから、本書は九ポイント活字を用ひ、固有名詞や術語や難しい字の他はカナを付けぬ事にしました。しかし普通でない字や、句には無論澤山カナを付けて置きました。
- 一、本書は學校又は講習所等で、學生用教科書としての目的にも充分そふ様に編著してありますから、教員、教諭、講師諸君は本書を學生に持たしめ、教授せられたなら、學生の記憶印象を深からしめ、検定試験に、合格必勝を期する事が出来ます。
- 一、元來教科書は、或臟器、又は疾患を目標として、一定の順序を追つて、原因、症候、治療等を系統的に叙述した興味少ないものでありますが、これを実際の検定問題を取扱つて、問答體にしますと、其變化と治療とを總括的、應用的に記述する事が出来て、
- 解剖、生理、鍼灸科學、病理學等の相互の關係を徹底的に知らしむる利益があり、その上同一の疾病に就いても、種々質問を變化して、裏から表から考へ、且つ練習せしむる事が出来て、

眞の實力の養成となります。

又既に開業してゐられる、實地家諸君に對しては、乍失禮多少の参考となることを信じて疑ひません。

一、本書は、前にも言ふ通り獨學者諸君の爲になるようにと、充分に苦心致しました、私自身が醫師開業試験、中等教員検定試験、鍼灸術検定試験、普文試験等の検定試験を體驗して來て居りますのみならず、

大阪府鍼灸術試験委員を経験してゐますから、此點を深く考へて書きました。

故に師ある又は師なき學生諸君は、充分本書を理解反覆記憶せらる事によつて、屹度検定試験に、合格の出来るようにしてあります。

一、本書は、解剖學の部にも必要な所には生理學、病理學までも解説してあります、

此の點は些か類本と違つて居る點でもあり、長所と言へば言へもするでせう。

一、本書が、詳しい處と、簡単な處とが到る所に入り交ざり、一寸見て妙な記述になつて居りますが、實際の検定問題を骨子として、取り扱つたからであります。

一、本書の増補版は、字句や誤字の訂正、記事の増加を致しまして、完全を期しましたが、系統的には一寸前後した所や、其他幾多の缺點があらうと考へられます。

さういふ箇所を發見せられた諸君は、著者宛に御指摘下さい、喜んで重版の際に訂正いたします。

一、幾多の局所解剖學的問題を集めて置いたのは、此の問題が初學者には、かなりむづかしからうと考へたからです。

一、ホルモン線の部が他の部分よりも少し詳しいのは、比較的新しい問題であり、何れホルモン腺の問題が、將來モットよく試験問題になるであらうからです。

一、本文中、備考とある部分は、著者の老婆心からでありまして、検定場での答案には不要の部分もありませうから、適宜取捨して下さい。

一、巻末に約數ヶ年間の、全國の問題集がありすから、夫等の問題で、答案を練習して下さい。

一、名士方の序文と、讃辭は、相當戴いて居りますが、あんまり效能書の過ぎるのも、

一寸イヤなものですから、此處に登載する事を、遠慮してをきます。(乙亥の夏を訂す)

凡例

一、啓蒙的に理解を專一とし、専門用語の二、三あるものは左記の如く採録した。
例へば器官、器關。症状、症候。徑路、經路。產生、産成等の如くである。

一、愈の字に就いて (イ)愈と輸と同じ、傳送の義有り。(古典) 又愈、愈。

(ロ)愈は、凡そ一身の穴、皆愈と曰ふ可し。(素問識註)

(ハ)愈と輸と同じ、五藏の氣此に至る。而して轉輸、傳送也、簡(多紀氏)按ずるに愈、輸、輸、通用す。

(ニ)玉篇に曰く、輸は五臟の輸也、史記に五藏の輸、註に曰く、經穴也。(以下略 素問識註)。

以上の字嚴密に言へば區別あるべきなれど、本書も及愈、輸、輸を通用す、諒せよ。

一、目次を作るに、體裁を主とせず、實用に重きを置く時は、

目次も亦一種の創作である、それで本目次の如きものを作成した。

一、最近の問題で、標題や目次で發見出來ないものでも、

全卷を通じて、反覆詳讀せらるゝならば

必ず夫等に對する、正解を得るものである。

一、標題しの下に(カッ)で、出題の府縣各年月を記載してあるが、是は其全部でない、

たゞ讀者の印象を深からしめんが爲、便宜記録したものであつて、年次も不同である。

最新増補 簡明鍼灸醫學

目次

第一編 解剖學

第一章 組織學

細胞の種類	一
組織	二
上皮組織	二
筋組織	三
神經組織	三
結締組織	三
器官	三

第二章 系統解剖學

第一節 骨學

系統解剖學

骨(骨の主成分)	四	脊柱を説明せよ(脊柱總論)	一一
骨髄	五	脊柱骨の數及び區別	一一
骨膜及び骨髓に於いて	五	肩胛骨の烏喙突起は 何れにありや	一二
頭蓋骨及び顔面骨の名稱及び數	五	骨の種類及び構造(骨の成分)	一二
甲、顔面骨。乙、顱頭蓋骨。	六	胸廓の構成及び骨名	一二
腦底を構成する(境界する)骨名	六	胸廓の上孔は如何なるもの を通ずるや	一三
肩胛骨烏喙突起に附着する筋の名稱 及び起始停止如何	六	眼窩を構成する骨名	一三
鎖骨の位置聯接形狀(全身の骨數)	七	鼻孔を構成する骨名	一三
四肢骨の關係及び名稱	七	骨は何によつて連結するか	一三
ミハエル氏菱形窩の解剖に就 いて知れる所を記せ	八	骨盤腔の構成	一三
グロツス氏三角	八	大小骨盤の區別(大骨盤、小骨盤)	一四
四肢に關する三大關節の名稱 及び構成する骨名	八	後頭骨の斜臺に就いて	一四
骨の聯接の種類を記せ	九	顔面に於ける著明な骨孔	一四
骨盤の位置形狀男女の差異構 成骨の名稱に就て説明せよ	一〇	顱頭蓋骨にある骨孔 大顱門或は前頭百會	一五
下肢を構成する骨の名稱 (七箇の趾骨記憶法)	一〇	腕骨の排列と名稱	一五
膝關節の構造を記せ	一一	跗骨の名稱と排列	一六
		關節の種類及び名稱並に構成	一六
		不動關節、可動關節	一六
		靭帯	一七
		囊狀靭帯、副靭帯、固有靭帯	一七

骨格一覽表……………一七
 軀幹骨……………一七
 頭蓋骨、上肢骨……………一八
 下肢骨……………一九

第二節 筋學

筋、筋の種類、横紋筋と滑平筋……………一九
 横紋筋に就いて……………二〇
 横紋筋と平滑筋の例外(心筋)……………二〇
 筋 膜……………二〇
 背部淺層筋の名稱……………二一
 腰背筋膜及び同筋膜より……………二一
 起始する筋名……………二一
 鼠蹊管とは何ぞや(ヘルニヤ)……………二一
 横隔膜に就いて記せ……………二二
 (横隔膜を通過する尿管及び神經)……………二二
 胸部淺層筋の名稱……………二三
 腹壁を淺表より記述せよ……………二三
 同解剖的説明……………二三
 第二腰椎部で切断すると……………二三
 如何なる筋を切るか……………二三
 第五頸椎部で切断すると……………二三
 如何なる筋を切るか……………二三
 上膊上部に於て切断すれば……………二四
 如何なる筋を切るか……………二四

大腿の中部を切断すると……………二四
 如何なる筋を切るか……………二四
 外斜腹筋は起始部即ち肋骨部で……………二四
 如何なる筋と重なるか……………二四
 内斜腹筋の起始停止及び作用……………二五
 直腹筋の起始停止之に……………二五
 分佈する神經の名稱……………二五
 帽狀腱膜に就いて知れる所を記せ……………二五
 顔面筋が良く種々なる……………二六
 表情を爲し得る理由……………二六
 咀嚼筋の名稱及び分佈する神經……………二六
 廣義の咀嚼筋……………二六
 三角筋の起始停止並に……………二六
 三角筋にある經穴……………二六
 胸鎖乳嚙筋の起始停止……………二七
 及び神經との關係……………二七
 肩胛筋の數と名稱……………二七
 二頭膊筋内筋溝外筋溝……………二七
 二頭膊筋の起始停止……………二七
 用此筋膜の停止部……………二七
 内腕部筋の數及び名稱……………二八
 閉鎖孔とは何か……………二八
 四頭肢筋の起始停止作用如何……………二八
 之に分佈する神經動脈……………二八
 二頭膊筋の起始停止及び血管……………二九
 神經との關係を記せ……………二九
 下腿屈筋の名稱を挙げよ……………二九

腹壁にある筋肉の名稱を問ふ……………三〇
 及び筋の名稱……………三〇
 筋肉一覽表……………三〇
 筋肉の起始、停止、作用、及び分佈……………三〇
 する神經、血管の名稱等は、一覽表……………三〇
 に詳悉せり

軀幹筋(背面)……………三〇
 軀幹筋(前面)……………三二
 腹 筋……………三三
 胸 筋……………三三
 頭 筋……………三五
 頭部筋……………三六
 帽狀腱膜……………三六
 顔面筋(表情筋)……………三七
 咀嚼筋……………三八
 上肢諸筋……………三八
 肩胛部筋……………三八
 上膊筋……………三九
 前膊筋……………四〇
 手 筋……………四三
 下肢諸筋、腰部諸筋……………四四
 内腕部筋……………四四

第三節 内臟學

外腕部筋……………四四
 大腿諸筋……………四六
 下腿諸筋……………四七
 足 筋……………四九
 内臟系統……………五一
 粘 膜……………五一
 膜……………五一
 内部の充實せる内臟の構造……………五二
 筋織膜(粘膜筋層)……………五二
 漿液膜及び外膜……………五二
 消化器系統……………五三
 消化器の名稱及び作用……………五三
 口 腔……………五三
 口腔前庭、固有口腔……………五四
 唾液腺(三大唾液腺、小唾液腺)……………五四
 扁桃腺……………五四
 齒の數及び名稱……………五五
 齒の構造並に分佈する神經……………五五
 舌の構造及び其の神經動脈……………五五
 食管の位置形状構造……………五六

胃の位置形状區別並に……………五六
 之に分佈する神經血管……………五六
 小腸(十二指腸、空腸、廻腸)……………五七
 大腸(盲腸、結腸、直腸)……………五七
 肝臟の位置構造及び……………五八
 機能區別及び構造……………五八
 肝臟の機能、膽汁……………五九
 膽囊の位置形状區別機能……………五九
 皮膚、鬚質……………六〇
 膝臟の位置形状機能……………六〇
 腹腔内臟器の名稱及び位置……………六一
 呼吸器系統……………六一
 喉頭(血管、神經)……………六二
 氣管氣管枝(神經、血管)……………六二
 肺臟の位置形状並に構造……………六三
 (神經、血管)……………六三
 泌尿器系統……………六四
 腎臟の位置形状區別並に機能……………六四
 (神經、血管)……………六四
 腎 孟……………六五
 輸尿管の位置形状區別……………六五
 及び各部の名稱……………六五
 膀胱の位置形状區別構造機能……………六六
 (神經、血管)……………六六
 尿 道……………六七

男子の尿道、泌尿生殖器……………六七
 生 殖 器……………六七
 男子生殖器(内生殖器、外生殖器)……………六七
 睾丸の位置形状區別構造……………六八
 副睾丸の位置形状區別構造……………六八
 陰囊(神經、血管)……………六九
 尿 道……………六九
 陰莖の位置形状區別構造……………六九
 (血管、神經)……………六九
 女性生殖器(内生殖器、外生殖器)……………七〇
 子宮の位置形状區別構造機能……………七〇
 圓靱帯とは何ぞ……………七一
 輸卵管の位置形状區別……………七一
 構造及び機能……………七一
 卵巢の位置形状區別機能……………七二
 (神經、血管)……………七二
 膣の位置形状區別機能……………七三
 (神經、血管)……………七三
 乳房の位置形状區別並に機能……………七三
 (神經、血管)……………七三
 會 陰……………七四
 漿液膜……………七四
 心 囊……………七四
 胸膜(別名助膜)……………七五
 腹膜とは何ぞ(神經)……………七五

第四節 内分泌腺

(一名ホルモン腺)

Table of contents for the endocrine glands section, listing items like '内分泌外分泌に就いて' (76), '甲状腺の位置區別構造機能' (77), '松果腺' (77), '大脳下垂體' (77), '甲状腺の位置區別構造機能' (78), 'バセドウ氏病、粘液水腫症' (79), '上皮小體(副甲状腺)' (79), '胸腺' (79), '淋巴胸腺體質' (80), '脾臓' (80), '脾臓の位置形狀區別作用' (81), '副腎(一名腎上腺)' (82), 'アドリナリン' (82), '睪丸(ホルモン)' (83), '卵巣(缺落症狀)' (83), '攝護腺' (84), '肝臓(内分泌、外分泌)' (85).

第五節 循環器系統學

(脈管學)

Table of contents for the circulatory system section, listing items like '循環器' (85), '血管系統' (86), '動脈' (86), '毛細管(毛細血管)' (86), '心臟の位置形狀區別機能を開ふ' (87), '動脈の排列' (88), '副動脈(副行動脈)' (88), '吻合' (88), '脈管網' (89), '脈管叢' (89), '直達脈管' (89), '終端動脈' (89), '肺靜脈大靜脈' (89), '淺深靜脈の區別' (90), '靜脈網、靜脈叢' (90), '靜脈竇、導血管' (90), '毛細血管の配列' (91), '係締、絲襪' (91), '血管の構造' (91), '自養血管' (91), '血管鞘' (91), '交感神經と血管との關係' (92), '靜脈管の構造' (92), '淋巴管(水脈管)' (92), '心臟の構造' (92), '心臟の構造(心臓疾患の場合のヘッド氏帶)' (93), '肺動脈(小循環の動脈)' (94), '即ち肺循環の動脈' (94), '上行大動脈を簡明に記せ' (94), '冠狀動脈' (95), '大動脈弓及び其の分枝の名稱' (95), '無名動脈' (95), '總頸動脈' (96), '外頸動脈分佈の概略' (96), '内頸動脈の枝別' (97), '内頸動脈分佈の概略' (97), '上眼窩動脈、淚腺動脈' (98), '前頭動脈、眼動脈' (98), 'ウイリス氏動脈環(前大動脈、中大動脈)' (98), '鎖骨下動脈分佈の概略' (98), '椎骨動脈、基礎動脈、脊髄動脈' (99), '内乳動脈分佈の狀態' (99), '甲狀項軸(甲狀頭幹)分佈の概略' (99).

Table of contents for the circulatory system section (continued), listing items like '上、下甲狀腺動脈、上行項動脈' (100), '淺在項動脈、横肩胛動脈' (100), '肋項軸(第一肋間動脈)分佈の概略' (100), '横頸動脈分佈の概略' (100), '腋窩動脈の起始經過分佈' (101), '分枝、長胸動脈' (101), '上膊動脈の起始經過を記せ(分枝)' (101), '撓骨動脈の起始經過を記せ' (102), '尺骨動脈の起始經過分佈' (102), '胸部大動脈幹(分枝、後肋間動脈其他)' (103), '腹部動脈幹の起始經過並に枝別' (103), '分枝、上腸間膜動脈、下腸間膜動脈' (104), '内臟動脈軸(分枝、肝動脈其他)' (104), '總腸骨動脈' (104), '内腸骨動脈(一名下腹動脈)' (105), '外腸骨動脈(分枝、臍動脈其他)' (105), '股動脈' (105), '膝關動脈' (106), '前脛骨動脈の起始經過分佈' (106), '後脛骨動脈' (106), '門靜脈(一名門脈)の特徵及び經過' (107), '淺在動脈の部位を記せ' (107).

第六節 神經學

Table of contents for the neurology section, listing items like '靜脈總論' (108), '靜脈管、淺在靜脈、深在靜脈、靜脈' (108), '靜脈各論' (109), '甲、肺靜脈' (109), '乙、全身循環の靜脈' (109), '上大靜脈幹' (110), '上肢の淺靜脈' (110), '胸部の靜脈' (110), '下大靜脈幹(體壁靜脈、内臟靜脈)' (111), '總腸骨靜脈' (111), '内腸骨靜脈、外腸骨靜脈' (111), '下肢の淺靜脈' (111), '動脈と靜脈の區別' (112), '自動中樞、反射中樞' (116), '脊髄に就いて略述せよ' (117), '大後頭孔を通過するもの名稱' (117), '腦神經の名稱。並に機能的區別' (118), '神經知覺神經の區別をせよ' (118), '此の神經記憶歌' (118), '嗅神經、視神經' (119), '動眼神經、滑車神經' (119), '三叉神經の起始經過分佈の概略並に作用' (119), '眼神經、上頸神經、下頸神經' (120), '三叉神經の機能(即ち生理)' (121), '外旋神經' (122), '顔面神經經過の概略及び分佈並に生理' (122), '聽神經' (123), '前庭神經、蝸牛殼神經' (123), '舌咽神經' (124), '迷走神經の起始經過分佈の狀態' (124), '迷走神經一覽表' (125), '迷走神經生理作用(機能)' (125), '迷走神經緊張症' (126).

頸部に於ける迷走神経の経路……………一三六
 副神経の起始經過並に同神経の分佈する筋の名稱並に機能……………一三六
 舌下神経……………一三七
 交感神経に就いて自律性神経に就いて……………一三七
 自律性神経系統……………一三八
 胸腰部自律性神経系統……………一三八
 交感神経系統、頭部自律性神経系統……………一三八
 副交感神経、薦部自律性神経系統……………一三八
 グアゴトニー、シンバチゴトニー……………一三八
 脊髄神経の區別並に分佈……………一三八
 上頸叢の(一名頸神經叢)……………一三九
 分佈と其の枝別……………一三九
 下頸叢(一名膊神經叢)……………一三〇
 三神經幹……………一三〇
 尺骨神経の起始經過分佈……………一三〇
 正中神経……………一三一
 撓骨神経……………一三一
 肋間神経を解剖的に説明せよ……………一三二
 腰神經叢……………一三二
 下腹部、大腿部……………一三三
 薦骨神経とは何ぞや分佈の概略……………一三三
 總陰部神経(其他)……………一三四

坐骨神経の起始經過……………一三四
 枝別分佈並に作用……………一三五
 神經一覽表……………一三五
 腦神經(十二對)……………一三五
 脊髄神經(三十一對)……………一三七
 自律性神経(植物性神経)……………一三九
 交感神経……………一三九
 副交感神経……………一四〇

第三章 生活體に就て

顔面各部の名稱……………一四〇
 生活體の前頭部の著明なる部を説明せよ……………一四〇
 生活體の前頭壁に就いて……………一四一
 腦頭蓋の外表に於ける神經脈管……………一四一

第四章 筋と神經脈管の關係

背部筋の名稱並に……………一四二
 血管神經との關係……………一四二
 腹筋と神經及び脈管との關係……………一四二
 肩胛筋の名稱並に分佈する神經……………一四三
 肘關節に於ける前側及び内側の筋と之を通過する血管神經の名稱……………一四四

肘關節前面即ち肘窩に於ける筋と神經脈管の關係……………一四四
 腋窩を通過する神經……………一四五
 血管筋の關係……………一四五
 腋窩動脈の起始經過並に……………一四五
 靜脈神經との關係……………一四五
 上肢の血管神經の名稱……………一四六
 上肢に分佈する血管と其の經過……………一四六
 並に下肢に分佈する神經の經過……………一四六
 下肢の血管……………一四八
 股神經と血管筋肉との關係……………一四九
 頸部を經過する血管及び神經……………一四九
 前胸壁に於ける筋と神經脈管……………一五〇
 顔面に於ける筋と神經脈管の關係……………一五一
 拇指に分佈する神經動脈並に經過……………一五二
 跗趾に分佈する神經と動脈の經過……………一五二
 正中神経と筋肉及び脈管との關係……………一五三
 四肢の皮下を走る血管及び……………一五三
 神經に就て説明すべし……………一五三
 上肢に於ける血管及び神經の經過を記せ……………一五四

第五章 著明なる筋窩

上頸三角部……………一五五
 下頸三角部……………一五五

顎下三角部……………一五五
 胸骨上窩……………一五六
 鎖骨上窩……………一五六
 鎖骨下窩……………一五六
 (大胸三角筋窩、モールンハイム氏窩)……………一五六
 腋窩を構成する筋肉の名稱並に腋窩通過する神經脈管の名稱と位置……………一五七
 肘窩……………一五七
 鼠蹊窩(腸靴窩)……………一五八
 フーバト氏靱帯とは何ぞ並に此の下を通ずるもの、名稱……………一五八
 キンペルナート氏靱帯……………一五九
 大坐骨孔とは何ぞや並に大坐骨孔を通ずるもの、名稱……………一五九
 小坐骨孔を通ずるもの、名稱……………一五九
 膝窩を構成する筋の名稱並に神經と脈管との關係……………一六〇

第二編 生理學
第一章 循環器生理

心臟の生理的作用……………一六一
 心臟の神經……………一六一
 心臟の内部所見……………一六二
 脾の機能……………一六二

送血器官とは何ぞや……………一六二
 血液の組成成分を述べよ……………一六二
 血液の生理的作用及び其の成分……………一六二
 血液の性状、血球の作用及び形状……………一六二
 血清……………一六三
 血球の形状及び區別……………一六四
 白血球に就いて、白血球の作用……………一六四
 赤血球(ヘモグロビン)……………一六五
 血小板……………一六五
 大循環と小循環の差違……………一六六
 血液循環に就いて……………一六六
 循環を生ずるは……………一六六
 胎兒の血液循環……………一六六
 血液運行……………一六七
 血流の速度……………一六七
 心臟の運動に及ぼす神經的作用……………一六八
 心音を聴取し得る場所……………一六八
 血壓に就いて(普通の血壓)……………一六八
 心尖搏動即ち心搏動が起るの理……………一六九
 脈膊は如何にして起るか……………一七〇
 血液凝固に就いて……………一七〇
 (トロンピン、トロンボキナーゼ)……………一七〇

血管の神經に就いて……………一七一
 血管縮小神經、血管擴張神經……………一七一
 動脈血と靜脈血の差異……………一七一
 淋巴(淋巴系統)に就いて……………一七一
 淋巴管の構造、淋巴液、淋巴の作用……………一七二
 淋巴腺並に生理機能(作用)……………一七三

第二章 呼吸生理

肺の位置形状作用……………一七四
 瓦斯交換に就て、附り肺活量……………一七四
 呼吸の種類及び生理的作用……………一七四
 呼吸の目的、呼吸は如何にして起るか……………一七四
 内外呼吸に就て知る所を記せ……………一七五
 呼吸の機械的作用、化學的作用……………一七五
 呼吸の原理……………一七六
 生體に呼吸の必要なる理由……………一七六
 安靜呼吸シャイネストック氏……………一七六
 呼吸、人工呼吸……………一七六
 特別の場合の呼吸……………一七七
 呼吸の主幹神經、呼吸……………一七七
 中樞の所在、生活點……………一七七
 鼻腔の生理作用……………一七七

第三章 消化生理

口腔の消化作用(理學的消化、化學的消化)……………一七八
 嚥下運動……………一七八
 唾液の消化作用(生理的作用)……………一七九
 唾液の化學的成分及び其の作用……………一七九
 口腔咽頭腔の神經……………一七九
 胃の消化作用(胃の理學的、化學的消化)……………一八〇
 胃の位置及び生理的作用(機能)……………一八〇
 胃を支配する神經の名稱及び作用……………一八一
 胃の消化作用及び分佈する……………一八一
 胃の知覺運動に對する神經……………一八一
 胆汁の消化作用……………一八二
 チヤスターゼ、アミラーゼ其他……………一八二
 腸の生理作用……………一八三
 小腸及び大腸の生理作用……………一八三
 腸の理學的消化、腸の化學的消化……………一八三
 腸の吸收、排泄機能……………一八四
 消化液の種類及び作用……………一八四
 消化作用(機械的消化、化學的消化)……………一八四

含水炭素の消化に就いて……………一八五
 腸の神經に就いて……………一八五
 脱糞中樞脱糞機能糞臭に就いて……………一八六
 アナドリーヂス……………一八六
 分泌(外分泌とは、内分泌とは)……………一八六
 榮養物質……………一八七
 榮養素に就いて……………一八七
 蛋白質、含水炭素其他……………一八七
 脂肪、ビタミン、鹽類、水、鐵……………一八八
 成人が一日攝取する保健食中に含有せる各榮養素並に其の分量を記せ……………一八八
 カロリーとは何ぞや我々は一日に幾カロリーを要するか……………一八八
 標準保健熱量(カロリー)……………一八八
 フォイト氏保健食量……………一八九
 ヴイタミン……………一八九
 一般生活條件……………一九〇
 我々の活力は何によつて發現するか……………一九〇
 且つ活力は何に轉換するか……………一九〇
 嗜好品とは何か並に榮養上の價値(吸收とは、同化とは)……………一九〇

溫原……………一九一
 溫熱發生の理由及び四時同溫を保つ理由……………一九一
 人體の體溫調節機能……………一九二
 化學的調節……………一九二
 理學的調節……………一九二
 人工的調節……………一九二
 體溫と脈搏と呼吸との關係……………一九三

第四章 筋肉生理

筋肉の種類及び生理的作用……………一九三
 横紋筋(隨意筋)……………一九三
 平滑筋(不隨意筋)……………一九四
 筋の成分(附り 人體を構成する元素)……………一九四
 組織運動……………一九五
 筋刺戟運動の速度重複傳導……………一九五
 顔面筋が良く種々なる表情を爲し得る理由……………一九五
 關節の運動と筋の横杆(てこ)作用……………一九五

第五章 感覺器生理

皮膚の構造並に其の作用……………一九六

第六章 神經生理

皮膚の構造……………一九六
 皮膚中に存在する必要な器官……………一九八
 五器官の名稱と機能……………一九八
 五器官の名稱と構造を簡單に述べよ……………一九八
 觸神、視神、聽神……………一九八
 味神、嗅神……………一九九
 唐からしわさび等の感覺……………一九九
 内部感覺……………二〇〇
 近視眼とは何か並に如何なる眼鏡を用ゆべきか……………二〇〇
 關節及び筋、腱の感覺……………二〇〇
 神經とは何ぞや(又は神經の機能)……………二〇一
 神經の作用及び種類……………二〇一
 神經の區別及び生理的作用……………二〇一
 神經系の構成單位……………二〇四
 神經の作用……………二〇四
 神經細胞の興奮……………二〇四
 神經傳導の方向……………二〇五
 神經の反射作用……………二〇五
 脱糞作用……………二〇五

神經の傳達機能……………二〇六
 腦神經の名稱を挙げ且つ知覺運動の區別を明記せよ……………二〇六
 腦十二對の神經の作用……………二〇六
 腦神經の名稱及び分佈……………二〇六
 三叉神經の起始經過……………二〇八
 分佈並に其の機能……………二〇八
 顏面神經の起始經過……………二〇八
 迷走神經の起始經過……………二〇八
 迷走神經の作用……………二〇八
 副神經の起始經過……………二〇八
 副神經の構造及び機能……………二〇八
 脊髓の構造及び機能……………二〇九
 脊髓より發する前根後根及び其の機能……………二〇九
 撓骨神經は運動神經か知覺神經か……………二一〇
 反射運動の實例を挙げて其の起る理由を説明せよ……………二一〇
 坐骨神經の作用……………二一一
 生活(物質代謝、勢力轉換)……………二一一
 生活の目的……………二一一
 拮抗筋を説明し其の實例を挙げよ……………二一二
 筋の疲労は如何なる理由か……………二一二

第七章 雜之部

肝臟の位置形狀機能(附り 膽汁)……………二一三
 脾臟の位置形狀構造並に其の機能……………二一三
 腎臟の位置並に機能……………二一三
 卵巢の位置形狀作用……………二一四
 内分泌腺……………二一四
 甲狀腺の機能……………二一四
 發汗作用を説明せよ……………二一四
 「汗の效用」、「汗腺分泌神經は何ぞ」……………二一四
 利尿作用、尿の分泌作用……………二一五
 尿の性状及び主成分……………二一五
 腎臟の生理的作用(機能)……………二一六
 睡眠とは何か其の起る理由を述べよ……………二一六
 夢……………二一六
 附り 免疫學……………二一七
 免疫性……………二一七
 感受性……………二一七
 身體の保護裝置……………二一七
 先天性免疫……………二一八
 後天性免疫(自動免疫、自動免疫)……………二一八
 免疫の特異性……………二一八
 抗毒素……………二一八

内務省令鍼灸術取締規則中施鍼時に對してのみ消毒規定ありて施灸時に對して此の事なき理由を述べ、二五九若し消毒の必要ありとせば其の方法につき詳述せよ

内務省令に依る清潔法及び消毒法二六〇

内務省令清潔方法……………二六〇

内務省令消毒方法……………二六一

改正日本薬局法……………二六八

第四編 鍼灸科醫學

第一章 鍼科醫學

鍼術の意義(附り 古代の九鍼の應用、鍼とは何ぞや)……………二六九

刺戟の意義……………二六九

鍼の人體に及ぼす作用影響を記せ二六九

藤井、岡、水野博士……………二六九

鍼術の目的……………二七一

刺戟刺戟の健體作用如何……………二七一

鍼の生理的作用を擧げよ……………二七一

鍼は皮膚より内部の如何……………二七二

なる組織を刺すか……………二七二

鍼の治療的作用、鍼が疾病に效ある所以、鍼の效能に就いて……………二七二

養生鍼、鍼の疾病豫防に及ぼす影響……………二七三

鍼の(が)神經機能に及ぼす作用……………二七三

鍼術にて鎮靜作用を目的とするには如何なる方法をとるか……………二七四

鍼の(鍼術)の興奮作用……………二七四

鍼の誘導……………二七四

刺戟の加減(分量)は如何によつてなるか……………二七五

鍼に依る刺戟の強弱(分量)は如何にして行ふか……………二七五

強刺戟、弱刺戟……………二七五

鍼の構造……………二七六

鍼は一番から十番位迄……………二七六

鍼灸の構造並びに利害得失……………二七六

木村徳衛博士の實驗……………二七七

大久保適齋學士の記す所……………二七七

三浦謙之助博士の業績……………二七七

後藤道雄博士の文獻……………二七八

(經穴とヘッド氏帯)……………二七八

ヘッド氏帯の檢出法……………二七八

藤井秀二博士の小兒鍼の研究業績……………二八一

水野重元博士の研究業績……………二八三

鍼的刺戟は骨系統に如何なる影響を及ぼすや……………二八五

神經痛に對する刺戟の目的……………二八五

刺戟の方法……………二八六

刺戟の際折鍼する事あり……………二八六

其の時の處置……………二八六

折鍼せざるようにするには如何にするか……………二八六

折鍼に就いて……………二八八

大久保適齋氏の折鍼に關する所説……………二八八

解剖學的禁穴と所謂……………二九一

禁穴との差異……………二九一

刺戟は如何なる部にすべきや且つ其の理由……………二九一

鍼治の適應症……………二九二

鍼術に於いて最も有効なる主なる病名を擧げよ……………二九二

鍼術の適應症 不適症 禁忌症……………二九三

鍼の禁忌症……………二九三

刺戟の際に於ける押手(壓手)の任務……………二九三

長鍼大鍼の特徴……………二九四

刺戟の加減(分量)は如何によつてするか……………二九四

刺戟の際の注意事項……………二九四

刺戟に際し術者は如何なる準備を要するか……………二九四

管鍼と捻鍼とは如何なる患者にするか……………二九五

附り 無分流(打鍼)……………二九五

刺戟により刺戟を強大ならしむるには如何なる方法によるか……………二九六

記せよ……………二九六

鍼術の有感及び無感的刺戟の治療上に及ぼす作用……………二九六

鍼の連續的刺戟と斷續的刺戟との治療的價值如何……………二九六

刺戟刺戟の身體組織の異なるに依り其の感受性に差異を生ずる理由……………二九七

腦脊髄神經と交感神經とに對する鍼術反應の差異及び結果……………二九七

腦脊髄神經、自律性神經……………二九七

末梢神經に對する鍼の生理的作用……………二九八

鍼の腸管に及ぼす作用……………二九九

鍼の作用及び押手の要點……………二九九

鍼の刺方と作用……………三〇〇

筋運動神經に於ける……………三〇〇

鍼の生理的作用……………三〇〇

皮膚刺戟方法及び生理的作用……………三〇一

竝に治療應用の效果……………三〇一

小兒皮膚病の原理に就いての解説……………三〇二

皮膚鍼の自律神經系に對する作用……………三〇二

刺戟法の手技及び其の生理學的……………三〇二

作用……………三〇二

刺戟の各手技を擧げて之を説明せよ……………三〇三

單刺戟、旋捻術、廻旋術、雀啄術……………三〇三

間歇術、皮膚鍼……………三〇三

振蕩術、散鍼術、置鍼術……………三〇四

打管術、轉向術、杉山……………三〇四

流(亂れ)の法……………三〇四

鍼の天地人三才の法……………三〇四

炎症に對する鍼の作用……………三〇五

炎症に對する刺戟の可否……………三〇五

炎症又は腫物に禁鍼せる理由……………三〇五

鍼の消炎作用……………三〇六

ヘッド氏帯施鍼の效果……………三〇六

刺戟後、其の部に粟粒の如きものを生ずるは何に原因するか……………三〇七

鍼の副作用?又は豫期せざる結果を來す事もあると云ふ如何なる事か……………三〇七

如何なる患者が痛覺が大なるか……………三〇八

遺感覺とは何ぞや……………三〇八

鍼の響とは何ぞや……………三〇八

鍼は如何なる金質が最もよきか……………三〇八

銀鍼の長所……………三〇八

腹膜に對する刺戟の可否如何……………三〇九

(附り 腹膜の知覺)……………三〇九

腹部刺戟に際し留意すべき事項……………三〇九

生後幾日位から刺戟して差支なきか……………三〇九

嬰兒を刺す事奈何……………三〇九

刺戟の強弱緩急と患者の體質及び病の輕重の關係を説明せよ……………三一〇

刺戟刺戟の選擇機能……………三一〇

刺戟の血管に及ぼす影響……………三一〇

鍼術の血液に及ぼす影響……………三一〇

鍼が血液に及ぼす作用……………三一〇

血行に及ぼす刺戟の作用……………三一〇

止血法として鍼の效ある理由……………三一〇

交感神經に對する鍼の生理的作用……………三一〇

鍼の種類と應用を問ふ……………三一〇

古代の九鍼と其の應用……………三一〇

三 稜 鍼……………三一〇

項部及び肩上に刺戟して屢々腦脊血を起す事あり其の理由及び處置……………三一〇

頸部に鍼術を施す際に危害を誘起する場合ある理由を列挙して……………三一〇

説明せよ……………三一〇

胸部に刺鍼する場合特に注意すべき事項を記せ……………三二七
 失鍼に對する處置如何……………三二七
 失鍼の典據……………三二七
 澁鍼とは如何其の原因處置……………三二七
 足へ刺鍼して全治する腹部の病名三二八
 足へ鍼したならなぜ……………三二八
 腹の病氣が治るか……………三二八
 妊娠時に於ける刺鍼の可否……………三二八
 妊娠子宮各月の大小……………三二八
 打撲傷に對する鍼の可否……………三二八
 竝に其の理由……………三二八
 瘰癧……………三二八
 刺鍼法の種類……………三二八
 甲、管鍼法(杉山流)乙、燃鍼法(古法)……………三二八
 直刺 橫刺 斜刺……………三二八
 地平鍼、鉛直鍼……………三二八
 肩膊に對する刺鍼點……………三二八
 心悸亢進を治療するに如何なる所を治療するか……………三二八
 手の三里合谷等に刺鍼して誘導作用となる理由……………三二八
 治療の反射作用……………三二八
 刺鍼による組織的變化……………三二八
 三浦謙之助博士の實驗測定……………三二八

頭部及び顔面の刺鍼に對して殊に注意すべき事項……………三二五
 大久保適齋氏の還血法……………三二五
 興奮に對する誘導法……………三二五
 瘰癧に對して鍼の效ある理由とその刺鍼法……………三二五
 廣汎性疼痛に對し刺鍼刺戟の效用竝に其の理由……………三二五
 興奮を應用する場合……………三二五
 皮膚刺鍼に於ける價值……………三二五
 刺鍼に就いて注意すべき事項……………三二五
 鍼術には如何なる流派ありや……………三二五
 一時鍼術が衰退せし理由……………三二五
 明治以來鍼術に就いて科學的研究をした人は誰れか……………三二五
 鍼の歴史……………三二五

第二章 灸科醫學

灸術の意義……………三二四
 灸術を廣義に解して、溫灸は……………三二四
 大書院判決例、經驗と傳統……………三二四
 灸の生理的作用……………三二四
 灸の身體に及ぼす影響……………三二四

原田、櫻田兩學士……………三三〇
 後藤道雄博士、時枝薫博士……………三三二
 青地正晴博士、原志免太郎博士、駒井一雄博士、瀧野憲照博士……………三三二
 太田峻二博士……………三三三
 灸術の疾病治療に及ぼす作用……………三三三
 灸の本態及び治療作用……………三三三
 灸の治療的意義……………三三三
 灸の奏效する理由……………三三三
 要約……………三三五
 参考文献……………三三五
 灸の醫治效用一般……………三三六
 灸術が免疫體に及ぼす影響を記し其の理由を説明せよ……………三三七
 灸の心臟機能に及ぼす影響……………三三八
 灸の大きさ如何……………三三八
 艾葉はどんなものがよいか……………三三八
 (附) 一般定量分析、其の原素……………三三九
 艾炷の燃焼熱度(溫度)……………三四〇
 灸熱の溫度の及ぶ深さ……………三四〇
 艾灸の溫度の深達作用……………三四〇
 火傷の種類及び其の症狀……………三四一

艾灸に依る火傷の種類……………三四一
 第一度の火傷……………三四一
 第二度の火傷……………三四一
 第三度の火傷……………三四二
 灸と小火傷との作用の異同……………三四二
 灸の種類及び生理的作用……………三四三
 溫灸、味嚼灸、にんにく灸、水灸、漆灸、墨灸、有癩痕灸、無癩痕灸……………三四三
 灸の種類と效用を擧げよ……………三四四
 灸の種類及び方法……………三四四
 有癩痕灸、無癩痕灸……………三四九
 灸の大小壯數に就いて……………三四五
 灸に大小壯數の區別あるは何故か……………三四五
 醫艾一灼、一壯……………三四六
 施灸により起る局所の組織的變化……………三四六
 灸の血管神經に及ぼす影響作用……………三四六
 灸痕の生ずる理由……………三四七
 施灸後の皮膚は如何……………三四七
 施灸すれば皮膚に如何なる變化を來すや……………三四七
 もぐさの良悪とそれが皮膚に對する作用……………三四七
 施灸時の取穴法(施灸の寸取法)……………三四八

骨度法とは何ぞ……………三四八
 靈樞骨度篇……………三四八
 施灸後に時々化膿する事あり其の理由竝に組織的變化……………三四九
 灸痕が化膿した場合の處置法……………三四九
 灸後の處置……………三五〇
 灸點後に生ずる危害豫防法……………三五〇
 灸の誘導作用……………三五〇
 灸の反射作用……………三五〇
 灸の直接刺戟、及び其の作用……………三五〇
 灸の刺戟療法としての價值如何……………三五〇
 直接刺戟、間接刺戟……………三五〇
 灸術局所作用の適應症を擧げ其の奏效理由を説明すべし……………三五〇
 灸の末梢神經に對する作用……………三五二
 無癩痕灸と有癩痕灸との優劣……………三五二
 蛋白質體の注射と灸との差異點……………三五三
 同身寸とは何ぞや(附) 同指寸……………三五三
 灸治の忌目とは何ぞや……………三五四
 方術の書に……………三五四
 灸の適應症……………三五四
 灸治の禁忌症、灸治の不適應症……………三五六
 灸治の適せざる場合……………三五六

灸の禁忌症を擧げて其の理由を記せ……………三五七
 灸の適應症と禁忌症に就いて……………三五八
 施灸を禁すべき身體の部位竝に疾病の種類(灸を禁すべき部位)……………三五八
 灸熱の緩急を論じ其應用を問ふ……………三五八
 皮膚病に就き灸の適應症を擧げ其の理由を説明せよ……………三五九
 灸熱刺戟による有害なる反應に就き記せ……………三五九
 禁穴に灸治を施さざる理由……………三六〇
 灸が血液に及ぼす作用(影響)……………三六〇
 灸が血液に及ぼす作用(影響)……………三六一
 作用に就いて知れる所を記せ……………三六一
 解題文獻抄……………三六一
 血脈に及ぼす作用は、血液に及ぼす作用は、血管に及ぼす作用は……………三六一
 要約……………三六三
 原志免太郎博士の研究業績……………三六四
 灸の血色素量に赤血球に及ぼす影響……………三六四
 施灸皮膚の組織學的研究……………三六五
 灸の白血球に及ぼす影響……………三六五
 灸を施せる結核動物の治癒傾向に就いて……………三六六
 施灸の分量(ドーゼ)……………三六六

灸の神經に及ぼす作用……………三六八
 灸が疾病豫防に價値ある理由……………三六八
 養生灸とは何ぞや其の理由……………三六九
 一切の病三里に灸す……………三七〇
 傳染病と灸との關係……………三七〇
 傳染病、灸との關係……………三七〇
 法規との關係……………三七一
 灸治によつて深部臟器の病變を調節し得る二例を示せ……………三七一
 有熱患者に對する施灸の可否竝に其の理由……………三七二
 足の三里に施灸して如何なる徵候を呈するや……………三七三
 三里の灸の效用……………三七三
 名灸とは何か近代醫學上よりの見解を述べよ……………三七四
 一ツ灸とは何ぞ各々感ずる所を述べよ……………三七四
 灸してすぐ死す病名……………三七五
 背部膏肓に施灸して如何なる效あるか……………三七五
 灸術とヘッド氏帶との關係……………三七六
 内臟疾患の場合に起る皮膚知覺異常と灸治との關係を記し其の奏效する理由を説明せよ……………三七六
 灸の療學に對する效用を記せ……………三七七

麻痺に灸術を施す時は如何なる作用ありや……………三七七
 灸返し法の法とは如何……………三七七
 局所貧血に施灸して效ある理由……………三七八
 貧血を灸に依つて治し得る理由……………三七八
 灸あたりて就いて……………三七八
 灸の中毒作用とは如何なるものか……………三七八
 施灸量は何によつて決定するや……………三七九
 艾の大小壯數を定むる標準如何……………三七九
 灸の柱へ方……………三七九
 灸術の手法……………三七九
 施灸前注意すべき事項……………三八〇
 患者に對して如何なる法をとるや……………三八〇
 灸術と鍼術の異なる點を記せ……………三八〇
 現今次第に灸治の發達しつゝある理由……………三八二
 艾葉とは何ぞや竝にこれが治療上の選擇……………三八二
 もぐさの種類、散り艾切り艾とは……………三八三
 灸熱に堪へ難き人には如何にすべきか……………三八三
 病者氣弱……………三八三
 灸の歴史に就いて知る所を記せ……………三八四

明治以後の灸に關する科學的研究 三八四

第五編 經穴學問題 之部

穴とは如何、經穴とは如何……………三八五
 古書に曰く……………三八五
 鍼灸療法が經穴に基づく理由……………三八五
 鍼灸術と經穴との關係……………三八五
 經穴は……………三八五
 經穴とは何ぞ現代醫學上よりの見解を述べよ……………三八六
 古來よりの禁灸穴中著明なる穴……………三八七
 五穴を擧げ禁すべき理由を記せ……………三八七
 六ツ灸の部位と之を應用する疾病に就いて……………三八八
 陽明大腸經の經絡の解剖的部位……………三九〇
 胃の六ツ灸とは何か……………三九〇
 次の諸穴の部位を記せ……………三九一
 瘰癧、關元、懸鐘……………三九一
 張介賓氏四華の取穴法……………三九一
 同氏患門の二穴……………三九一
 崔知悌氏四華の穴……………三九二
 同氏患門の穴……………三九二
 痞根灸如何……………三九二

竹杖の灸とは如何……………三九二
 騎竹馬の灸とは如何……………三九三
 腰眼の灸とは如何……………三九三
 階段灸とは如何……………三九三
 脊背五穴の取穴法……………三九三
 五臟とは何ぞ……………三九四
 五臟の穴……………三九四
 六腑とは何ぞ……………三九四
 六腑の穴とは何ぞ且つ其の部位を詳記せよ……………三九五
 募 穴……………三九五
 兪募の穴……………三九六
 胃に當る穴名と刺鍼の深さ如何……………三九六
 前頭部髮際にある穴名竝に其の穴名中に禁鍼穴あらば其の名稱を記せ……………三九七
 胸部腹部に於ける禁鍼穴を記し鍼の注意を記せ……………三九七
 大迎曲池足の三里の部位竝に解剖的關係……………三九八
 胃痙攣の要穴を記せ……………三九八
 背部禁鍼穴名を記せ……………三九八
 曲垣の解剖的部位竝に之に關係する血管神經……………三九九
 胸部及び腹部に於ける禁鍼穴を問ふ……………三九九

阿是の穴とは何ぞや……………三九九
 左の經穴の部位を問ふ……………三九九
 人迎、風池、中庭……………三九九
 石門の部位及び鍼灸の可否……………四〇〇
 足の踵にある經穴の名稱及び其の部位……………四〇〇
 承山崑崙は如何なる疾に應用するか……………四〇〇
 白條に有する經穴の名稱及び部位……………四〇〇
 脊柱の兩側三寸にある穴名を擧げよ……………四〇一
 三陰交心俞の解剖的位置……………四〇一
 竝に血管神經の關係……………四〇一
 俠白尺澤の部位と主治を語れ……………四〇一
 頸部に存する穴名と禁鍼灸の區別竝に其の應用を記せ……………四〇二
 經穴の問題は……………四〇二
 左の經穴を記せ……………四〇三
 (1)鳩尾(2)陰交(3)石門(4)肩井(5)氣管湧泉の取穴法を問ふ……………四〇三
 大迎肩髃伏兪の部位竝に適應症……………四〇三
 翳風鄰門四白消瀆陽陵泉の位置竝に其の部の神經と此の穴を應用する主なる疾病を記せ……………四〇四
 孔穴と經穴の關係を記せ……………四〇五
 補瀉迎隨とは何ぞや……………四〇五
 古法による鍼の刺技法……………四〇五
 手の陽明大腸經中眼の疾患に用ゆる三穴を擧げて其理由を説明せよ……………四〇六

頭部正中線の穴名と部位を記せ……………四〇六
 十四經に就いて知る所を記せ……………四〇六
 鍼灸賦四總則……………四〇七
 井榮兪原經合の説……………四〇七
 十四經名の記憶法……………四〇八
 漢法とは……………四〇九
 鍼灸併用不可……………四〇九

第六編 鍼灸診斷 鑑別學

問 診……………四一〇
 視 診……………四一〇
 普通理學的內科的診察法……………四一〇
 診 察……………四一〇
 不問診察法(附り漢法醫學の診察法)……………四一〇
 各器官の診察要綱……………四一一
 呼吸器……………四一一
 循環器、消化器、神經系、感覺器……………四一二
 泌尿器、生殖器……………四一三
 疾病は何によつて起るか……………四一三
 漢法醫學の病因……………四一三

内因外因とは……………四一四
 病因と鍼灸醫術との關係……………四一四
 治療とは……………四一四
 官能的疾患、器質的疾患……………四一五
 症候……………四一五
 發病 經過 轉歸 豫後……………四一六
 豫後の分類……………四一六
 經過の區別……………四一七
 疾病進行状態による區別……………四一七
 全身病局所病……………四一七
 續發症合併症……………四一八
 進行性病變……………四一八
 退行性病變……………四一八
 炎 症(焮症)……………四一八
 一般消炎法……………四一九
 水腫と浮腫の區別を……………四二〇
 神経痛と神経炎との區別……………四二〇
 神経性疼痛と炎症性疼痛との區別……………四二一
 知覺神經の刺戟症狀……………四二一
 神經痛(總論)……………四二二
 原發性神經痛は、症候性神經痛は……………四二二
 癩 癩(總論)……………四二三

癩癩様抽搐、擊縮、震顫……………四二三
 舞踏狀運動、アテトイゼ……………四二三
 癩 癩(總論)……………四二三
 脊髄斷區とは……………四二四
 下肢の運動障碍は如何なる場合……………四二五
 合に來るや其の主例を五ツを……………四二五
 あげて鍼術の適否を記せ……………四二五
 肩引肩を越すとは何ぞや……………四二六
 癩とは何か竝に其の鍼灸の……………四二六
 部位を記せ……………四二六
 痛とは何か竝に痛が腹に……………四二六
 入るとは何ぞや……………四二六
 ルンパリーコ(俗名)とは何ぞや……………四二七
 肋間神経痛と肋間筋ロイマ……………四二七
 チスとの鑑別と其の療法……………四二七
 漿液性關節炎の症狀鑑別及び……………四二七
 灸治の奏效理由を問ふ……………四二七
 急性關節ロイマチスと其……………四二八
 の他の關節炎との鑑別……………四二八
 淋毒性關節炎、ヒステリー性關節……………四二八
 痛痛結核性關節炎、鐵毒性關節……………四二八
 炎痛風其の他の假性關節炎……………四二八
 慢性關節ロイマチス其の……………四二九
 他の關節炎との鑑別……………四二九
 腹痛の診斷……………四三〇
 肋膜炎と肋間神経痛との鑑別……………四三二
 脊髄癱瘓と脚氣癱瘓との區別……………四三二
 中樞癱瘓と末梢癱瘓との鑑別……………四三三

關節ロイマチスと神經痛との鑑別……………四三三
 腸癩癩と急性腹膜炎との鑑別……………四三三
 胃神經痛(胃癩)と膽石……………四三四
 疝痛との鑑別……………四三四
 胃潰瘍と慢性胃加答兒との鑑別……………四三四
 瀉劑とヒステリー大發作との鑑別……………四三五
 腦充血と腦貧血との鑑別……………四三五
 腦性嘔吐と胃性嘔吐との鑑別……………四三五
 三叉神經痛と偏頭痛との鑑別……………四三六
 充血鬱血との鑑別……………四三六
 胃痛と胃潰瘍の鑑別……………四三六
 腹水と卵巢囊腫との鑑別……………四三七
 妊娠と卵巢囊腫との鑑別……………四三七
 肺結核と慢性氣管枝……………四三八
 加答兒との鑑別……………四三八
 咯血と吐血の區別……………四三八
 咽頭微毒と咽頭喉頭結核との鑑別……………四三八
 肺結核と肋膜炎との鑑別……………四三九
 腺病と遺傳微毒との鑑別……………四三九
 アテトイゼと舞踏病との鑑別……………四三九
 坐骨神經痛と股關節炎との鑑別……………四四〇

第七編 鍼灸病理學各論
 第一章 內科學の部

感冒の原因症狀灸療法……………四四一
 穴名奏效する理由……………四四一
 喉頭加答兒の原因症狀治穴目的……………四四一
 口内炎兼齒齦炎の……………四四一
 原因症狀鍼灸穴名……………四四一
 衄血に對する刺戟法及び刺戟點……………四四三
 急性慢性鼻加答兒の……………四四三
 原因症狀鍼灸療法……………四四三
 神經性食道痙攣の原因症狀療法……………四四三
 胃痙攣の刺戟部位刺戟法及び穴名……………四四四
 胃痙攣の刺戟の目的……………四四四
 胃痙攣に對する鍼灸療法……………四四五
 及び膽石痛との鑑別……………四四五
 胃痙攣の鍼灸點……………四四六
 急性胃加答兒の原因症狀鍼灸療法……………四四六
 慢性胃加答兒の鍼灸療法……………四四六
 胃加答兒の灸治目的と部位を記せ……………四四六
 慢性胃加答兒に灸治が奏效する理由……………四四七
 胃擴張に對する施鍼目的……………四四七
 及び刺戟點と其の理由……………四四七
 胃擴張に對し胃脘三焦俞に……………四四七
 施灸して效を奏する理由……………四四七
 胃擴張の原因灸治點……………四四七
 胃擴張の症候鑑別鍼灸法……………四四八
 胃擴張症に對する灸治の目的……………四四九

神經性消化不良の灸穴竝に壯數……………四四九
 神經性消化不良に對する……………四四九
 鍼灸法と注意……………四四九
 神經性胃筋弛緩症の原因……………四五〇
 (名胃弱)症狀治療穴名……………四五〇
 竝に之に奏效する理由……………四五〇
 胃酸過多症の原因竝に……………四五一
 施灸部位奏效の理由……………四五一
 胃酸過多症の原因と其の徵候……………四五一
 消化不良の施灸點……………四五一
 內臟動脈軸……………四五一
 三焦俞と內臟動脈軸との關係……………四五一
 胃の諸症中鍼灸の禁忌症と……………四五三
 其の理由……………四五三
 胃潰瘍、肺炎、盲腸炎、筋肉……………四五四
 ロイマチス、偏頭痛に對する……………四五四
 鍼の適否を記し、其の適する……………四五四
 ものに就て理由を記せ……………四五四
 適せざるもの、理由……………四五四
 慢性胃加答兒に對し施灸經穴中……………四五四
 主なるもの十穴を擧げてその灸……………四五四
 の奏效する理由を述べよ……………四五四
 腸痛の原因刺戟の……………四五五
 目的奏效の理由……………四五五
 腸痛とは如何その刺戟法……………四五六
 及び奏效の理由……………四五六
 腸神經痛の症狀並に鍼灸法……………四五六
 腸痛痛の主なる徵候及び鑑別……………四五七

疝痛の種類其の特徵鍼術の適否……………四五七
 疝痛とは如何なる病なるや……………四五七
 疝痛に就て……………四五八
 鼓腸の原因症狀と其の治療穴名……………四五八
 腹水の原因症狀治穴……………四五九
 急性汎發性腹膜炎の原因症狀……………四六〇
 如何に鍼灸の可否……………四六〇
 結核性腹膜炎及び慢性腹膜炎……………四六〇
 の原因症狀治穴……………四六〇
 腹膜炎に對する灸の利害……………四六〇
 盲腸炎の原因症狀並に灸治法……………四六二
 盲腸炎、盲腸周圍炎、蟲樣突……………四六二
 起炎盲腸外膜炎の原因、症候……………四六二
 鍼灸療法の可否慢性盲腸炎……………四六二
 急性盲腸炎……………四六三
 腸狭窄、イレウス、其他禁忌性……………四六四
 胃潰瘍の原因症狀治療穴名……………四六四
 腸寄生蟲とは何ぞや其の症狀……………四六五
 と治療法並に鍼灸の可否……………四六五
 寄生蟲の種類……………四六六
 便秘に對する鍼灸法……………四六六
 常習便秘の原因並に其の灸療法……………四六六
 並に其の目的を記せ……………四六七
 胃痛の原因症狀治穴……………四六七
 痔の症狀並に鍼灸療法……………四六八

痔核、痔瘻……………四六八
慢性腸加答兒の原因症狀……………四六九
竝に鍼灸治法……………四七〇
腸筋肉弛緩症に對する刺灸の目的及び刺灸の部位……………四七〇
腹部の疾病の鍼灸禁忌症……………四七〇
黃疸の原因及治療法……………四七〇
黃疸の原因及治療法……………四七〇
帶帶性黃疸、交流性黃疸……………四七一
膽石痛(膽石症)の原因……………四七一
竝に之が鍼灸治法……………四七一
腹部消化器病の鍼灸適應症を記せ……………四七二
神經性嘔吐の大略を述べて且つ刺灸部位を記せ……………四七二
氣管枝喘息の原因區別症狀……………四七三
灸治點奏效の理由……………四七三
喘息に對する灸の治療的作用……………四七三
氣管枝喘息の症候竝に灸治法……………四七三
慢性氣管枝加答兒に對する治療法……………四七四
肋膜炎の原因症狀豫後療法……………四七四
竝に治療する理論……………四七四
肺結核の原因症狀經過の概略灸治の時期治療穴名……………四七五

肺尖加答兒に應用すべき經穴とその部位を擧げて灸治法と注意を述べよ……………四七五
肺結核に對する灸灸の方法……………四七五
肺尖加答兒に灸が效くや、もし效くとせば、その施灸點を擧げよ、且つ理由を記せ……………四七七
灸を施せる結核動物の治癒傾向に就いて……………四七八
結論……………四八三
慢性腎臟炎に對し施灸の部位と目的……………四八四
腎石痛の原因症狀治療穴名……………四八四
腎盂炎の原因症狀治療穴名……………四八五
灸灸奏效の理由……………四八五
膀胱加答兒の原因症狀……………四八五
灸治穴名を擧げよ……………四八五
膀胱麻痺の原因症狀區別灸治法……………四八六
膀胱麻痺の原因症狀奏效の理由……………四八六
膀胱麻痺に對する灸治點の部位と穴名……………四八七
膀胱癱瘓の原因症狀治療穴名……………四八七
名且つ灸灸何れがよきか……………四八七
尿道加答兒の原因症狀治療法……………四八八
遺尿症の原因及び症狀其の處置……………四八九
夜尿症、(遺尿症)原因症狀……………四八九
と灸灸治法……………四八九
淋疾の原因症狀灸灸法……………四八九

副睪丸炎の原因症狀灸灸法……………四九〇
消渴とは何ぞ其の症狀及び灸灸點……………四九〇
陰萎症の原因症狀治療穴名……………四九一
心臟疾患に對する灸灸の價值……………四九一
神經性心悸亢進の原因症狀治療法……………四九二
神經性心悸亢進に對する刺灸點と奏效の理由……………四九二
神經性心悸亢進症に對する刺灸點と奏效の理由……………四九二
心臟瓣膜病の原因竝に刺灸法……………四九二
神經性心悸亢進症に對して天柱肺俞に點灸して奏效する理由……………四九三
急性筋肉ロイマチスの原因症狀治療法……………四九三
原因症狀治療法……………四九三
僧帽筋ロイマチスに就いて述べよ……………四九四
腰筋ロイマチスの治療法……………四九四
腕關節ロイマチスの灸灸法……………四九四
三角筋ロイマチスに對する採穴を求む……………四九四
三角筋ロイマチスの症狀と療法……………四九五
急性關節ロイマチスの處置……………四九五
關節ロイマチスと關節炎……………四九六
三叉神經痛(顏面神經痛)に對する灸灸法……………四九六
三叉神經痛の原因症狀治療法……………四九六
竝に穴名……………四九六

第一枝痛、第二枝痛、第三枝痛……………四九六
後頭神經痛の原因症狀治療法……………四九七
大後頭神經痛の灸治點……………四九八
膊神經叢痛の原因症狀刺灸穴名……………四九八
肋間神經痛の症狀及び其の灸灸治法……………四九九
肋間神經痛の原因症狀刺灸點……………四九九
竝に刺灸上の注意……………四九九
乳腺神經痛……………五〇〇
乳腺炎……………五〇一
腰痛を起すべき疾病の名稱と其の灸灸穴名……………五〇一
腰痛に對する灸灸の可否……………五〇二
腰痛に對する灸灸點……………五〇二
腰腹神經痛の原因症狀灸灸穴名……………五〇二
述べて……………五〇三
股神經痛、閉鎖神經痛……………五〇三
坐骨神經痛の原因症狀……………五〇三
刺灸點灸灸法……………五〇三
坐骨神經痛に就いて……………五〇三
常習頭痛の原因症狀灸灸治法……………五〇四
關節神經痛の症狀及び治療法……………五〇五
痛 風……………五〇五
糖尿病の原因症狀竝に灸灸治法……………五〇六
肢端知覺異常症……………五〇六

偏頭痛の原因症狀及び其の灸灸治法を問ふ……………五〇七
其の適するものに就いて理由を記せ……………五〇八
ヒステリーの原因症狀灸灸治法……………五〇九
ヒステリーの施灸點を問ふ……………五〇九
神經衰弱の原因症狀治療穴名を問ふ……………五一〇
不眠症……………五一〇
不眠の灸灸點……………五一〇
ヒポコンデリーの原因症狀治療法……………五一二
振顫症……………五一二
書癩の灸灸法……………五一二
筆癩の原因症狀治療法……………五一二
癩癩性書癩、震顫性書癩……………五一三
アテトーゼ……………五一三
パセドー氏痛……………五一三
舞蹈病の原因症狀治療法……………五一四
眩暈の原因症狀治療穴名……………五一五
癩癩とは何ぞ竝に之が治療法……………五一五
眞性癩癩、假性癩癩……………五一五
顏面神經麻痺の原因症狀灸灸治法……………五一六
顏面神經麻痺の症狀灸灸に對する理由……………五一六
主治穴其の奏效理由……………五一六

中樞性、末梢性……………五一六
顏面神經痛に對する刺灸穴名及び奏效の理由……………五一六
顏面神經痛の原因症狀治療穴名及び奏效の理由……………五一八
三叉神經麻痺の原因症狀治療穴名……………五一八
咀嚼筋麻痺……………五一八
眼筋麻痺の原因症狀治療法……………五一八
副神經麻痺の原因症狀治療穴名……………五二〇
橫隔膜神經麻痺の原因症狀治療穴名……………五二〇
強直性癱瘓、間代性癱瘓……………五二一
尺骨神經麻痺の原因症狀治療法……………五二二
正中神經麻痺の原因症狀治療穴……………五二二
腕神經麻痺とは如何其の原因症狀豫後及び治療法を問ふ……………五二三
腕神經麻痺の原因症狀治療穴名……………五二三
腕神經麻痺に對する理由……………五二三
睡眠麻痺の灸灸の適、不適竝に理由……………五二四
前大鋸筋麻痺の原因治療穴名……………五二四
側胸神經麻痺……………五二四
聯合肩膊麻痺(一名上肢神經叢麻痺)の原因症狀治療穴名……………五二四
エルブ氏麻痺、分岐麻痺……………五二五
クルンプケ氏麻痺……………五二五

エルブ氏鎖骨上點……………五二五
 大小胸筋麻痺の症狀治穴……………五二五
 菱形筋麻痺の症狀と治穴……………五二六
 後胸廓神經麻痺……………五二六
 潤背筋麻痺の原因症狀治穴……………五二六
 背筋麻痺の原因症狀治穴……………五二七
 腹筋麻痺の原因症狀治穴……………五二七
 腹部の經穴……………五二七
 股神經麻痺の原因症狀治穴……………五二八
 股神經痛……………五二八
 腸骨下腹神經……………五二九
 腸骨鼠蹊神經……………五二九
 陰部股神經……………五二九
 外股皮下神經……………五二九
 股神經……………五二九
 閉鎖神經……………五二九
 閉鎖神經麻痺の原因症狀治穴……………五二八
 閉鎖神經痛……………五二九
 臀神經麻痺の症狀治穴……………五二九
 坐骨神經麻痺の原因症狀治療法……………五二九
 坐骨神經に對する治療法……………五二九
 腓骨神經麻痺の原因症狀と治穴……………五三〇

脛骨神經麻痺の症狀治穴……………五三〇
 總腓骨神經、淺腓骨神經……………
 深腓骨神經、脛骨神經……………
 舌下神經癱瘓の原因症狀治穴……………五三一
 神經炎の原因症狀治療法……………五三一
 脚氣の症狀と鍼灸術の效果……………五三二
 脚氣八處の穴に就いて……………五三二
 脚氣の症狀並に灸治點……………五三二
 及び奏效の理由……………五三二
 脚氣の原因症狀灸治法……………五三二
 筋萎縮に對し灸治の奏效する理由……………五三三
 腓腸筋癱瘓に對する鍼灸點……………五三四
 腓腸筋癱瘓の原因症狀治療法……………五三四
 肩部拘攣即ち肩の凝りの原因並に治穴鍼灸法……………五三四
 蕁麻疹……………五三五
 腦貧血の原因症狀治穴……………五三六
 貧血の症狀及び治療法……………五三六
 腦充血の原因症狀鑑別及び刺鍼法……………五三六
 腦充血の原因症狀刺鍼灸法……………五三七
 腦充血の原因症狀及び……………五三七
 鍼灸法と奏效の理由……………五三七
 腦充血と腦貧血との病理解剖的變化……………五三八
 腦充血と腦貧血の處置……………五三八

高血壓病とは何ぞ之が……………五三八
 灸治穴名と奏效理由……………
 血脈亢進症に對し灸の適否……………五三八
 に就いて其の理由を記せ……………
 中風とは如何なるものか之に對する灸の時期並に其の部位……………五三九
 腦溢血に施灸する時期及び最も有効なる施灸點……………五三九
 腦溢血後の半身不隨症の刺鍼法及び灸治穴……………五三九
 中風豫防の灸法……………
 中風症に施灸すべき時期と上肢に施す可き灸治穴名……………五四一
 半身不隨に對する刺鍼法と奏效の理由……………五四一
 失神の原因症狀治療法……………五四二
 脊髄炎の原因症狀治穴……………五四二
 脊髄炎の症狀並に施灸の利害……………五四二
 頸髓炎、胸髓炎、腰髓炎、薦髓炎……………五四三
 脊髄癆の原因症狀治穴……………五四三
 脊椎(脊柱)カリエス……………五四四
 脊髄壓迫症の原因症狀(一名龜)……………五四四
 背脊髓空洞症……………五四五
 血友病……………五四五
 日射病……………五四五
 アレルギ(特異過敏性體質)……………五四六

第二章 小兒科病學

第一節

小兒科學の意義……………五四七
 小兒の治療に就いて……………五四七
 小兒期……………五四七
 本邦小兒の體重……………五四八
 乳兒營養法……………五四九

第二節 小兒科學各論

體質異常……………五五一
 滲出質(滲出性體質)……………五五三
 淋巴腺體質……………五五四
 神經素質(所謂神經質)……………五五四
 多血質……………五五四
 弛緩遲鈍質……………五五五
 無力性體質……………五五五
 總括……………五五五
 小兒鍼の技術、方法及び人體に及ぼす影響……………五五六
 腺病質……………五五七
 平衡失調症……………五五八

食餌性貧血……………五五八
 呼吸性激情性癲癇(一名憤怒癲癇)……………五五八
 小兒急疳(即ち漢名驚風)の原因症狀治療法……………五五九
 異嗜症……………五六〇
 小兒の夜啼に對する鍼灸法……………五六〇
 夜驚症(一名睡怖)の原因症狀治療法……………五六〇
 狹義の「むし」……………五六〇
 消化不良症の(ヂヌベアシー)の原因症狀治療法……………五六一
 乳兒脚氣の原因症狀治療法……………五六二
 小兒急性腸加答兒(腸炎)……………五六二
 斜差の灸……………五六三
 小兒慢性腸加答兒(一名脾疳の蟲)の原因症狀治療法……………五六三
 慢性氣管枝炎……………五六三
 小兒腎臟炎(慢性腎臟炎)……………五六三
 所謂腦膜炎の原因治療法……………五六四
 結核性腦膜炎の原因症狀治療法……………五六四
 漿液性腦膜炎……………五六五
 遺傳性運動失調症……………五六六
 (一名フリードライヒ氏病)……………五六六
 進行性筋肉萎縮症……………五六六
 小兒麻痺……………五六七
 小兒急性脊髄前角炎……………五六七

第三章 眼科學耳科學之部

初生兒膿漏眼(一名風眼)……………五七二
 眼瞼緣炎……………五七二
 潰瘍性、鱗屑性……………五七二
 淚囊炎……………五七三
 結膜炎……………五七三
 膿胞性結膜炎……………五七四
 角膜實質炎の原因症狀治穴……………五七四
 夜盲症(とりめ)の原因症狀治療法……………五七四
 トラホーム(トラコーマ)の原因症狀治療法……………五七五

眼科疾患と頭痛との關係……………五七五
 主要なる眼科疾患の概念……………五七六
 近視眼……………五七六
 中耳炎……………五七七
 外聽道炎……………五七七

第四章 內科的齒科學之部

齒痛の種類及び適應不適應を區別し適應症に對する鍼灸の法を問ふ……………五七七
 齒痛に對する刺鍼法及び目的……………五七八
 齒痛の原因……………五七八
 齒痛の刺鍼點……………五七九
 上齒痛、下齒痛……………五七九
 生齒困難症とは何ぞや並に處置……………五七九

第五章 婦人科學

白帶下の大略を述べ且つ施鍼部位を記せ……………五八〇
 月經不順に施すべき灸治穴名……………五八〇
 月經過多症の原因症狀治療法……………五八一
 月經困難症……………五八二

第六章 傳染病學

其の神經分佈……………五八二
 子宮痙攣の原因症狀鍼灸治療法……………五八三
 子宮痙攣に對する刺鍼の部位及び目的……………五八三
 慢性子宮實質炎の原因症狀治療法……………五八四
 子宮頸管加答兒の原因症狀治療法……………五八四
 急性慢性子宮内膜炎の原因症狀治療法……………五八五
 原因症狀治療法……………五八五
 骨盤結締織炎……………五八五
 子宮萎縮症の原因症狀治療法……………五八六
 子宮痛腫の原因症狀治療法……………五八七
 喇叭管炎の原因症狀治療法……………五八八
 惡阻の原因症狀治療法……………五八九
 子宮血の道とは何ぞや其の灸治點……………五九一
 古來よりの婦人科病の名穴……………五九一
 三穴を擧げよ……………五九一
 婦人病の一ツ灸……………五九一
 不妊症の灸治法……………五九一

總說

地方病と流行病との區別……………五九三
 所謂傳染病の種類……………五九三
 單行法による傳染病……………五九三

急性傳染病……………五九四
 慢性傳染病……………五九四
 法定十種傳染病……………五九四

各論 第一節 法定十種傳染病

腸チフス……………五九四
 糞便の消毒、腸チフスの灸治療法……………五九六
 パラチフス……………五九六
 赤痢……………五九六
 疫痢の原因症狀治療法……………五九七
 虎列刺(アジアコレラ)……………五九八
 チフテリア(馬飛風)……………五九八
 流行性腦脊髄膜炎……………五九九
 猖紅熱……………五九九
 痘瘡(ほんぼうさう)……………六〇〇
 發疹チフス……………六〇一
 防疫用石炭酸……………六〇一
 ペスト……………六〇一

第二節 其他の傳染病

毒丹の原因症狀……………六〇二
 破傷風……………六〇三
 脾脫疽(炭疽熱)……………六〇三
 癰腫……………六〇四
 歐洲コレラ(霍亂)……………六〇五
 流行性感冒(インフルエンザ)……………六〇五
 嗜眠性腦炎……………六〇六
 ワイル氏病(出血性黃疸)……………六〇六
 又は熱性黃疸……………六〇七
 狂犬病(恐水病)……………六〇七
 マラリアとは何ぞ灸治の可及び灸治點……………六〇八
 微毒の原因症狀區別鍼灸療法の可否……………六〇八
 軟性下疳……………六一〇
 第四性病……………六一〇
 癩病(レブラ)……………六一〇
 水痘(水ぼうそう)……………六一一
 麻疹……………六一二

第八編 經穴學

十四經略解……………六一四

十四經とは……………六一五
 經脈循環の順序……………六一五
 一、手の太陰肺經……………六一六
 二、手の陽明大腸經……………六一六
 三、足の陽明胃經……………六一六
 四、足の太陰脾經……………六一七
 五、手の少陰心經……………六一八
 六、手の太陽小腸經……………六一八
 七、足の太陽膀胱經……………六一九
 八、足の少陰腎經……………六一九
 九、手の厥陰心包經……………六二〇
 十、手の少陽三焦經……………六二〇
 十一、足の少陽膽經……………六二一
 十二、足の厥陰肝經……………六二二
 十三、督脈……………六二二
 十四、任脈……………六二二
 奇經八脈……………六二三
 陽蹻脈、陰蹻脈……………六二三
 衝脈、陽維脈……………六二四
 陰維脈、帶脈……………六二四
 經穴暗記の歌……………六二五

身體各部位順による

經穴
 腦頭蓋部……………六三〇
 項部……………六三二
 顙額部附近……………六三三
 額面部……………六三四
 頸部……………六三五
 胸部……………六三六
 腹部……………六三九
 肩背之部……………六四三
 腰椎之部……………六四七
 上膊之部……………六四九
 肘關節之部……………六五〇
 前膊之部……………六五〇
 腕關節之部……………六五二
 手之部……………六五三
 大腿之部……………六五四
 膝關節之部……………六五五

文部省選定新孔穴、禁灸穴、禁鍼穴、禁鍼灸穴等は、各々穴名の上に符號あり注意せられたし

下腿之部……………六五六
 足跗之部……………六五八
 足之部……………六五九
 經穴の疾病治療上の應用……………六六一
 新孔穴の排列……………六六一
 文部省囑託改正孔穴……………六六一
 調査委員報告書抄……………六六一
 同名異穴……………六六五
 經穴異名……………六六六
 臨牀上(實地上)重要な奇穴……………六六八

第九編 檢定試驗問題集

將來を待望すべき……………六七八
 縣別試驗問題一覽……………六七八

第十編 參考規則編

内務省令……………七四八
 鍼術灸術營業取締規則……………七四八
 警視廳令……………七八六
 願書の様式……………七九〇
 大阪府鍼術灸術營業取締規則施行細則……………七九二

滿洲國鍼術灸術營業取締規則……………七九四

附 錄

小 論 文

皇漢醫學の原泉に就いて……………七九八
 同身寸の新意義……………七九九
 微 忱……………七九九
 今日の治療界の趨勢……………八〇〇
 専門と綜合……………八〇二
 すべての疾病は鍼灸醫術の適應症である……………八〇三
 灸治片々……………八〇四
 壯數、艾炷の大小……………八〇五
 實際を定むるの法……………八〇五
 灸 の 補 瀉……………八〇五
 皇漢醫術の復興……………八〇六
 現代灸療範圍の進出……………八〇七
 脚下を見よ……………八〇八
 無 題 錄……………八〇八
 溫古知新……………八〇九
 鍼灸の教育……………八一〇
 鍼 經……………八一〇

古典愛護……………八一二
 鍼灸醫學の獨立性……………八一三
 一 考 察……………八一三
 菅沼周圭氏と鍼灸則と其の學說……………八一四
 主張固執……………八一六
 龍居堂正義の銘……………八一七
 管 見……………八一七
 龍居堂斷章……………八一八
 應 斷……………八二〇
 支那中世の鍼灸書目……………八二一
 日本近古鍼灸書一覽……………八二三
 目次に該當する標題なき時は、本文を精讀して下さい、標題に該當する記事が必ずあります。
 跋……………八二七

最新 增補 簡明鍼灸醫學 目次終

最新 增補 簡明鍼灸醫學 (最終版)



第一編 解剖學
 第一章 組織學
 細胞

元鍼灸術試驗委員
 辰井高等鍼灸學院長
 皇漢鍼灸醫學會長

辰 井 文 隆 著

細胞は有機化合物と無機質から成れる蛋白質物質の混合體であつて原形質と核とより成る。原形質には微細の顆粒があり、核は一個の細胞に一個又は數個(肝細胞)あるものもある。細胞は複雑な構造を有するもので、元來顯微鏡的のものであるが、其の大なるものは漸く肉眼で見ることが出来る。

形状。球形、扁平形、多角形、圓柱形、星形等種類が多い。細胞は生活體の基礎(又いひ換へると一個の生活體)であつて、

刺戟に應ずる性質即ち興奮性と、運動、成長、物質代謝、繁殖等の性質を持つて居る。

備考一、細胞の最も完全なるものは卵細胞である。

備考二、細胞の種類。1 上皮細胞、2 腺細胞、3 結締織細胞、4 骨細胞、5 軟骨細胞、6 脂肪細胞、

7 筋細胞、8 神經細胞、9 血液細胞、10 淋巴細胞、11 生殖細胞。

組 織

受精した卵が一定の機能の下に分化して種々なる細胞團を作ると、之を名付けて組織といふのである。

上皮組織、筋組織、神經組織、結締質であつて、互に連結する細胞の集團である。然して一定の機能をなすに適應するものである。

上 皮 組 織

上皮細胞から成る。關節の軟骨面、滑液腔を除く他の身體の内外を被覆保護するものであつて、皮膚、漿液膜、粘膜は皆上皮組織から成るものである。其の細胞の形態に依つて扁平上皮、骰子形上皮、圓柱上皮、毳毛上皮を區別す。又上皮組織の變化したもので、深部に潜在して、生活機能に必要な液を分泌するものを腺組織といふ。

筋 組 織

筋組織は、筋細胞と筋纖維から成るもので、平滑筋組織と横紋筋組織との二種を區別する。何れも刺戟に應じて收縮、運動の性質を持つて居る。而して横紋筋纖維は外觀上赤色を呈し、平滑筋纖維は蒼白色を呈する。

神 經 組 織

神經細胞と神經纖維とより成る。神經細胞には無極性神經細胞、一又は二極性神經細胞、多極性神經細胞等ありて軸索突起と原形質突起を有す。

神經纖維とは此突起の延長したものを云ふ。そして此の神經組織に依つて知覺(感覺)と、運動は主宰せられるのである。

結 締 質

結締質とは纖維様結締組織、網狀結締組織、彈力組織、脂肪組織、色素組織、骨組織、軟骨組織等をいふのである。

器 官

器官とは上皮組織、筋組織、神經組織、結締質等諸組織の配合により組立られた、一定の機能を有するものを云ふのである。例へば肺臟、心臟、腎臟等である。

第二章 系統解剖學

第一節 骨 學

系統解剖學

系統解剖學とは、もつとも普通に行はるゝ解剖學であつて、骨は骨ばかり、筋は筋ばかり、脈管は脈管ばかり、内臓は内臓ばかり、神経は神経ばかり、と同じ部類に屬する器官を、一々順序を逐ふて記述するものである。

骨

(大十四年九月東京、大十五年十月鹿兒島)

骨は身體の基礎となり、他器官の支柱となり、互ひに聯接して骨格を作り、其の間に大小不同の腔洞を作るのであつて内臓や血管を保護して居る。其質硬固で黄白色を帯び弾力を有し、且つ不朽の性質を具へて居る。

骨を形態に依つて長骨、短骨、扁平骨、不齊骨に區別する。成人の骨數は二百十餘個である。

骨の主成分は有機質(膠質)と、無機質(石灰質)から成つて居る。

備考一。「骨の主成分」(昭十三年四月山形)

備考二。此記述は又其まゝ、「骨の生理作用」(昭十六年三月北海道)、の生理の答案ともなる。

骨

髓 (昭十三年五月奈良)

骨内には髓腔といふ腔洞がある此腔洞の中には骨髓がある。骨髓は柔軟で血液に富みたる海綿様の結締組織と、種々な細胞から成るもので、幼兒は赤色を呈し、成人は脂肪細胞の増加の爲に多くは黄色を呈す。

骨髓は又骨を榮養し、血球を製造する。

備考。要するに、内務省令第三條に、鍼灸試験科目を規定(限定に相當す)して。

其第一項に人體の構造及、主要器官機能。

とあるので、此機能とは即ち生理作用の事である。

だから我鍼灸試験に於ては、純粹の高級生理學は殆ど必要がない。

骨膜及び骨髓に就て

(昭四年春北海道、昭十二年十一月愛媛)

骨の表面には(關節面を除くその他)白色強靱の纖維膜があつて骨を被包して居る、これが骨膜である。骨面とは堅く又場所によれば剝離し易く癒着して毛細血管を骨質内に送る。骨の榮養に對して最も大切なものであり、又骨の再生機能にあづかるものである。

備考。「骨の構造」(昭十三年五月徳島)

頭蓋骨及び顔面骨の名稱及び數

(昭二年十一月神奈川、昭二年四月長崎、昭三年五月秋田、昭四年春成鏡南道)

甲、顔面骨

鼻部の骨。篩骨一個、鋤骨一個、下甲介骨、淚骨、鼻骨、各二個宛。
顎部の骨。下顎骨一個、舌骨一個、上顎骨、口蓋骨、顎骨、各二個宛。

乙、腦頭蓋骨

(昭八年秋徳島、昭八年春群馬、昭十一年十月岐阜)

前方には前頭骨一個、後方には後頭骨一個、側方には顛額骨左右一個宛、頂には顛頂骨左右一個宛。頭蓋底には胡蝶骨一個。計五種七個より頭蓋腔を作る。

備考一、篩骨は今田氏解剖學等では腦蓋骨の部にある。

備考二、「頭蓋骨の名稱個數及び神經の名稱」(昭三年五月香川)この問題の神經の名稱は神經學の部を見ればよい。

「頭蓋を形成する骨の名稱及位置」(昭十年秋島根、昭十三年北海道)

腦底を構成する(境界する)骨名 (大十三年四月廣島)

主として胡蝶骨と顛額骨の岩様部とである。

備考。「頭蓋底を構成する骨の名稱及び腦神經の種類」(昭六年十月徳島)は此記事及腦神經の部を見よ。

肩胛骨烏喙突起に附着する筋の名稱及び起始

停止如何 (大十五年四月愛知、昭九年秋岐阜、昭十年春群馬)

(A)附着する筋名。(1)二頭膊筋、(2)烏喙膊筋、(3)小胸筋。

(B)附着する筋の起始停止。(1)二頭膊筋長頭は肩胛骨の高上結節、短頭は烏喙突起より起始し、停止は撓骨結節である。(2)烏喙膊筋は烏喙突起より起始し、停止は上膊骨内面の粗嚚部である。(3)小胸筋は第三、第四、第五肋骨から起始し、停止は烏喙突起である。

鎖骨の位置联接形状

(大十四年十月富山、昭二年九月、昭五年十月長野)

前胸部の上端にして左右水平にあり、稍々S字状を呈し上肢の運動で移動する。其联接は肩胛骨と胸骨とである。

備考。全身の二百餘個(森田博士によれば二百十六箇)の骨の位置、形状、联接の如きは一々記す必要がない。

後述の「骨格一覽表」を見よ。

四肢骨の關係及び名稱 (大九年五月高知)

(A)關係。上肢骨は上肢帶骨と固有上肢骨と联接して軀幹の兩上側壁に於て懸垂し、鎖骨は胸鎖關節で軀幹の胸骨に联接す。

下肢骨は下肢帶骨と联接して軀幹の下部即ち骨盤を構成し、第五腰椎・薦骨・尾骨に联接する。

(B)名稱。上肢帶骨は鎖骨・肩胛骨、固有上肢骨は上膊骨・尺骨・撓骨・八個の腕骨・五個の掌骨・十四個の指骨である。下肢帶骨は腸骨・恥骨・坐骨の三骨で、固有下肢骨は上腿骨(即ち大腿骨)・膝蓋骨・脛骨・腓骨・七個の跗骨五個の趾骨・十四個の趾骨とである。

備考。胸骨、跗骨の名稱と排列は別項にあるから参照せよ。問題の「四肢骨の關係」とは妙なひ様である。

ミハエル氏菱形窩の解剖に就て知れる所を記せ (昭十四年春廣島、昭十四年福井)

腰部の下方を見ると薦骨に相當する部で菱形の淺窩がある、これがミハエル氏菱形窩である。腸骨後上棘は其兩側角に當る。この菱形窩の上角も少し陥凹してゐる、第五腰椎棘状突起は其直上にある。

備考。是は産科學で骨盤外計測法に應用するものであるが、又鍼灸取穴上の正確なる標準とするに至極よい。

グロツス氏三角

一、部位。大臀筋の稍中央。

一、之を定むるの法。左右臀部を一個の圓と假想して其中央に之を定める。(青地氏)

又肛門裂口の終端に於て脊柱と直角をなす横線を假定し其交叉點から外方へ四指横徑。

又は五指横徑の部に之を定める。(藤河氏法)

備考。所謂「横根がへしの灸」を柱へる所。一般醫家に於ては臀筋内藥液注射の部位である。

上肢に關する三大關節の名稱及び構成する

骨名 (昭三年四月滋賀、昭六年十月茨城、昭和八年春島根)

(A) 其名稱。(1) 肩胛關節、(2) 肘關節、(3) 腕關節。

(B) 其骨名。(1) 肩胛關節は、肩胛骨の肩胛關節窩と上膊骨の上膊骨頭、(2) 肘關節は (上膊骨と尺骨、上膊骨と桡骨、尺

骨と桡骨) の三關節から成る。

(3) 腕關節一名手關節は(桡腕關節、尺腕關節、八個の腕骨相互關節) の三關節から成る。

備考。「肩胛關節を構成する骨の名稱並に主なる筋の名稱」(昭十年春福井)

「腕關節を構成する骨の名稱」(昭十年秋岐阜)、「上肢骨の名稱及連接」(昭十五年、秋佐賀)

骨の連接並に關節の種類を記せ (大八年鹿兒島)

(A) 骨の連接は。合着連接、分離連接に二大別する。

(イ) 合着連接即ち不動關節は骨と骨とが密着して運動せず、二骨の間に結締組織連接・軟骨連接・骨質連接の三種がある。

備考。頭蓋骨等の縫合(不動關節)は結締組織連接の一例である。

(ロ) 分離連接即ち可動關節の種類。

(イ) 球狀關節(即ち肩胛關節)、(ロ) 球狀關節(即ち手關節)、(ハ) 鞍狀關節(即ち拇指掌骨と大多稜骨との關節)、

(ニ) 蝶番關節(即ち指關節、肘關節)、(ホ) 螺旋關節(即ち膝關節)、(ヘ) 車軸關節(即ち樞軸關節)、(ト) 濃合關節(即ち足附關節)の七種である。

分離連接即ち可動關節は。囊狀靱帶、副靱帶で更に一層關節を保護固定して居る。

備考。滋賀縣(十二年四月)の解答を参照するとよい、少し書き方を更へて置いた。「關節とは如何」(十二年十一月長崎縣) 注意。上肢關節に關するすべての問題は八頁第九行以下第九頁の終行までを充分理解應用すればよい。

骨盤の位置形状男女の差異構成骨の名稱に就て

説明せよ (昭十四年春廣島、大十五年春鹿兒島、十年四月愛知、十二年福岡、昭二年四月滋賀、同十年秋群馬)

解題。此問題は純粹の産婆學、産科學の問題ではあるが鍼灸醫術とも相當關係の深いものである。後にも記述があるが重複を厭はず記述する。

- 一、位置。軀幹の下端で、腹部と大腿との間である。
- 一、形状。稍々漏斗状、上口は横徑が廣くして大きく、下口は圓形で狭い、詳しくいへば直徑が横徑よりも廣い。
- 一、男女の差異。男性は狭く長い。女性に廣くて短かい。男性は小で、女性は大である。
- 一、構成する骨の名稱。第五腰椎・薦骨・尾骨(以上後壁)。腸骨・坐骨(以上側壁)。恥骨(以上前壁)。

下肢に於ける骨の联接に就き知る處を記せ (昭十三年十月熊本)

下肢帶骨と、固有下肢骨から成る。

- (1) 下肢帶骨。腸骨、坐骨、恥骨、相互の關節から成る。
- (2) 固有下肢骨。大腿骨、膝蓋骨、脛骨、腓骨、距骨、跟骨、と相互關節し、舟狀骨、第一・第二・第三楔狀骨、骰子骨、五個の趾骨、十四個の趾骨、順次相互に關節する。

備考。七ヶの跗骨を記憶するには(距骨・跟骨・親舟の三傑・骰子を投げにけり)と歌ふにかざる。舟は舟狀骨、三傑は三ヶの楔狀骨、親は跗趾側の意味であつて跗趾側に舟狀骨、第一・第二・第三の楔狀骨があるとの意味、骰子は骰子骨の意味だ。又生體で骨を認めるには足根部の内外髁の下の骨が跟骨、足を強く蹴に屈する時足背動脈の少し前方の骨隆が距骨で、内髁の約二仙迷

(脚) 前方に舟狀骨を觸れ、其前方に第一・第二・第三の楔狀骨を觸れ、第一・第二・第三の楔狀骨を觸れる事が出来る。是等の骨をよく暗記して足部の取穴上の標準とせねばならぬ。

膝關節の構造を記せ (大十五年春富山)

肘關節と稍々違つた構造を有する關節であつて、大腿骨(上腿骨)の内、外髁と、脛骨の内、外窩とから成るもので膝蓋骨の後面も關係する。

脊柱骨の數及び區別 (昭六年十月愛知、昭十一年十月長野)

解題。問題の範圍が廣い、概論即ち脊柱總論を答ふればよい。

脊柱は軀幹の基礎をなすもので其數三十三個の椎骨から成る。

- 一、區別。頸椎七個、胸椎十二個、腰椎五個(以上は關節が可動性で、且つ一々分離する事が出来るから眞椎といふ)。
- 一、薦椎五個、尾椎四個(以上は各々癒合して薦骨、尾骨といふ二個の骨となつて居るから假椎といふ)。
- 一、椎骨相互の關節。其の運動性で區別して、第一・第二頸椎を廻旋椎、第三以下第五腰椎までを屈伸椎といふ。
- 一、椎骨の形状(但し共通の)。前方は椎體、後方は椎弓から成る。上端には關節突起、下端には關節窩、横には横突起後方には棘狀突起が突出する。體と弓との間には椎孔があり、全椎孔が相重なると脊髓管となり、脊髓神經の中樞となる。横には上・下の椎骨の間から出來た椎間孔があり、脊髓神經の出發部となるものである。

備考。棘狀突起は實地取穴上の標準として重要なものである。取穴法は後述する。

肩胛骨の鳥喙突起は何れにありや (大十五年愛知、其他各縣の實地)

前胸壁に於て鎖骨の外端から約二、三仙迷(糖)内方で鎖骨の外下方にある。上肢(手)を水平にして前方に出せば不明となり、後方に其のまゝ移せば明らかになる。

備考。此ものも取穴上必要なものである。

骨の種類及び構造 (大十四年九月東京)

一、種類。骨質上は軟骨と硬骨の二種である。形状の上からは、長骨(管状骨)、短骨、扁骨、不齊骨の四種類である。
二、構造。軟骨には硝子様軟骨、纖維様軟骨、弾力性軟骨の三種があり、軟骨細胞と細胞間質から成る。硬骨(骨)は皮質、海綿様質から成る。長骨は中心に骨髓を容れてゐる。
そして又化學的には、有機質即ち膠質(40%乃至50%)と、無機質即ち石灰(50%乃至60%)から成るものである。

胸廓の構成及び骨名 (昭十六年五月兵庫、昭十七年一月成鏡南道、昭九年秋秋田)

胸廓は、胸骨、全肋軟骨、全肋骨、及び十二個の全胸椎より成る。
上口は稍々橢圓形で狭く、下口は不齊形の廣き骨腔である。

備考一。鎖骨と肩胛骨は上肢帯であるから、胸廓の構成には關係がない。(十二年滋賀縣、昭五年十月熊本、及昭六年十月鳥取)

「胸廓の構成並に胸廓内臓器の名稱」に對しては上記の他に、肺臟、心臟、氣管枝、食管、胸腺、を加ふればよい。

備考二。「胸廓の上孔には如何なるものを通ずるや」(昭五年十月鳥根、昭八年春群馬)

氣管、食管、迷走神經、橫隔膜神經、交感神經、總頸動脈、同靜脈、鎖骨下動脈、同靜脈等である。

「胸廓を構成する骨名及聯接」(昭十年十月岡山、昭十一年五月廣島)

眼を構成する骨名 (昭四年四月長野、昭和九年春静岡)

上顎骨、前頭骨、額骨、胡蝶骨、口蓋骨、淚骨、篩骨。

鼻孔を構成する骨名 (昭九年春三重、昭二年秋長野、昭六年五月群馬)

上、中、下甲介骨、口蓋骨、上顎骨、篩骨、前頭骨、鼻骨、鋤骨である。

骨は何によつて連結するか (將來出さうな問題)

全身に於ける二百有餘個の骨片は主として結締組織(即ち靱帶)又は軟骨で連結してゐる。

骨盤腔の構成 (大十二年福岡、昭二年十月滋賀、其他)

後方は第五腰椎、薦骨、尾骨。側方は腸骨。前方及び下方は恥骨と坐骨とより成る。
形は稍々漏斗狀の骨管である。

大小骨盤の區別 (大十二年福岡、昭三年四月長野、其他)

骨盤は之を區別して、大骨盤、小骨盤の二つとする。

一、大骨盤。後方は薦骨(即ち第五腰椎と薦骨との癒合部)。兩側方は腸骨の無名線より上方、前方は恥骨楯より上方

即ち腹壁である。

一、小骨盤。後方は薦骨、尾骨、側方は腸骨無名線より下方は坐骨、前方は恥骨である。

後頭骨の斜臺に就て (將來出さうな問題)

後頭骨基礎部の尖端で方形を呈して居る部であつて、胡蝶骨の體と結合して居る場所である。ワロリ氏橋と延髓とを容して居る。

顔面に於ける著名な骨孔 (重要な應用問題)

- 一、前頭骨の上眼窩孔 (上眼窩神経を通す)
- 一、顳骨の顳骨顔面管 (眼窩神経の顔面枝を通す)
- 一、下顎骨の後顎骨孔 (下齒槽神経を通す)
- 一、胡蝶骨の卵圓孔 (三叉神経の第三枝を通す)
- 一、上顎骨の下眼窩孔 (下眼窩神経を通す)
- 一、下顎骨の前顎骨孔 (下齒槽神経の顳神経を通す)
- 一、胡蝶骨の正圓孔 (三叉神経第二枝を通す)

解題。以上の骨孔は重要な神経を通する骨孔であつて鍼術とは關係の深い應用問題である。

腦頭蓋骨にある骨孔に就て記せ (將來出さうな問題)

- 一、顳頂骨上縁の近くにある小孔即ち顳頂孔。
 - 一、後頭骨の兩側關節部の顆状窩の後方にある小孔即ち後顆状孔。
 - 一、同骨の顆状突起の前方にある前顆状孔。
- 顳頂孔は導血管を通じ、前顆状孔は舌下神経を通す。
- 備考。骨孔はなる可く良く記憶しないと良い鍼灸醫とはなれない。

大額門或は前頭百會 (將來出さうな問題)

大額門(一名前頭百會)とは、矢状縫合の前縁と冠状縫合との間にある菱形の大なる骨の空隙をいふのであつて、經穴學上の顳會である。

備考。初生兒、乳兒の皮下に於ては直ちに柔軟なる結締組織で被はれて居るから脈波を見、或は觸れる事も出来る。腦壓の高まつた時には波動が亢進して其の部が膨隆し、痙攣の前徴となつたりすることもある。

腕骨の排列と名稱 (昭九年春愛知、各府縣の實地口頭試驗問題)

八個の短骨が上下の二列に併ぶ。

上列。拇指側より。舟狀骨、半月骨、三角骨、豆骨。

下列。同じく拇指側より。大多稜骨、小多稜骨、有頭骨、鈎狀骨。

足骨の名稱と排列

一、後列。距骨、跟骨。

二、前列。舟狀骨、第一、第二、第三楔狀骨、骰子骨。

關節の種類並に名稱 (昭五年五月滋賀)

關節の種類並に構成 (昭十三年十月兵庫、同十年秋長野、昭五年秋徳島、其他)

一、種類。(甲) 不動關節。(乙) 可動關節。

(甲) (1) 恥骨軟骨接合 (2) 腦頭蓋骨相互の鋸齒狀の骨縁互ひに縫合するもの等である。

(乙) (1) 全動關節 (2) 鞍狀關節 (3) 球狀關節 (4) 蝶番關節 (5) 車軸關節 (6) 叢合關節。

一、構成。(1)は關節面は球狀、關節窩は球窩である。(2)は關節頭も窩も共に鞍狀をなすものである。(3)は關節頭は橢圓形、窩も橢圓形をなすものである。(4)は頭と窩は縱軸と直角をなすものである。(5)は圓柱狀の頭と同様の窩とをなすものである。(6)は頭と窩と相互共關節面は平坦なるものである。

備考 「關節の種類及作用を各其一例を擧げて説明せよ」 (昭十三年四月京都)

靱帯 (昭十三年四月愛知、栃木、青森)

白色強靱の光輝ある纖維様結締組織から成るものであつて、骨と骨とを連結するものである。そして三種類ある。(備考靱帯がないと骨格はバラバラになる)

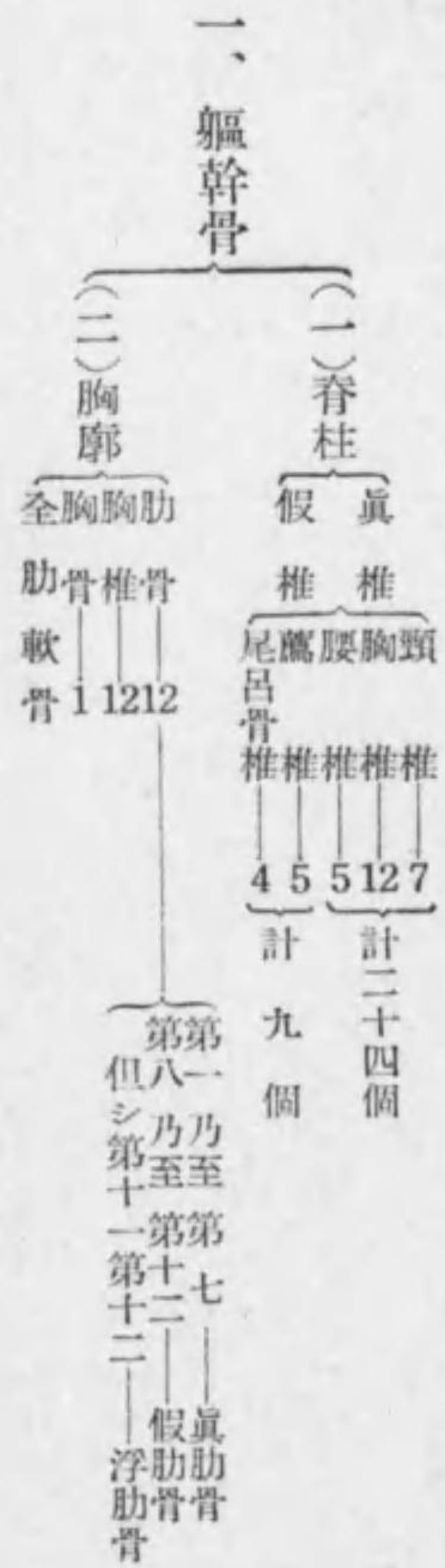
一、囊狀靱帯。は關節端で一骨の骨膜から他骨の骨膜に延展して、關節を包んで關節腔を作るものである。

二、副靱帯。は囊狀靱帯の内か又は外にあつて、囊狀靱帯を補助するものである。(昭五年十月岡山)

三、固有靱帯。は骨孔又は截痕に緊張して、他骨には關係のないものであつて、裂孔を作つて血管や神經を通ずるものである。

備考

骨格一覽表 (全身の骨)



備考。胸廓を構成する骨の名稱並に聯接 (昭十四年春佐賀)



備考。「胸廓を構成する骨の名稱」(昭七年一月成鏡南道)

第二節 筋學

筋の種類 (昭十六年四月三重、同岐阜、昭十六年十二月京畿道、昭十二年十月三重)

横紋筋と滑平筋 (昭六年十月滋賀)

筋は筋細胞より成る。筋細胞の兩端は細長いから筋纖維と云ふ。筋細胞と筋纖維との集合したものが、所謂筋肉である。筋纖維に澤山の横線があるかきかきで、横紋筋と滑平筋とを區別する。横紋筋は所謂骨格筋で、長圓柱形の細胞であつて檢鏡すると明暗二様の線條がある。此の筋は意志に隨つて良く收縮し骨をして他動的に運動せしめ、種々なる動作をなすものである。

平滑筋は一、二の長橢圓形の核があつて、所謂無構造の原纖維が縦走してゐる。そして内臓や脈管等の壁を構成するもので、意志に随つては動かないから不随意筋といふ。

横紋筋に就て

横紋筋纖維の集合した赤色の隨意運動を営む骨筋筋であつて、筋が収縮した際動かさる部を起始部、最も長く動く部を停止部、収縮の著明な部を筋腹といふ。筋の兩端は白色強靱なる結締組織で腱と成つて骨に附着して居る。形状は。羽狀筋、半羽狀筋、鋸齒狀筋、斷裂筋、二頭筋、三頭筋、四頭筋、二腹筋、數腹筋を區別する。區別は。頭(起始)、腹(筋の中央)、尾(停止部)、とする。

備考。「腱とは如何なるものか」(昭五年十月三重)

横紋筋と平滑筋の例外

心臓筋の構造は横紋筋と同一であつて不随意筋である。睫毛筋は、平滑筋ではあるが随意筋である。

備考。心臓の筋肉は、特に心臓筋或は心筋ともいふ。

「横紋筋、平滑筋とは何ぞや且つ其二例を挙げよ」(昭六年十月島根)

筋 膜

筋の外面又は筋層間にあつて、淺深數層の筋を區別したり、包んだりする結締組織膜である。もし筋膜の一部が深く筋間に入り、骨に附着して筋の中隔をなす時は筋間靱帯といふ。

備考。「筋肉の構造及び筋膜との關係」(昭六年十月佐賀)は十九頁第二行の筋とは及び此記事を一經めにして解答せよ。

背部淺層筋の名稱

- (1) 僧帽筋 (2) 潤背筋 (3) 菱形筋 (4) 肩胛舉筋 (5) 後上鋸筋 (6) 後下鋸筋。

備考一。背部淺層筋は多くは横走し、深層即ち深背筋は皆縦走して居る。

備考二。背部淺層筋中に夾板筋を加ふる學者もある。

腰背筋膜及び同筋膜より起始する筋名

腰背筋膜は強き筋膜で前後の二葉から成り、後葉は薦骨の後面、腰椎の棘狀突起より起始し、前葉は腰椎の横突起より起始して筋の起始地となる。起始する筋名。潤背筋、薦骨脊柱筋、横腹筋、大臀筋、後下鋸筋。

鼠蹊管とは何ぞや

(昭九年春福井、同十年長野) (同十二年春山梨、同十二年四月長野)

鼠蹊管は腹筋の全層を穿通して出來た膜管で、股輪の上内部にあつて、男子は精系を、女子は子宮圓靱帯を通す。長さ

は約四センチ、ヘルニヤを来し易いところである。

備考。ヘルニヤとは脱腸の事であつて、鼠蹊管に腸管が嵌入すると之を鼠蹊ヘルニヤと言ふ。もしも嵌頓すると適當の處置をしなければ死に至る。

横隔膜に就て記せ (昭十六年四月大阪、昭三年五月奈良、昭三年五月香川、昭十年秋静岡、昭十二年十月茨城、同佐賀、同十一月愛媛、昭十三年四月山形、昭十三年五月奈良)

横隔膜は腹腔と胸腔との間にある横紋筋で呼吸筋の主位を占むる者である。

形は三葉形で胸廓の周縁より起始して中央の臑質部に停止して居る。

第一腰椎の部位で大動脈裂孔を作り、其の前方では食管裂孔を作り、臑質部の右側で下大静脈孔を作る。(横隔膜と裂孔) 其の作用は。胸腔を擴張して吸氣を營み、又腹壓を營む。

備考一。神經。第四頸椎神經の横隔膜神經が分佈する。又迷走神經は食管裂孔を通じて食管と共に腹腔に下る。

「横隔膜神經に就て記せ」(昭十年春奈良)

「横隔膜の機能及び之に接する臓器の名稱」(昭十一年五月石川)

「横隔膜の作用及之を通過する器官の名稱」(昭十一年九月青森)

「横隔膜裂孔を通過する尿管及び神經」(昭六年四月群馬)

備考二。動脈。前方よりは内乳動脈の終枝筋横隔膜動脈、後方よりは後縦隔動脈の分枝上横隔膜動脈、下面には腹部動脈幹の下横隔膜動脈が分佈する。

胸部浅層筋の名稱

- (1)大胸筋 (2)小胸筋 (3)鎖骨下筋 (4)前大鋸筋。

備考。筋の起始停止の如きは定つたものである、全身の筋は三十一頁以下の一覽表を見よ。

腹壁を浅表より記述せよ (將來出さうな問題)

腹壁に就て解剖的に説明せよ (昭十一年十月岐阜)

腹壁を浅表より數へて見ると白線の兩傍では皮膚、皮下結締組織(脂肪層) 腹筋膜、直腹筋の順序である。白線の約三寸の外方では内、外斜腹筋、横腹筋である。

第二腰椎部で切斷すると如何なる筋を切るか

- 一、前 壁。直腹筋。
- 一、側 壁。内、外斜腹筋、横腹筋。
- 一、後壁浅層。淵背筋、薦骨脊柱筋、後下鋸筋。
- 一、後壁深層、方形腰筋、大腰筋。

第五頸椎部で切斷すると如何なる筋を切るか

- 一、前側。潤頸筋、胸骨中狀筋、胸骨舌骨筋、肩胛舌骨筋。
- 一、側部。胸鎖乳嚔筋、前、中、後斜角筋。
- 一、後側。僧帽筋、夾板筋、肩胛舉筋、頭長筋、項長筋等。

上膊上部に於て切斷すれば如何なる筋を切るか

- 一、後側。三頭膊筋長頭。

- 一、前側。二頭膊筋、烏喙膊筋。

備考。下端で切れば烏喙膊筋は切れずして内膊筋を切る。筋の長短、起始停止を考へて見れば判る。

何れの體部、何れの肢部であつても良く考へて答案を書く様にせぬと間違を來し易いから注意を要する。

大腿の中部を切斷すると如何なる筋を切るか

(大十三年四月北海道昭三年春愛知、昭九年春群馬)

- 一、前側。縫匠筋、直股筋、中大股筋。
- 一、内側。長内轉筋、薄股筋、短内轉股筋停止部、大内轉股筋、内大腿筋。
- 一、後側。二頭股筋、半腱樣筋、半膜樣筋。
- 一、外側。外大腿筋。

外斜腹筋は起始部即ち肋骨部で如何なる筋と重るか

該筋は肋骨部では七個の肉齒を以て前大鋸筋と、及び潤背筋の肋骨部と交叉す。

内斜腹筋の起始停止及び作用 (大十一年愛知)

- 一、起始。腰背筋膜の前葉、腸骨桶、鼠蹊韌帶(プーバルト氏韌帶)の外半部。
- 一、停止。腱膜となつて直腹筋の後縁を通つて白線(白條)に。
- 一、作用。腹腔を壓す。

備考。此の筋の最下の筋纖維は鼠蹊輪を経て精系と沿行して睾丸を包む提睾筋となる。

直腹筋の起始停止之に分佈する神経の名稱 (十五年春神奈川)

起始。第五・第六・第七肋軟骨の前面。

停止。恥骨の上縁、恥骨軟骨接合の前面。

神経。臍より上方は肋間神経前穿行枝、臍の下方は腸骨下腹神経、下腹部(恥骨の上方)は腸骨鼠蹊神経が分佈する。

備考。(横腹筋の起始停止これに分佈する神経の名稱)、又たとへば(僧帽筋の)、(腓腸筋の)、といふやうに、類題は幾らでも出来る、煩に堪へないから一々挙げぬ、學生自身類推せよ。(筋肉一覽表三十一頁以下を見て)

帽狀腱膜に就て知れる所を記せ

前頭筋と、後頭筋と、頭蓋筋との間にあつて、頭蓋頂を帽子の如く覆ひ頭蓋の皮膚とは堅く結合し、皮下結締組織とは

緩く結合して居るから頭皮と共に帽状腱膜はよく動く。結締組織の下には骨膜と骨質とがある。

備考。此の部の皮膚及び皮下には多数の血管があるから、外傷の場合には多量の出血を來す。又骨には導血管があつて頭蓋の内外の血液を交流せしむ。

顔面筋が良く種々なる表情を爲し得る理由

眼輪匝筋、額骨筋、笑筋、方形上唇筋、三角頤筋、方形頤筋、犬齒筋、頬筋、頤筋、口輪匝筋、鼻翼下掣筋、咀嚼筋等の顔面筋は皆小筋であつて、一端は骨に附着し、一端は皮膚に停止して居るから、それ等各筋の收縮に依つて複雑なる表情的の皺を生ずるからである。

咀嚼筋の名稱及び分佈する神経

(昭十年十月山形、昭二十年十月滋賀、昭十二年五月和歌山、昭十三年六月栃木)

四筋あり、(1)咬筋、(2)顳顎筋、(3)外翼状筋、(4)内翼状筋。
神経。三叉神経第三枝の運動枝。

備考。廣義の咀嚼筋は以上の四筋の他に二腹顎筋前腹と顎舌骨筋とを加へる。

三角筋の起始停止(昭二年十月滋賀)並に三角筋にある經穴

- 一、起始。鎖骨の外端、肩胛棘、肩峰突起。
- 一、停止。上膊結節。

一、同筋にある經穴。巨骨(三角筋の前上縁)、臑會(三角筋の後縁關節部)、肩髃(三角筋の上方)、肩髃(肩峰突起の下)

胸鎖乳嘴筋の起始停止及び神経との關係

(昭二年十一月廣島、同十年秋熊本、昭十三年四月岐阜)

- 一、起始。外頭は胸骨の上縁、内頭は鎖骨の内端。
 - 一、停止。乳嘴突起尖端の後側。
 - 一、神経。副神経の胸鎖乳嘴筋枝が分佈する。
- 備考。動脈は胸鎖乳嘴筋動脈である。

肩胛筋の數と名稱

- 一、數。六筋。
- 一、名稱。(1)三角筋、(2)棘上筋、(3)棘下筋、(4)小圓筋、(5)大圓筋、(6)肩胛下筋。

二頭膊筋内筋溝外筋溝

- 一、内筋溝は上膊の内側即ち小指側にして二頭膊筋、内膊筋と三頭膊筋の内縁との間、尺骨神経、正中神経、上膊動脈同靜脈を通ず。
- 一、外筋溝は外側即ち上膊の拇指側にして三頭膊筋の外縁と二頭膊筋外縁と相接觸して溝をなして居る。

膊撓骨筋の起始停止作用此筋腱の停止部

起始。上膊骨外上髁の上側。

停止。撓骨莖狀突起の前面。

作用。前膊を屈し、撓骨を廻後す。

終腱。内撓骨筋腱の外側(拇指側)即ち撓骨莖狀突起の前縁にある。

備考。此の筋は實地上にも必要であるよく記憶せよ。

内腕部筋の數及び名稱

一、數。三筋。

一、名稱。方形腰筋、腸骨筋、大腰筋。

備考。大腰筋は二頭筋である。内頭は大腰筋、外頭は腸骨筋と言ふ。

閉鎖孔とは何か

腕骨固有靭帯は閉鎖孔を作る。之を閉鎖靭帯といふのである。

恥骨と坐骨の上、下枝の間にある處の周縁銳利なる三角形の孔を閉鎖孔と言ふ。

四頭股筋の起始停止作用如何並分佈する神經動脈 (昭十年春埼玉、十年十月千葉)

一、直股筋は腸骨前下棘と無名骨棘臼の上縁より。

二、内大股筋は大腿骨櫛の内唇より。

三、外大股筋は大腿骨櫛の外唇より。

四、中大股筋は大腿骨前面の中部から。

停止は。四頭皆總腱となり、膝蓋骨を包んで膝蓋固有靭帯となつて脛骨結節に停止す。

作用。下腿を伸展す。

神經。股神經。

動脈。外廻旋股動脈の下行枝、股動脈の筋枝。

二頭膊筋の起始停止及び血管神經との關係を

記せ (大十二年秋大分。昭十一年秋山口、同十二年春福岡)

起始。長頭は、肩胛骨の高上結節から細長い腱を以て起る。

短頭は、烏喙突起から烏喙膊筋の腱と共に起る。

停止は。二條の終腱となつて、圓柱狀の腱は撓骨結節に、薄き腱膜となれるものは前膊筋膜の内側に停止する。

血管、神經との關係。上膊動脈は二頭膊筋の短頭に沿ひ二本の靜脈と共に、二頭膊筋に被はれて、二頭膊筋内筋溝を肘窩に向つて下る。此の筋には上膊動脈の分枝が循り、神經は筋皮神經が分佈する。

下腿屈筋の名稱を擧げよ

1、縫匠筋、2、二頭股筋、3 半腱様筋、4 半膜様筋。

備考。前腓屈筋の名稱、下腿伸筋の名稱、前腓伸筋の名稱、大腿外轉筋の名稱、其の他類題は、皆簡單明瞭であるから、學生自ら假題を作つて答案を書いて見るがよい。わかりにくい時は三十一頁以下の筋肉一覽表を見よ。

腹壁にある筋肉の名稱を問ふ (大十五年五月滋賀)

腹壁を構成する筋の名稱 (昭十一年三月北海道)

一、(A) 縦筋二。(1)直腹筋、(2)三稜腹筋。

一、(B) 横筋三。(1)外斜腹筋、(2)内斜腹筋、(3)横腹筋。

備考。これも前項と同で、肩胛部にある筋の名稱、背部淺層にある、胸部にある、前腓にある、上腓にある、臀部にある、大腿前側、後側にある、下腿後側にある筋の名稱等、皆考へておくとよい。不明の時は三一頁以下の記事で練習せよ。

備考

筋肉一覽表 (全身の筋肉)

一、軀幹筋 (背面)

筋層淺 (1)

筋名	起	停止	所在	作用	神經
(1)僧帽筋	上項棘、項棘、全胸椎棘突起	鎖骨外端部、肩峰突起	上背部皮膚の直下にあり	肩胛骨鎖骨及び肩峰部を後上方に牽く	副神經
(2)濶背筋	下五個の胸椎棘突起、下三四肋骨、腰背筋後葉	扁平な筋で大圓筋と共に上膊骨後面の上端に、上膊骨小結節棘(即ち内縁)	下背部胸部に在り	上肢を後下方に牽き、少し内旋をす、上げた上肢を下す	肩胛背神經、肩胛下神經、背椎神經後枝
(3)菱形筋	項棘帯の下部、四胸椎棘突起	肩胛骨の脊柱縁(即ち内縁)	上背部僧帽筋に被はる	肩胛骨を上方に動かす	後胸腺神經
(4)肩胛舉筋	第一、二、三、四頸椎棘突起	肩胛骨上内隅	側頸部に在り	肩胛骨舉上	脊椎神經後枝
(5)後上鋸筋	項棘帯下部第七、三、四胸椎棘突起	第二、三、四肋骨	上背部菱形筋に被はる	上部肋骨舉上	肩胛背神經、脊椎神經後枝
(6)後下鋸筋	腰背筋後葉	下四個の肋骨	下背部にあり濶背筋に被はる	下部肋骨を牽き下げる	脊椎神經後枝

備考。「僧帽筋の起始停止並びに分佈神經の名稱」(昭六年四月栃木、昭九年春熊本、同年秋滋賀)

深 (2)

筋名	起	停止	所在	作用	神經
(1)夾板筋	頸夾板筋は第三、四、五胸椎棘突起、頸夾板筋は第三、四胸椎棘突起	第一、二、三椎乳の突起の後面と上項棘の後面	上背部より項部	一側方への作用をたす、椎と頸部を側方に過す、頭を後方に彎曲す	頸椎神經後枝

筋 胸 (2)

筋名	起 始	停 止	所 在	作 用	神 經
(1) 大 胸 筋	鎖骨内半部、胸骨上方六個の肋軟骨直腹筋鞘	上臑骨大結節棘	胸廓前面、皮膚直下	上臑骨を前内方に牽き、又内方に回旋する	前胸廓神經
(2) 小 胸 筋	第三、四、五肋骨の前面	肩胛骨鳥喙突起	大胸筋に被はる	肩胛骨を内下方に牽く	前胸廓神經

筋 腹 (1)

筋名	起 始	停 止	所 在	作 用	神 經
(2) 三 稜 腹 筋	恥骨弓内縁の上側	白 條	白條の下端	白條を下方に牽く	腸骨下腹神經
(3) 内 斜 腹 筋	腰背筋膜後葉、腸骨棘帯	斜腹筋の腹膜は外癒着し、直腹筋と白條に通じて	外斜腹筋に被れ、同筋と方向相反す	胸廓を下げる。片側の作用は側屈を旋す。	第十二肋間神經、腸骨下腹神經
(4) 外 斜 腹 筋	第五乃至第十二肋骨、但し上部は前大翼筋の起部、下部は深背筋起部と交叉す	恥骨結節、後部は腸骨の前半部に	腹及び下胸部の前側面	内斜腹筋に同じ	同 前
(5) 横 腹 筋	下六個の肋骨内面、腰背筋膜、腸骨棘帯、外半部	横走し、腱膜になる	腹壁の前及側面	腹腔を壓縮す	第十二肋間神經、腸骨下腹神經

備考。腹部諸筋の名稱及び作用 (昭五年十月長野、昭十四年春山梨)
 腹部の名稱と血管神經に就いて (昭六年十一月三重)
 腹部諸筋の名稱及び起始停止 (昭十二年五月佐賀、昭十二年五月奈良)
 腹部諸筋の名稱 (昭十三年四月北海道)
 腹部を構成する主なる筋肉を挙げ且つ其の分佈神經及び血管に就いて記せ (昭十三年九月青森)

筋 層

筋名	起 始	停 止	所 在	作 用	神 經
(2) 薦骨脊柱筋	第三、四腰椎の後葉、腰背筋膜	全脊椎の棘状突起、横突起、肋骨の後縁、乳嘴突起	筋位により腸肋す、背長筋となす	軀幹を直立す、片側作用は脊柱の側屈及回旋	脊椎神經の後枝
(3) 横突起間筋	横突起より	横突起に	横突起間に	薦骨脊柱筋に同	同
(4) 棘 筋	腰椎上部、下部脊椎の棘状突起	各上位の棘状突起	脊柱正中に附着	薦骨脊柱筋に同	同
(5) 横 棘 筋	各横突起	脊柱正中に附着		薦骨脊柱筋に同	同
(6) 後頭頸筋	略す	略す	大小後頭直筋、上下斜頭筋	頭首の直立。片側作用頭を回旋す	
(7) 棘起間筋	略す	略す		脊柱を直立せしむ	

二、軀 幹 筋 (前面)

筋名	起 始	停 止	所 在	作 用	神 經
(1) 直 腹 筋	第五、六、七肋軟骨の前面	恥骨弓上縁の内側	腹壁の前、白條の兩側に位す	胸廓と骨盤とを前方に近づける。脊柱を前屈する	肋間神經前穿行、腸骨下腹神經、腸骨棘帯神經

備考一。來板筋を背部淺層筋に算入する學者もある。何れでも差支へない。
 備考二。「背筋の名稱を挙げよ。」 (昭九年春茨城)

筋 頸 (3)

筋名	起 始	停 止	所 在	作 用	神 經
(1) 潤 頸 筋	大胸筋上縁筋膜	下顎骨頸部と耳下腺咬筋膜	皮膚の直下顎部より頸部まで	頸部の皮膚の弛緩を防ぐ	上、下頭皮下神
(2) 胸鎖乳嘴筋	胸骨の上縁鎖骨の内縁	乳嘴突起後側	頸の側方に於て前下方より後上方に斜に走る	一側の作用は側屈して反対側は側屈して後屈する	副神経の分枝頸椎神経後枝
(3) 二腹顎筋	乳嘴突起内面	下顎骨の二腹顎筋窩	側頭部と前頭部	下顎骨を引き下げる舌骨を引き上げる	後腹二莖状神経前腹二莖舌神経
(4) 前斜角筋	下三、四頸椎突起	第一肋骨の斜角結節	側頭部	肋骨を上製す	膊神経叢分枝
(5) 中斜角筋	全頸椎横突起	第一肋骨に於て鎖骨下動脈溝の後部	同	同	同
(6) 後斜角筋	下三、四頸椎突起	第二肋骨外側	同	同	同

備考一。「胸鎖乳嘴筋、大動脈、尺骨神経を詳記せよ」(昭九年春徳島)
備考二。「胸鎖乳嘴筋の起始停止並びに神経との關係」(昭二年秋廣島、昭十六年五月廣島)
備考三。頸部に於て舉握し得る筋の名稱及び其の作用 (昭八年秋靜岡)
備考四。頸部の表面にある筋の名稱 (昭十年秋廣島)
一、名稱。前頸部に於ては潤頸筋、側頸部に於ては胸鎖乳嘴筋。
一、作用。潤頸筋は頸の外皮を緊張す。

層 深 (口) 層 淺 (イ)

筋名	起 始	停 止	所 在	作 用	神 經
(1) 外肋間筋	肋骨下縁	下位肋骨の上縁	各肋間の外側	肋骨を舉上して吸氣を補助す	肋間神経
(2) 内肋間筋	肋骨隔から胸骨の端に至るまでの下縁	下位肋骨隔から胸骨端に至るまでの上縁	各肋間の内側	呼氣を補助す	同
(3) 前横胸筋 (肋學筋)	第三乃至第五肋軟骨の内面胸椎横突起	胸骨側縁の下部及剣狀突起		肋軟骨を下製す	同備考 内乳動脈は此筋と肋骨の間を下行す
(4) 後横胸筋 (横胸筋)	胸骨體下部後面	第二乃至第六肋軟骨の後面		内肋間筋を補助す	肋間神経

備考。胸部に於ける筋肉の名稱 (昭四年十月靜岡)
胸部淺層筋の名稱を擧げ其の起始停止及び神經に就いて (昭十二年十月福島)
大胸筋の起始、停止作用及び分佈神經 (昭十二年十月栃木)

備考。「呼吸に必要な筋の名稱」(昭十年十月愛知)
「胸部並に腹部に存する筋名」(昭十三年十月徳島)



三、頭部筋

筋蓋頭 (1)

(7) 肩隅舉筋	上三、四頸椎横突起	肩胛骨上内隅	後頭部	肩胛骨を上擧す	頸椎神經 肩胛背神經分枝
----------	-----------	--------	-----	---------	--------------

其他舌骨の上・下に

舌上筋には 莖狀舌骨筋、顎舌骨筋、頤舌骨筋がある。

舌下筋には 胸骨舌骨筋、胸骨甲狀筋等がある。

又、長頸筋、頭長筋、前大直頭筋、前小直頭筋等が後頭骨と第一第二頸椎の間にある。

筋名	起	始	停	止	所	在	作	用	神	經
(1) 前頭筋	眉間と眉部の皮膚	帽狀腱膜	前頭部と	前頭部と	前頭部と	前頭部と	眉を擧げる 前頭の皮膚に横皺をよせる	前頭神經		
(2) 後頭筋	後頭骨後面	後頭骨後面の帽狀腱膜	後頭部	後頭部	後頭部	後頭部	帽狀腱膜を後にひく	耳後神經 後頭神經		

其他、耳前筋、耳上筋、耳後筋は其の名の如く耳の前、後及び上にある小筋である。

帽狀腱膜

帽狀腱膜はトルコ帽の様な腱膜で皮膚とは固く密着し、骨膜とは緩く附着して居る。此の腱膜の後方は後頭筋の停止部、前は前頭筋の停止部、側部は耳前、耳後筋の起始部となる。

(筋情表) 筋面顔 (2)

備考。「顔面筋に就いて記せ。」(昭和九年秋茨城)

筋名	起	始	停	止	所	在	作	用	神	經
(1) 咬筋	顎骨弓	下顎枝下端の外	頰部の後	頰部の後	頰部の後	頰部の後	上顎を前上方に牽引す	三叉神經第三枝の運動枝		

- 1 口輪匝筋——口腔の周圍を輪狀に圍繞す——唇を閉じ唇に皺を作る
- 2 三角頤筋——口角を引下げる
- 3 笑筋——えくぼを作る
- 4 頤骨筋——口角を後及び上方に引く
- 5 方形上唇筋——上唇及び鼻翼を引き上げる
- 6 方形下唇筋——下唇を牽き下げる
- 7 犬齒筋——口角を上方に引く
- 8 頰筋——口角を側方にひき口裂を閉じ頰及び唇を齒列に密着せしむ
- 9 門齒筋——頤と唇との間の間を深める
- 10 頤筋——右に同じ
- 11 鼻筋・眼輪匝筋

以上の筋は一部は皮膚に、一部は骨に、起始停止して表情運動をなさしむるものである。神經は顔面神經が分佈する。又所謂咀嚼筋は、咀嚼運動をなす。

側前(イ) 筋膊上 (2)

筋名	起	始	停	止	作用	神経
(1) 二頭膊筋	長頭は肩胛骨高上結節、短頭は同鳥喙突起		撓骨結節、前膊筋膜		前膊を屈し撓骨を廻す	外膊皮下神経、一名筋皮神経
(2) 鳥喙膊筋	鳥喙突起		上膊骨内面の粗糲部		上膊を擧上す	同
(3) 内膊筋	上膊骨下半部		尺骨結節		前膊を屈す	同

備考。上膊筋の名稱と分佈する神経の名稱 (昭六年十月榑木)
 二頭膊筋、内膊筋、三頭膊筋の起始停止、作用 (昭五年十一月秋田)
 二頭膊筋の起始經過及び停止 (昭十年十月山口)

備考一。「肩胛筋の名稱及び三角筋の起始、作用及び分佈する神経」 (昭五年五月千葉)
 備考二。「肩胛筋の名稱及び各筋の作用」 (昭九年春榑木)
 備考三。「肩胛部にある筋と神経の名稱を問ふ」 (昭十年十月千葉)
 備考四。「肩胛筋の内にて上膊を上擧する筋」 (昭十三年六月鳥取)

(4) 大圓筋	肩胛骨外縁の下端		上膊骨小結節棘		上膊骨を後上方にひく	肩胛下神経、腋窩神経
(5) 小圓筋	肩胛棘外縁の後部		上膊骨小結節棘		上膊を外轉する	肩胛上神経、腋窩神経
(6) 肩胛下筋	肩胛骨高		上膊骨小結節棘		上膊を内轉する	肩胛下神経

筋部 肩 (1) 上 筋 嚼

筋名	起	始	停	止	作用	神経
(1) 三角筋	鎖骨の外端、肩峯突起、肩胛棘		上膊結節		上膊を側方水平にまで高む	腋窩神経
(2) 棘上筋	肩胛骨棘上高、棘上筋膜		上膊骨大結節棘の上部		三角筋を補助す	肩胛上神経
(3) 棘下筋	肩胛骨棘下高		上膊骨大結節棘の中部		上膊を外轉す	肩胛上神経、肩胛下神経

備考。三角筋の起始、停止 (昭和四年春静岡)、其他

四、上肢諸筋

備考。廣義の咀嚼筋は此の他に二腹筋前腹と顎舌骨筋を加へるものである。
 備考。咀嚼筋の起始停止及び名稱 (昭二年秋滋賀、昭四年春山梨、昭六年三月山梨) 咀嚼筋の名稱及び作用 (昭五年十月鳥根)
 備考。咀嚼筋の名稱及び分佈する神経の名稱 (昭五年十月榑木)

(2) 顚顎筋	全顚筋高及顚筋膜		下顎骨の鳥喙突起		耳の上方	下顎を後上方に牽引す	同
(3) 外翼狀筋	翼狀突起の外板		下顎骨頸の顎狀高		耳前の下方	關節頭を結節上に前進せしむ	同
(4) 内翼狀筋	翼狀高		下顎枝の内面		同	下顎枝を内方に牽く	同

側 撓 (ハ) 層深側前 (ロ)

筋名	起	始	停	止	作	用	神	經
(2) 長外撓骨筋 (長撓腕伸筋)	上膊骨外上髁		第二掌骨基底の背面		前膊を背屈す 手首を伸す		同	
(1) 膊撓骨筋	外筋間靭帯 上膊骨外隅		撓骨莖状突起		前膊を背屈し廻後を 補助す		撓骨神経の深枝	
(3) 廻前方筋	尺骨下端前面		撓骨下端前面		前膊廻前		同	
(2) 長屈拇筋	撓骨の前 骨間靭帯		拇指第二節		拇指を屈す		同	
(1) 深屈指筋	尺骨の前 骨間靭帯		第二、三、四、五指の第三節		浅屈指筋と共に 各指を屈す		正中神経	
(5) 浅屈指筋	上膊骨内上髁 撓骨の上部		第二、三、四、五指の二節		第二乃至第五指の中 節を屈す		正中神経筋枝	

備考。「前膊前側(浅層)筋の名稱を擧げ其の起始並びに分佈する神経の名稱を記せ」(昭六年四月京都)
 「前膊前側諸筋を列擧せよ」(昭十一年春兵庫)
 「前膊屈筋の名稱」(昭十二年十月山形)
 「前膊を屈する筋の名稱並びに之に分佈する血管神経」(昭十三年四月大阪)

層浅側前(イ)筋膊前(3) 側 後(ロ)

筋名	起	始	停	止	作	用	神	經
(4) 内尺骨筋 (尺腕屈筋)	上膊骨内上髁 尺骨鷹嘴突起		豆骨		手腕屈曲及び内轉		尺骨神経筋枝	
(3) 長掌筋	上膊骨内上髁		手掌腱膜		手掌腱膜を緊張す		同	
(2) 内撓骨筋 (撓腕屈筋)	上膊骨内上髁		第二掌骨の基底		手腕を屈す		同	
(1) 廻前圓筋	上膊骨内上髁 尺骨結節		撓骨粗嚙部		前膊の廻前及び屈曲		正中神経	
(2) 小肘筋	小筋で三頭膊筋 の頭の上 の腕と思つてよ		同		三頭膊筋の下縁		同	
(1) 三頭膊筋	長頭は窩下結節 の内頭は外頭は内 頭の下		尺骨の鷹嘴突起		上膊後側の皮下 にある		前膊を伸す 前膊を轉す	撓骨神経の筋枝

備考。「上膊骨に起始停止する筋の名稱」(昭六年十月長野)は澤山の筋名を書かねばならぬ。
 三十八頁の上肢筋からこゝまで自ら記録して見よ。
 「上膊の筋の名稱並びに起始停止」(昭九年春高知)
 「上膊に於ける筋神経及び脈管の名稱」(昭十一年十月沖繩)
 「上肢を構成する主なる筋肉を擧げ其の分佈神経及び脈管に就いて」(昭十一年九月青森)
 「上膊部を構成する筋名並に血管神経の經過」(昭十二年春静岡)

側指拇 (イ)

筋名	起	始	停	止	作用	神経
(1) 蠱様筋	深屈指筋		指背腱膜側		第一節を屈す	正中神経
(2) 短屈拇筋	大多稜骨結節		種子骨		拇指を屈す	同
(3) 對小指拇筋	横腕骨掌側靭帯及び大多稜骨結節		拇指掌骨外側		拇指を小指に對向せしむ	同
(4) 内轉拇筋	第三掌骨の前面及び有頭骨の一部		種子骨		拇指を内轉す	尺骨神経深枝
(1) 短外轉拇筋	横腕骨掌側靭帯及び大多稜骨結節		外種子骨及び拇指第一節の外隅		拇指を外轉す	正中神経の分枝

五、手

筋

備考。前膊を屈伸する筋を列挙せよ (昭十年秋兵庫)

(4) 長伸拇筋	同		拇指第二節		拇指を伸轉し、且つ後方にひらく	同
(5) 固有示指伸筋	同		第二指の指背腱膜		總指伸筋を補助す	同

層深側後 (ホ)

筋名	起	始	停	止	作用	神経
(1) 廻後筋	尺骨上端の外側		腕骨外面粗嚙部		前膊廻後す	腕骨神経深枝
(2) 長外轉拇筋	尺骨の上方と骨間靭帯		拇指掌骨の基底		手を外轉し、又拇指を小指に對向せしむ	同
(3) 短伸拇筋	同		拇指第一節		拇指外轉	同

層淺側後 (ニ)

筋名	起	始	停	止	作用	神経
(1) 總指伸筋	上膊骨外上髁前膊の筋膜		四條の腱に分れて第二、三、四、五指の第三節		第二、三、四、五指を伸す	同
(2) 固有小指伸筋	同		小指指背腱膜		第五指を伸す	同
(3) 外尺骨筋	上膊骨外上髁尺骨の上端		第五掌骨の基底		手腕を伸す	同
(3) 短外腕伸筋 (短腕伸筋)	上膊骨外上髁下部		第三掌骨基底の背面		同	同

筋部腕外 (ロ)

筋名	起	止	作用	神経
(1) 大臀筋	腸骨の後面 薦骨外側縁	大腿筋膜及び 大腿骨後面の上部	大腿を後方に伸し、 少し内轉す	下臀神經 上臀皮下神經
(2) 中臀筋	腸骨翼外面の上部	大轉子	大腿外轉	上臀神經
(3) 小臀筋	同中部	同	同	同
(4) 梨子狀筋	薦骨前面の側部	同	同	坐骨神經分枝
(5) 内鎖筋	骨盤内の閉鎖孔と其 周圍	轉子窩	同	同
(6) 外鎖筋	骨盤外の閉鎖膜と其 周圍	同	同	閉鎖神經
(7) 方形股筋	坐骨結節前縁	同	同	坐骨神經分枝

備考。「大臀筋の起始停止之に分佈する神経の名稱」(昭五年九月大版)

(3) 方形腰筋

小腰筋ともいひ大腰筋の前にあることも、ないこともある。

同

筋諸部腰(1)
筋部腕内(イ)

六、
下
肢
諸
筋

筋指小(ハ) 央中(ロ)

筋名	起	止	作用	神経
(1) 腸骨筋	腸骨窩	大腿骨小轉子	大腿を前屈し少し外 旋する	腰神經叢 股神經分枝
(2) 大腰筋 <small>此筋を二筋と する事あり</small>	第十二胸椎乃至第一 腰椎體、全腰椎横突	同	同	同
(1) 外轉小指筋	豆骨	小指第一節の基底	小指を外轉す	尺骨神經末枝
(2) 對拇小指筋	鈎狀骨の鈎狀突起	小指掌骨内側	小指を拇指に對向せ しむ	同
(3) 短屈小指筋	同	小指第一節基底の掌 側	小指を屈す	同
(2) 掌側骨間筋	第一は第二掌骨の尺 五掌骨の桡側	第二、第四、第五指 骨第一節の基底	内轉筋にして中指に 向ひ集合す	尺骨神經の深枝
(3) 背側骨間筋	第一乃至第四掌骨間	第二第三指の桡側 第三第四指の尺側	外轉筋にして中指よ り兩方に開放す	桡骨神經末枝

筋諸腿下 (3)
側前 (イ)

側内 (ハ)

筋名	起	始	停	止	作用	神経
(1) 前脛骨筋	脛骨の外側と骨間膜	第一、二、三、四、五趾	第一、二、三、四、五趾	第一、二、三、四、五趾	足を背屈し、足の内縁を擧げる	深腓骨神経
(2) 長總趾伸筋	腓骨の中部と骨間膜	第二、三、四、五趾	第二、三、四、五趾	第二、三、四、五趾	上記の四趾を背屈する	同
(3) 長伸趾筋	同	同	同	同	同	同
(4) 短内轉股筋	坐骨下行枝の上部	大腿骨轉趾骨後面の上部	大腿骨の後面	同	大腿を内轉す	同
(5) 大内轉股筋	坐骨結節坐骨下枝	大腿骨の後面	同	同	同	坐骨神経筋枝
(1) 恥骨筋	恥骨前方上縁	大腿骨上端の後面	大腿骨後面中央	大腿内轉且屈曲	閉鎖神経	閉鎖神経
(2) 長内轉股筋	恥骨結節の下部	大腿骨後面中央	大腿骨後面中央	大腿を内轉す	閉鎖神経	閉鎖神経
(3) 薄股筋	恥骨弓の中央	脛骨結節	脛骨結節	大腿内轉、下腿屈曲及び内旋	同	同

側後 (ロ) 側前 (イ) 筋諸腿大 (2)

筋名	起	始	停	止	作用	神経
(1) 股鞘張筋	腸骨前上棘	大腿筋膜外側上半部	大腿筋膜外側上半部	大腿筋膜外側上半部	筋膜を緊張す	上脛神経の分枝
(2) 縫匠筋	同	内側	脛骨結節下脛筋膜の内側	下腿を屈し少し内旋す	股神経分枝	股神経分枝
(1) 二頭股筋	長頭坐骨結節、短頭大腿骨轉趾骨の中部	腓骨小頭の後面	腓骨小頭の後面	下腿を屈す	坐骨神経筋枝	坐骨神経筋枝
(2) 半膜様筋	坐骨結節	膝關節囊、膝關節膜	膝關節囊、膝關節膜	同	同	同
(3) 半腱様筋	同	脛骨結節の下及び下脛筋膜	脛骨結節の下及び下脛筋膜	同	同	同

「臀部に於ける筋の名稱及び其の支配神経」(昭十一年秋北海道)

備考。「大腿前側に於ける筋に就き詳記せよ」(昭十一年春鳥取)

備考。「二頭股筋の起始停止並びに之に分佈する神経と動脈」(昭三年春滋賀)
「大腿筋の名稱」(昭十二年十月茨城)
「大腿部に於ける筋肉の名稱」(昭十三年四月兵庫)

七、足

筋背足(1)

筋名	起	始	止	作用	神経
(1)短伸躡筋	跟骨上面		躡趾の腱膜	長伸躡筋を補助す	深腓骨神経の末枝
(2)短總趾伸筋	跟骨上面		第二乃至第四趾の趾背腱膜	長總趾伸筋を補助す	同
(3)背骨間筋	第一乃至第四趾骨		略	略	同

筋

筋名	起	始	止	作用	神経
(2)長總趾屈筋	脛骨後面		四條の腱となつて第二、三、四、五趾の第三節	上記の趾を屈す	同
(3)後脛骨筋	脛骨後面骨間膜		第一楔狀骨の趾面	足を後方に伸し少し内旋す	同
(4)長屈躡筋	腓骨下半部後面骨間膜		躡趾末節下面	躡趾を屈す	同

備考。「下腿後側筋の名稱及び起始停止並びに之に分佈する神経」(昭和四年四月島根)
 「下腿筋の名稱を列記せよ」(昭六年十月福井、昭六年十月山形)
 「下肢に於ける筋及び運動神経を擧げよ」(同九年秋青森)は主要なる筋名と神経とを記して答案とすればよし。
 「下腿の中央部を切断するときは如何なる筋、神経を切断するや」(昭十三年五月栃木)

層深

層淺側後(ハ) 側骨腓(ロ)

筋名	起	始	止	作用	神経
(1)腓腸筋	内頭大腿骨内髌外頭同外髌		合してアキリス腱となり跟骨結節に	踵を挙げ足を後方に伸す	脛骨神経分枝
(2)比目魚筋	大腿骨外上髌		アキリス腱に	足を趾側に伸す	同
(3)長足蹠筋	同		同	同	同

備考。「腓腸筋の起始、停止、作用」(昭八年春埼玉、同九年春山梨、同九年秋北海道、同十四年春栃木)
 「下腿後側筋の起始停止、作用、分佈神経の名稱」(昭九年春島根)
 「腓腸筋の起始、停止、分佈神経」(昭十二年十月栃木)

筋名	起	始	止	作用	神経
(1)膝膕筋	大腿骨外髌		脛骨膝膕斜韌帶	下腿を屈す	脛骨神経筋枝

筋踮趾側 (2)

筋名	起	始	停	止	作用	用	神經
(1) 外轉踮筋	跟骨及舟狀骨の内側		内種子骨		踮趾を外轉す		内足趾神經
(2) 短屈踮筋	跟骨、足趾靭帯		二個に分れ内外種子骨に終る		踮趾を屈曲す		同
(3) 内轉踮筋	横頭は第三乃至第五跗骨、趾骨、關節の下面。斜頭は跟骨、足趾靭帯		外種子骨		踮趾を内轉す		足趾神經深枝

筋中央 (3)

筋名	起	始	停	止	作用	用	神經
(1) 短屈趾筋	跟骨結節及足趾腱膜		第二乃至第五趾の第二節		各趾を屈す		内外足趾神經
(2) 蟲様筋	長總趾屈筋の腱		趾背腱膜の第二乃至第五趾の踮趾側		各趾の第一節を屈す		同
(3) 方形足趾筋	跟骨の趾側		長總趾屈筋の腱		長總趾屈筋を補助す		外足趾神經
(4) 蹠側骨間筋背側	蹠側及び背側の二種ある骨間に存在する				趾を内外兩轉		内外足趾神經

筋側趾小 (4)

筋名	起	始	停	止	作用	用	神經
(1) 外轉小趾筋	跟骨の外側		第五趾基底の外側		小趾を外轉す		外足趾神經深枝
(2) 小趾屈筋	跟骨、種子骨、足趾靭帯		同じく底面		小趾を屈す		同
(3) 對蹠小趾筋	同		第五趾骨外面		蹠趾に對向せしむ		同

注意。畧は、重要でない部を省略したのである。

第三節 内臟學

内臟系統

内臟系統とは、概ね管系統と腺體で
 1、消化器系統。
 2、呼吸器系統。
 3、泌尿器系統。
 4、生殖器系統から成るものである。
 そして腎臓のやうに内部の充實したものと、膀胱のやうに内部が腔洞を成すものがある。

粘 膜

胃、腸、子宮等の管系統に屬する内部の腔洞な臓器の内面は、いつでも粘液で濕ほつて居る。それが粘膜であつて、固

有粘膜層、粘膜下組織、筋膜、外膜から成る。固有粘膜層の上皮細胞は種々陥没して腺となるものである。

腺

腺は固有粘膜組織の一部が深部に陥没したものであつて、其の形態上、胞状腺と管状腺とを區別する。又腺の單一なると複雑なるとによつて、單状腺と複状腺とを區別する。普通の腺は腺體と排泄管から成る。けれども特別のものにはホルモン腺(脈管腺、血管腺)といつて排泄管のないものもある。

内部の充實せる内臓の構造

腎臓、肝臓等であつて、各々構造は異なるが、概論して見ると、充實性の内臓は、各々固有の構造をもつて居る。髓質(實質)、と皮質(支質)、から成るものである。

筋 織 膜 (筋層膜)

粘膜の外側にあつて、平滑筋から成るもので、腸管の内層は輪狀筋纖維であり、外層は縦走筋纖維である。子宮や膀胱等は、縦走纖維、横走纖維、斜走纖維、の三層から成つて居る。

漿液膜及び外膜

一、漿液膜。内臓の最外層は、胸腔や腹腔では漿液膜で被はれてゐる。漿液膜の表面には單層扁平上皮細胞があつて漿液の爲に濕ふて居る、此の上皮の内側には薄い結締組織層があり、更に其の内側には筋膜との間に漿液膜下組織がある。一、外膜。脾臓や、子宮膀胱等の臓器は、鬆疎な結締組織で、近くにある器官と結合する、此の結締組織がつまり外膜である。

消化器系統

消化器系統を構成するものは所謂管系統であつて、口腔、咽頭、食管、胃、小腸、大腸を區別し。大なる腺では唾液腺、膵臓、肝臓を加へる。

備考。唾液腺や膵臓、肝臓等を忘れぬやうにせよ。

「消化器の名稱及び分佈する神経」(昭十年十月島根)

「消化器の名稱及び其の作用」(昭六年四月香川、昭十二年五月香川) 其他作用は第二編生理學の部の消化生理を概論せよ。

「消化器の名稱」(昭十年七月神奈川、同秋神奈川)

口 腔

口腔は、口腔前庭と固有口腔とに二大別する。

一、口腔前庭。は唇、頬に接し、齒齦及び齒列の外部にある。
二、固有口腔。は齒齦。齒列より内部の廣き部分であつて、上は口蓋、下は舌、後方は咽頭である。唾液腺、扁桃腺を有す。

唾 液 腺 (昭九年春三重)

三大唾液腺と無数の小唾液腺とがある。

- 一、三大唾液腺。 (A)耳下腺(蛋白腺)、(B)顎下腺、(C)舌下腺(漿液粘液混合腺)。
- 二、小唾液腺。 (A)口腔粘膜腺(混合腺)、(B)舌の輪廓様乳頭の附近(漿液腺)。

備考。耳下腺の排泄管はステノン氏管ともいひ、上顎第二臼齒の頰面に開口す。

舌下腺、顎下腺の排泄管は、舌繫帯の兩側に開口す。

小唾液腺は口腔の粘膜に開口す。

「唾液腺の構造及唾液の化學的成分」(昭十年十月佐賀、十一年秋山口)

「唾液腺の名稱、所在、排泄口の位置」(昭十二年春福岡)

「消化腺の名稱、位置、機能」(昭十二年十月京都)

扁 桃 腺

舌扁桃腺、咽頭扁桃腺、を總稱するものであつて、所謂扁桃腺窩にある。

多くの淋巴結節の集合せるもので、表面は凹凸不等處々深き小窩がある、その小窩を扁桃腺小窩といふ。

齒の數及び名稱

齒は上・下顎骨の齒槽に入つて齒列を作つて居る。數は三十二個である。

大臼齒6、小臼齒4、犬齒2、門齒4、(以上)。齒は上顎下顎に各々十六個宛である。

齒の構造並に分佈する神経

齒冠の表層の硬い部が珐瑯質、齒根の部の薄いのが白亞質、其の他の部分が象牙質であつて、中央には齒髓がある。神経は。上齒には三叉神経第二枝の前上齒槽神経、後上齒槽神経。下齒には同じく第三枝の下齒槽神経が分佈する。

舌の構造及び其の神経動脈 (昭十年十月兵庫)

構造。舌は種々なる方向に走る横紋筋から成るもので、稍々橢圓形で、前大部は舌尖、中部は體、後部は舌根といふ。重層扁平上皮で被はれて、絲狀乳頭、蕈狀乳頭、輪廓様乳頭、葉狀乳頭と言ふ四種の乳頭がある。

一、血管。舌動脈、舌靜脈。

一、神経。舌下神経(運動)、三叉神経第三枝の舌神經(感覺)、舌咽神経(味覺)。

備考。「舌を運動する神経の名稱及起始、經過」(昭十年十月岡山)

食管の位置形状構造

位置。環状軟骨(第六頸椎)の高さから、第十一胸椎の高さにあつて、氣管の後側、脊柱の前側を少し左によりつゝ下る。

構造。扁平なる膜管で、粘膜、粘膜炎組織、筋織膜、外膜より成る。

備考。神経は、迷走神経の前後食管叢である。

胃の位置形状區別並に之に分佈する神経血管 (昭十一年春福井、同十三年秋岡山)

位置。胃は横隔膜の直下で、腹腔の左上方に斜にある、食道の下端と十二指腸の上方との間にある。形状。牛角状の膜囊である。

區別。入口は噴門、出口は幽門、其の間は胃體、上は小灣、下は大灣である。

備考。「胃の位置及び形状」(昭五年十月熊本、昭九年秋長野)

血管。動脈は左胃冠動脈及び内臓動脈軸の分枝の分枝。

静脈はほぼ同名静脈があつて門脈に入る。

神経。迷走神経(副交感神経)の前胃叢・後胃叢と・交感神経とである。

備考。「胃に分佈する神経の名稱」(昭十一年秋山口)

「胃に分佈する主なる神経及血管の名稱」(昭十一年秋長崎)

小腸

胃と大腸との間にあつて、長さ約五、五米の膜管である。十二指腸、空腸、廻腸の三部に區別す。

(A)十二指腸。後腹壁の上部で、前面は腹膜に被はれ長さ各人の十二指腸徑、馬蹄鐵形で、上横行部、下行部、下横行部を區別する、輸膽管は下行部の後側に開口して居る。

(B)空腸。小腸間膜によつてよく移動す、下横行部から迂曲廻轉して明かなる境界なくして廻腸となる。空腸は屍體ではいつも空虚である。

(C)廻腸。空腸の下部から右腸骨窩までで迂曲廻轉して居る。構造。粘膜、筋膜、漿膜より成る。

小腸の粘膜炎面は一般に、輪狀皺襞と絨毛(肉眼でやつと見る事の出来る小突起)、十二指腸腺及び腸腺がある。

(註釋) 粘膜炎は粘膜炎の略、漿膜炎も同く液の字を省略した略語である全卷を通じて同じ。

小腸の血管。上腸間膜動脈、同名静脈。

小腸の神経。迷走神経(副交感神経)と、交感神経。

大腸

大腸の部位は小腸と肛門の間で小腸よりも太く短かく、長さ約一、三米、盲腸、結腸、直腸を區別する。

(A)盲腸。部位は右腸骨窩であつて、囊状に膨れて居る、長さ約八仙迷。下方に蟲様突起を出す。廻腸と盲腸の境

には廻盲瓣がある。

備考。「蟲様突起の位置」(昭十一年十月長崎)

(B)結腸。(一)上行結腸、(二)横行結腸、(三)下行結腸、(四)S字狀結腸を區別する。

(一)は右腸骨窩から肝の下面迄。(二)は肝の下面から左方脾の下面まで。(三)は左季肋部からS字狀結腸

部(左腸骨窩)まで。(四)は左腸骨窩内である。

(C)直腸はS字狀結腸部から小骨盤内を下つて肛門に終るものである。

備考。「大腸の位置に就き説明せよ」(昭十二年四月愛知)

構造。粘膜、筋膜、漿液膜。

血管。動脈は上腸間膜動脈、下腸間膜動脈より分枝して粘膜層で毛細血管網を作る。

静脈はほぼ同名の静脈であつて門脈に入るものである。

神経。迷走神経、骨盤神経(以上副交感神経)と交感神経であつて、これらはアウエルバツハ氏、マイスネル氏神経叢を

作るものである。

備考。「腸管の位置、形狀並に各部の名稱」(昭六年四月佐賀)は小腸、大腸の記述を熟讀すれば自ら明瞭となる。

「腸各部の名稱及其機能」(昭十一年春福井、昭十二年四月秋田)機能は生理學の部を見よ。

「腸管の構造」(昭十年秋京都)

肝臓の位置形狀區別及構造

(昭十一年春香川、昭十四年春埼玉、昭十一年五月宮崎、昭十三年六月廣島、同五月静岡、昭十二年春秋田、同十月三重、昭九年秋鹿兒島、同福岡、昭十二年十月徳島)

肝臓の位置形狀及生理的作用

(昭十三年五月滋賀、同十月大阪、茨城、昭十一年十月福島、昭十二年春三重、昭十三年四月青森、奈良、昭十五年十月奈良)

位置。上腹部で稍々右方に偏つて横隔膜の直下にある。

形状。身體最大の腺體で重さ約一五〇〇瓦、色は暗赤褐色で稍々方形である。

區別。上面凸、下面凹で、右葉、左葉、前葉、後葉を、區別する。下面には横溝がある之を肝門といふ。

肝門は門脈、肝動脈、肝管、神経の出入部である。

構造。複雑な管狀腺で、肝細胞、血管、排泄管、固有膜から成る。

備考一。神経は迷走神経(副交感神経)と交感神経である。

備考二。肝臓の機能。外分泌としては膽汁の分泌。

内分泌としては一種の淨血作用をなす。

又葡萄糖の形成と還元は睪ホルモンの影響と共に、作用するものである。

備考三。膽汁は綠黄色のアルカリ性液で、味はひ苦く、稍々粘性で其の主成分はグリコロール酸、タウコロール酸、膽汁色素等である。

註。グリコロール酸は甘膽酸ナトリウム、タウコロール酸は牛膽酸ナトリウムである。

「膽汁の性状、成分並に作用」(昭十一年十月長野)

膽囊の位置形狀區別機能

位置。肝臓の下面、右縦溝の下肝臓の膽囊截痕中にあり。

形状。内腔を有する梨子状の膜囊である。

區別。上面、下面を分つ、前部の狭小部は膽囊管となる。

機能。粘液を分泌し膽汁を貯へ消化時に膽汁を排泄す。

備考。構造は粘膜、筋膜、漿液膜である。膽囊計りでない、すべて内部が空洞な管系統に屬する内臓は皆丁寧

に書けば、粘液膜、粘液膜下組織、筋織膜、外膜(漿液膜と纖維膜との二ツがある)であるが、學問上の慣用語とし

て略して粘膜、筋膜、漿膜とするのみである。内腔の充實した内臓は、皮質、髓質から成る、つまり腺體であつて各々固有の構造を持つて居るので一寸や

ゝこし、肝臓や腎臓はこの代表的のものである。巻尾の問題集から、必要なものを選んで答案を記して見

るとよい。

脾臓の位置形状機能

(昭九年春奈良、昭五年四月島根、同五月高知、昭十一年四月富山同長崎、同十月三重、同十三年五月静岡、昭十二年四月熊本、同十四年三重、昭十五年秋熊本、大分、十四年十月長野)

一、位置。第一第二腰椎の高さで其の前面と胃の後面との間に於て後腹壁に接して横たはる。十二指腸より脾臓に達す。

一、形状。牛舌或は紡錘形樹葉を横にしたるやうな腺體である。

一、機能。外分泌としては脾管の脾液即ち強力なる消化液を、排泄し。

内分泌としてはランゲルハンス氏島の内分泌で、血中の過糖を抑制する。

備考。此問題は構造や區別が省略されてある、學生は其點を注意せよ。區別と構造は左に別記する。

一、脾の區別。左端の細き部は尾、右端の膨大部は頭、其の間の大部分を體といふ。

一、脾の構造。複胞状腺、顆粒に富める細胞、細胞間質、胞中心細胞、及び、排泄管とから成る。

備考。「脾臓の生理的機能」(昭五年十月徳島、同十月熊本、同大分)

腹腔内臓器の名稱及び位置

(昭九年秋樺太、同十二年五月長崎、同十三年六月鳥取、同五月滋賀)

(A)名稱。胃、肝、膽囊、脾、大腸、小腸、腎、副腎、輸尿管。

(B)位置。胃は上腹部で横隔膜の下稍々左側に、肝は横隔膜下右季肋部に、膽囊は肝下面の膽囊痕に、脾は左季肋部

で胃底の外側に、脾は第一腰椎の前方で横形に。大腸は右腸骨窩の盲腸から右上方へ上行結腸となり、右か

ら左方へ横行結腸となり、左腸骨窩でS字状結腸となる。(小骨盤内で直腸となり肛門に了る但し此分省略せよ)小

腸はU字形の十二指腸から空腸、廻腸となつて腹腔内を迂曲廻轉する。腎臓は後腹壁で第十一胸椎乃至第三

腰椎の兩側に、副腎は其の上に、輸尿管は後腹壁で腎盂の尖端から前下方の膀胱に向つて下るものである。

備考一。骨盤内臓器を腹腔内臓器に入れる學者もある。

備考二。「腹腔内に存する各臓器の名稱位置並に主要なる血管の名稱を問ふ」(昭六年四月徳島)

「腹腔内臓器の名稱並に作用」(昭十三年四月山梨、同十月奈良、京都)

「腹腔内臓器の位置」(昭五年十月廣島、昭十二年四月兵庫)

呼吸器系統

鼻孔、喉頭、氣管、氣管枝、肺臟である。

備考。口腔で呼吸する事もあるが、口は本來消化器と發聲器で呼吸器でない。其點に注意せよ。
設問「消化器の名稱」「呼吸器の名稱」如何。「呼吸器に屬する器官の名稱、部位及形狀」(昭十年十一月茨城)
「呼吸器各部の名稱及生理的作用」(昭十二年十月大分、昭十二年十月島根)

喉 頭

喉頭は前頸部の中央第六頸椎の高さにあつて、上方は咽頭前方は口腔、下方は氣管に連なる。

内腔を喉頭腔と言ふ。九個の軟骨あり、其中で甲状軟骨は一等大きい。

構造。氈毛を有する粘膜炎、筋膜、軟骨、靱帯から成る。

血管。上、下喉頭動脈、及び靜脈。

神経。迷走神経の上、下喉頭神経と交感神経である。

氣管 氣管枝

氣管は喉頭の下方から第四胸椎の高さまでであつて、長さ九乃至十五仙迷餘、C字狀の十數個の軟骨輪がある。但し後方の一部分には軟骨輪はない。

氣管枝は第四胸椎の部分から、左右の二枝に分かれる。心臟が少し左方にあるから、左の氣管枝は右の氣管枝よりも長い。樹枝狀に分枝して、毛細氣管枝となり、更に肺胞となり、終りに肺の一部を成すものである。

備考。神経。迷走神経幹と、其返廻枝(下喉頭神経)、及び交感神経である。

血管。下甲状腺動脈から分枝するものと、上氣管枝動脈とである、靜脈は下甲状腺靜脈叢に入る。

又第四胸椎の兩傍で聽診器で氣管枝音を聞くことが出来る。

疾病。尤も普通の疾病は、急性、慢性の氣管枝カタル、毛細氣管枝炎等である。

肺臟の位置形狀並に構造作用

(昭十六年五月奈良、昭十年秋新潟、昭十二年春青森、十五年十月滋賀、昭十三年四月新潟)

位置。胸腔内にある。

形狀。鐘狀である。

區別。上端は肺尖、下端は肺底で、その他肋面、横隔面、胸縦隔面を區別する、胸縦隔面には肺門があつて、氣管枝、血管、淋巴管、神経、の出入部である(一括し肺根といふ)。右肺は上、中、下の三葉、左肺は上、下の二葉から成る。外面紋理を現はしてゐるのは肺小葉の表面である。

構造。毛細血管、毛細淋巴管、神経、結締組織である。

備考。神経。迷走神経の肺臟叢(副交感神経)交感神経とである。

血管。肺動脈と肺靜脈。「肺臟及心臟に分佈する、血管及神経の名稱」(昭九年春福岡)

疾病。肺結核、水腫、氣腫、肺炎、肺ヂストマ等。

作用。酸素を攝取し、炭酸を排泄す。即ち一種の淨血機關である。又呼氣による温放散によつて體温の調節を補助する。

泌尿器系統 (昭六年九月東京)

(1)腎臟、(2)腎盂、(3)輸尿管、(4)膀胱、(5)尿道の五部からなるものである。

備考。泌尿器系統の試験問題は殆んど腎臟の問題計りといつてよい位澤山出でる。

「泌尿器の名稱」(昭六年九月東京)。(昭九年春長崎)。

「泌尿器の名稱及其位置、關係」(昭九年秋福島)

腎臟の位置形狀區別並に機能

昭十三年秋神奈川、同十一年九月滋賀、同富山、昭十二年三月長野、同五月群馬、昭十二年四月京都、昭十二年十月宮城、同十月群馬、同十月徳島、昭十一年三月山梨、昭十五年秋熊本、同奈良、同和歌山、昭十六年四月高知、同島根

解題。位置、形狀、區別は解剖學、機能は生理學である。

随分範圍の廣い問題だから概論的に解答すればよい。詳しく書けば複雑なものである。

位置。後腹壁に近く、腹膜外に於て腰椎の兩側にある。上は第十一胸椎の高さから下は第三腰椎の高さに至る。

一、形狀。蠶豆形で外側凸、内側凹、上、下二端は鈍圓である。

一、區別(構造)。皮質、髓質、腎門を區別する。(以上解剖學)

機能。泌尿を司どる腺體であつて、皮質は尿分泌の主要部である。マルピギー氏小體、曲細尿管、血管を持つて居る。髓質は主として排泄管の集合部をいふのであつて初め腎動脈からマルピギー氏小體に來る處の毛細血管の血壓は高くマルピギー氏小體内の血壓は低いから、此の壓の高低と其の部の細胞の固有の働きとで水分と尿成分の一部は濾過せられる。そして曲細尿管を流るゝ時に馬尿酸等はその中に溶け込む、次に直細尿管を流るゝ際に水分の一部分は腎臟に奪取せられて所謂尿となり、腎乳頭の篩孔より排泄せらるゝものである。

其の他異物排泄、及び血液組織を一定ならしむる作用がある。

備考。「腎臟の生理的作用を詳起せよ」(昭十年春静岡、同十一月茨城、同十月愛知、静岡)

備考。神經。神經迷走神經(副交感神經)と交感神經。

血管。は腎動脈(これは終端動脈である)と腎靜脈。

疾病。最も多きは急性腎臟炎、其の他慢性腎臟炎、腎盂炎、腎石痛痛、腎臟結核等。

「泌尿器管の名稱及び尿の分泌機能に就て」(昭六年六月宮崎)は六十四頁より此記事に就て考へよ。

「泌尿器各部の名稱及生理的作用」(昭十三年四月大分)

腎 盂

腎乳頭は膜様の圓管で圍繞せられる、これが小腎盞である、各小腎盞は相合して二箇の短大な圓管となる、これが大腎盞である、此の大腎盞が再び合して圓管囊となる。これが腎盂である、其の下端は縮小して輸尿管となる。

輸尿管の位置形狀區別及各部の名稱 (昭五年九月大阪)

一、位置。大腰筋の前側で腎臟と膀胱の間にある。

一、形狀。扁平の膜管で、長さ約三十仙、迷位である。斜に前下方に下る。

一、區別。其の始端は小腎盞、大腎盞、腎盂で次に腎門を出でて固有の膜管となりて膀胱三角即ち基底の輸尿管口に終る。

一、構造。粘膜、筋膜、外膜の三層から成る。

備考。機能は尿を下方の膀胱に向つて輸送するものである。

膀胱の位置形状區別構造機能

(昭九年春奈良、昭二年九月長野、昭十年秋長崎、昭十四年春山口)

一、位置。普通(空虚なる時は)小骨盤内にあり、男性は恥骨軟骨接合と直腸の間、女性は恥骨と子宮、陰管との間に存す。尿が充盈すると小骨盤外に出る。

一、形状。稍々卵圓形の膜囊である。

一、區別。上端は頂、下部は基底、其の間は體といふ。

基底部の後方に少し斜に輸尿管口があり、基底の前は漏斗形に狭少して内尿道口となる。内尿道口を圍める部は輪狀皺襞で内膀胱括約筋といふ。外には横紋筋より成れる外膀胱括約筋がある。

一、構造。粘膜、筋膜、漿膜から成る。

筋膜は内、外、中の三層から成る、平滑筋組織であつて、内縦走、中輪走、外縦走纖維である。

一、機能。尿を蓄溜して約三百瓦乃至五百瓦になつたならば、利尿中樞の興奮により、内、外括約筋が弛緩し體部筋が收縮して排尿作用を営む。

備考。神經。交感神經と、骨盤神經叢から来る副交感神經とである。(昭十六年徳島)

血管。上膀胱動脈は臍動脈の殘存部より起り、下膀胱動脈は内腸骨動脈の枝より來る。女性は此他に子宮動脈の分枝も分佈する。靜脈は膀胱靜脈叢を作つて、骨盤靜脈中に入るものである。

又一日の健康人の普通尿量は男性は約二千瓦、女性は約一千五百瓦である。

疾病。膀胱加答兒最も多く、膀胱麻痺、膀胱痙攣、膀胱結石等である。

「膀胱の構造及び分佈する神經」(昭六年四月愛知)

尿道

一、位置。膀胱の内括約筋の部から、陰莖の外尿道口までである。

但し、女性は陰前庭の外尿道口までである。

一、區別。(A)攝護腺部(攝護腺内を通る部)。(B)膜様部(泌尿生殖横膈膜を穿つの部)。(C)海綿體部(陰莖の

海綿體に圍まるゝの部)の三部とする。

一、構造。粘膜、粘膜炎下組織(甚だ血管に富む)、筋膜である。

備考。男子の尿道は、排尿道であると同時に射精道でもあるから、男子尿道を泌尿生殖道といふ、

生殖器

種族蕃殖の器關である。男女によつて生殖器は全く異なる、だから男女生殖器系を區別する。男女の性別は實に其の内生殖器の差異によつて決定する。

男子生殖器

之を内、外生殖器に二分する。

- 一、内生殖器。(1) 睪丸、(2) 副睪丸、(3) 攝護腺、(4) 陰囊、(5) 輸精管、(6) 精囊。
- 一、外生殖器。(1) 尿道、(2) 陰莖。

睪丸の位置形状區別構造

- 一、位置。左右一個宛陰囊内にある。
 - 一、形状。卵圓形。
 - 一、區別。内、外二面、上、下二端、前、後二縁を別つ。
 - 一、構造。皮質と髓質とより成る。皮質は多數の血管を有する脈管膜で、髓質は細精管と結締組織である、最外層は強靱な睪丸白膜で被はれて居る。細精管は睪丸後縁の中央部に於て吻合して睪丸網を作る。
- 備考。「睪丸の構造を記せ」(昭十二年十月長崎)
- 備考。又曲細精管は精系(精細胞、精虫)を生ず。

副睪丸の位置形状區別構造

- 一、位置。陰囊内に於て睪丸の上端及び後縁を被ふ。
- 一、形状。扁圓。

- 一、區別。頭(上部の膨大部)。體(頭の下方の部)。尾(下端の細き部)。を別つ、尾は曲つて上行し輸精管となる。

備考。睪丸の輸出管は、副睪丸の輸出管と合して一となり、副睪丸體から尾に下り遂に輸精管となるものである。

- 一、構造。氈毛上皮、纖維膜、固有膜から成る。

備考。疾病は副睪丸炎が最も多い。

陰囊

陰囊。とは睪丸、副睪丸、輸精管を包む皮膚嚢である。

備考。神經。睪丸、副睪丸、陰囊には骨盤神經叢の分枝が分佈する。

血管。内精系動、靜脈から來る。

疾病の最もよく來るものは睪丸炎、副睪丸炎、陰囊水腫、等である。
いふまでもなく陰囊は皮膚の皺襞である。

尿道

泌尿器の記述を参照する事。

陰莖の位置形状區別構造

- 一、位置。兩股間で恥骨軟骨接合の下方に懸垂する。
- 一、形状。圓柱狀。

- 一、區別。根(恥骨に附着せる部)。龜頭(前端膨大部)。體(根と龜頭の間の圓柱狀の部)を分つ。龜頭の上方狹隘なる部は頸である。其の前端の裂孔は外尿道口である。
- 二、構造。網狀の結締組織の纖維束と(彈力纖維、平滑筋纖維多し)、海綿體と、毛細血管と皮膚から成る。動脈血の充實で膨大して硬度を増す、これが勃起である。
- 備考。内陰部動脈の分枝陰莖體動脈と陰莖背動脈と同名靜脈である。
- 神經。内陰部神經の枝別陰莖背神經である。
- 疾病。陰萎症、疼痛性陰莖勃起症、發育不全症、下疳、第四性病等。

女性生殖器

- 内外生殖器を分つ。(殊に内生殖器は其の主要なるものである)
- 一、内生殖器。卵巢、輸卵管、子宮、陰管に、圓靱帶、扁靱帶を附屬せしめる。
- 二、外生殖器。乳房、陰阜、大陰唇、小陰唇、陰核、前庭、陰口。
- 備考。内、外生殖器の境は處女膜である。處女膜部より前方は外生殖器、内方は内生殖器に屬する。
- 又陰管の長さは普通約八仙迷である。

子宮の位置形狀區別構造機能 (昭十二年十月長崎)

- 一、位置。子宮は腔の上方にありて體は少し前方に傾き、前は膀胱、後は直腸、上方は腸管、左右は輸卵管である。
- 二、形狀。西洋梨子(長梨子狀)の様なもので、前後に扁平で、長さ凡そ八仙迷。
- 一、區別。(一)底(上方の遊離端で幅最も廣い、輸卵管、圓靱帶の附着部である)、(二)體(底と頸との間で扁靱帶が着いてゐる部)、(三)頸(體の下部狹隘部の下半部は陰管に突出してゐる、それが子宮腔部である)。(末端の一小口は子宮外口である)
- 又子宮の内部は腔洞で、所謂子宮腔である。
- 一、構造。粘膜、粘膜炎組織、筋膜、外膜より成る。
- 二、機能。妊卵を包擁す。(胎兒は約二百八十日間子宮内で發育し體外に娩出する)

圓靱帶とは何ぞ

子宮底の兩側から前下方に出て、扁靱帶の兩葉間を前外方に走つて、股輪を穿通して陰阜の部で恥骨弓に附着する。子宮を前方に牽引してゐるところの筋纖維を交へた束狀物である。

輸卵管の位置形狀區別構造及機能

位置。子宮底の兩側から起つて扁靱帶の上縁を横走する膜管である。

形狀。子宮附着部は細く、腹腔に向つた部は廣い、つまり喇叭形である。(備考、故に一名を喇叭管といふ)

區別。子宮附着部を喇叭管狹部といひ、外方膨大した部を鼓腹部といふ、膨大部の尖端は剪絲といつて數多の薄片にな

つて居る。

構造。内膜、筋膜、外膜である、内膜には絨毛上皮がある。
機能。卵細胞や胚卵を子宮腔に輸送する。

備考。神経。交感神経喇叭管叢と骨盤神経の分枝。
疾病。喇叭管炎、喇叭管腫瘍等。

卵巣の位置形状區別機能

一、位置。小骨盤内で子宮の兩側、喇叭管の下、扁韌帯の間にある。

一、形状。扁卵圓形で、大きさは鳩卵大である。

一、區別。内外二端、上下二縁、前後二面を區別す。下縁は平坦で一溝があるこれが卵巣門である。

一、構造。皮質(大小無數の濾胞がある)。髓質(血管に富む)から成るもので、最外層は白膜で被覆されて居る。

備考。白膜のある内臓は卵丸、卵巣、脾臓である。

一、機能。十五、六歳の思春破瓜期から四十五乃至約五十歳の更年期(月經閉止期)まで排卵機能を営む。
又女性としての性的特徴を來す「ホルモン」を産成するものである。

備考。神経。交感神経の卵巣叢と骨盤神経の分枝とである。

血管。子宮動脈の枝である卵巣動脈、同名静脈である。

疾病。急性、慢性卵巣炎、卵巣腫瘍、卵巣痛等である。

膣の位置形状構造機能

一、位置。子宮の下部で、前は尿道、後は直腸である。

一、形状。擴張性のある前後に扁平な膜管である。

一、構造。粘膜からなる。

一、機能。性交器であり産道である。

備考。神経。交感神経叢、骨盤神経の分枝。

血管。内腸骨動脈の分枝より來る、又静脈は静脈網を作る。

疾病。膣炎、膣瘻、膣加答兒等。

乳房の位置形状區別並に機能

位置。前胸部左右第三乃至第六肋間に於て大胸筋の上にある。

形状。普通は半球形である。

區別。乳體(基底の膨大部)、乳暈(褐色の輪狀部)、乳頭(尖端の突出部)とを分つ。

構造。複胞狀腺から成る乳腺と皮脂囊とである。

備考。神経。第三乃至第六胸椎神経から來る。

血管。内乳動脈の分枝及内乳静脈に入る静脈とである。

疾病。乳腺炎等。

會陰

一、部位。泌尿生殖器と肛門との間である。

一、形状。菱形。

一、構造。淺深會陰筋等より成る。(註、此筋の在所が泌尿生殖器一名骨盤横隔である)

備考。學問上の會陰は、廣義の會陰であつて、骨盤出口の全體を會陰と言ひ外陰部筋、肛門周囲の筋、外陰部と肛門の間、以上の三部を總稱するけれども鍼灸醫學との關係は淺いから、極く簡明に記しておく。

× × × × ×

漿液膜

心囊、胸膜、腹膜、であつて、表面は漿液にて濡みて扁平上皮で被はれ、其の下には薄き結締組織膜があり、更に其の下には漿液膜下層と名づくる鬆疎な結締組織があつて隣在の臓器と結合して居るものである。

心囊

心囊は心臓を包む二重の囊であつて、體壁葉(外葉)、と内臓葉(内葉)、とから成る。殆んど完全なる囊である。二葉の間を心囊腔といふ、心囊液といふ少量の漿液を充たして居る。内臓葉は心臓の外膜となり、體壁葉の底部は横隔膜に、前部は胸骨肋軟骨に、左右側部は胸膜に結合してゐる。其他他心臓に出入する血管は皆心囊に包まれて居るものである。



備考一。疾病。心囊炎等。

備考二。心囊の効用。心囊は心臓の保護装置である。

胸膜(肋膜) (昭五年九月東京、同六年三月東京)

胸膜は肺臓を包む二重の漿液膜囊であつて、體壁葉、と内臓葉(内葉)、とから成る。内臓葉は薄くして肺の表面を被ひ肺葉間の截痕にまで進入して居る。

胸膜は形状稍々複雑な囊であつて、二葉の胸膜の間は所謂胸膜腔で、胸膜液(肋膜液)といふ漿液で濡ふて居る。

體壁葉は、肋胸膜、横隔胸膜、縦隔胸膜を區別する。

備考一。作用。肋膜は、肺臓の保護をなすものである。

備考二。疾病。乾性肋膜炎、濕性肋膜炎等のよく來る場所である。

備考三。肋膜は一種の保護器である。又呼吸の時は陰壓を作る。

備考四。「肋膜は生理的如何なる作用をなすや」(昭九年春愛知)

腹膜とは何ぞ (昭九年春長野、昭十一年四月長崎、栃木、昭十三年九月三重、同秋京都)

腹膜とは腹腔内の内臓を包む内外二枚の漿液膜囊であつて、體壁葉と内臓葉とから成つて居る。

内外二葉の間は所謂腹膜腔で、腹膜液といふ漿液で濡ふて居る。

體壁葉は横隔膜の下面を被ひて、肝の上面を被ひ、(肝と横隔膜との間に嚢袋を造つて肝鎌狀靱帯となる)、胃の前面を後方に轉じて横行結腸の前面を被ひ、次に直腸の前上部を被ひ、子宮に翻轉して直腸子宮窩を作り、膀胱底を被ひ、更に前方

に至つて膀胱窩を作り、前腹壁に移行して體壁腹膜となる。

肝臓と胃と十二指腸の初部にある部を小網膜といふ。

又空腸、廻腸、結腸、直腸の上部には脂肪を沈着して黄色を呈する、複雑な大網膜と網膜囊とがある。

小骨盤の側壁に向ふ大なる腹膜の皺襞は所謂子宮扁靱帯である。(但し女性の場合)

腹膜の組織。結締組織の繊維で弾力纖維を含んで縦横に交叉する白色強靱の滑澤な膜質である。

備考。神經。は交感神經と横隔膜神經から来る。

疾病。は急性腹膜炎、慢性腹膜炎、腹水等が多い。

急性腹膜炎に對しては、普通の場合局所刺激は禁忌である、一般の慢性腹膜炎に對しては灸術は適應症である。

又腹膜炎殊に其慢性のものゝ鑑別を要するものは卵巣囊腫等である。病理診斷學の部を参照せよ。

第四節 内分泌腺 (一名ホルモン腺)

内分泌に就て知る所を記せ

(昭十四年春京都、昭三年六月三重、同十年九月大阪、同十月福岡、同十三年四月福井、同十二年十月長崎、昭十三年九月愛媛、十五年秋富山)

内分泌とは何か種類を擧げて説明せよ (昭十五年十月京都)

内分泌腺の其の内部は血管に富みて、別に固有の輸尿管を有しない腺である。輸尿管(排泄管)を有する唾液腺の如きは外分泌腺であつて内分泌腺(ホルモン腺)ではない。内分泌腺は、分泌物質(ホルモン)を直接に血管又は淋巴管に送つて、他の器關の機能に、又は全身に作用を及ぼして其の機能を調節するものである。内分泌腺に屬するものは、松果腺、大

腦下垂體、甲状腺、上皮小體、頸動脈腺、胸腺、脾臓、肝臓、脾臓、尾骨腺、副腎、睪丸、卵巣等である。

備考一。専門的には胃腸粘膜、胎盤、胎兒、攝護腺等にもホルモンを産成するものであるが、受験生は以上の記述を確實に把握せよ。

備考二。「内分泌腺とは如何なるものなりや及其器關の主要なる作用を擧げよ」(昭九年春福井)、(昭十六年五月滋賀)「内分泌を營む器關の名稱」(昭十一年秋岡山)

松果腺

一、位置。中腦の後上部に於て後方に突出し、四疊體丘阜の上に在る。

一、形状。略々卵圓形麥粒大の小體である。

一、構造。球形の核ある原形質の少ない細胞と、其の細胞の間にある膠樣質と、血管を伴へる結締組織とから成る。

一、機能。この腺は身心の異常の發育と生殖器の早熟を適當に抑制し。又其の發育を適當に調節するものと信ぜらる。之を幼時に剔出すると、身體、精神、特に生殖器の早熟を來すものである。

備考。此腺は生後約七年にして退行を始め、後に炭酸、磷酸石灰等となる。

大 腦 下 垂 體 (昭十二年四月長野)

一、位置。大腦下垂體は胡蝶骨トルコ鞍の上に於て、腦底の漏斗と名づくる部分に附着して居る。

一、形状。小指頭大の腺體である。

一、區別。後葉(腦より出づ)、前葉(咽喉壁より來る)から成る。

一、構造。後葉は主として神經膠様質から成り。前葉は上皮細胞群と血管を有する結締組織から成る。

一、機能。下垂體前葉の機能が減弱すると身體の發育が衰へる、機能が亢進すると身體は横に巨大となる。
下垂體後葉の機能は平滑筋(子宮、膀胱筋等)を收縮し血壓を上昇する物質を分泌する。
備考。分娩時陣痛催進劑として應用せられるピツイトリン、ピツイタリー等は下垂體後葉の製劑で所謂臟器製劑である。

甲状腺の位置區別構造機能

(昭三年秋京都、同九年秋徳島、大十五年春大分、昭九年秋三重、同五年四月徳島、同十年春秋群馬、同十二年四月宮崎、其他各府縣)

一、部位。甲状腺は前頸部に於て、喉頭の側部氣管の前上部にある。
一、區別。長さ五乃至八仙、迷の右葉左葉と其の下端を接合する峽とから成る。
一、構造。結締組織から成る皮質、と腺胞から成る髓質より成る。皮質は髓質に進入して多數の小葉に區別する。小葉の内部は多數の腺胞である。腺胞の壁は圓柱上皮細胞であつて、胞腔にはコロイドといふ蛋白の濃厚液がある。このコロイドは圓柱上皮細胞の分泌液であつて、直接毛細淋巴管と毛細血管とに入り、全身に作用する。

(備考、これが所謂外分泌ではなくて内分泌といふ状態である)

一、機能。甲状腺のホルモンは、物質代謝を進め、或る種の有害物を無害とし、性慾や智識の發達を促し骨の發育(主として長さを)促進する機能がある。

一、神經。迷走神經(副交感神經)、と交感神經である。

一、血管。上甲状腺動脈、下甲状腺動脈より成る毛細血管網。

備考。産出する物質の本態詳細は不明であるがヨードをも分泌する。

藥品。には甲状腺製劑があつて應用せられて居る。

疾病。甲状腺機能の過度の亢進はバセドウ氏病となり、手指の振顫、脱汗、眼球の突出、瘰癧等を來す。

甲状腺機能の減退又は廢絶は粘液水腫症といつて浮腫、汗の減少、無慾顔、痴鈍となる。

又思春期、月經時、妊娠によつて婦人は甲状腺の腫脹を來すが、やゝ生理的とも考へてよいのであつて病氣とはいへない。

甲状腺の附近の經穴。天突、水突、人迎、廉泉。「甲状腺及胸腺に就て」(昭十一年春大分)。

上皮小體 (副甲状腺)

一、部位。甲状腺の後面に於て、上一對は環狀軟骨上縁の高さ、下一對は甲状腺下縁の高さにある。

一、形状。小豌豆大で四個である。

一、構造。多角形上皮細胞群と毛細血管と結締組織から成る。

一、機能。痙攣を來す物質を無害ならしめる。

備考。副甲状腺の發育異常は一種の痙攣を來す。

胸腺 (昭十一年十月長野)

一、位置。胸骨の後面に於て同骨の上縁から、下方は心臟の前までも及ぶものであつて前縦隔腔にある。
一、形状。扁平で左右兩葉を分つ、けれど其の形状均等ではない。

一、構造。結締組織で分隔せられて多数の胸腺小葉となる。皮質と髓質とを區別する。

皮質は即ち結締組織で、髓質は、上皮細胞と淋巴細胞である。

一、機能。胎生三箇月から思春期まで骨や生殖器の發育を適度ならしめる。

備考。淋巴胸腺體質、胸腺は胎生三箇月頃腸管より發生し生後滿二年まで發育しつゝ、思春期からは退化を初めるものであるが、胸腺が兒童の年齢に比較して大き過ぎたり、青壯年になつても胸腺があつたりすると、(全身の淋巴腺淋巴濾胞がよく發達してゐて)之を淋巴胸腺體質といつて、病氣に抵抗力が弱く、蛋白質の注射や手術時の刺戟等で急死することがある。

血管。内乳動脈の分枝が胸腺の小葉間を走行して毛細管網となる。

胸腺部の經穴。璇璣、華蓋、紫宮、玉堂、膻中(以上胸骨前面正中線)、兪府、或中、神臑、靈墟、神封、(以上胸骨側縁)。

備考。「胸腺、髓質、攝護腺の位置」(昭九年春徳島)

脾 臟

既出。内臟學脾臟の部を、又脾液の消化作用は生理學消化の部を参照せよ。

脾臟の作用 (昭九年四月滋賀、同九年春三重、同十三年四月福井)

脾臟の位置形狀區別作用

(昭十六年五月新潟、昭五年十月京都、同六年十一月岩手、同六年十月徳島、昭九年春香川、同九年春兵庫、同八年秋佐賀、同十四年春富山、同十一年三月山梨、同五月山口、昭十二年十月秋田、同十三年四月三重、同十三年三月北海道)

解題。脾は純粹ホルモン腺である。

一、位置。左後方は横隔膜、右前方は胃底に向ひ内下部は脾と接し左季肋部に於て第九より第十一肋骨に相當してゐる

一、形狀。不完全ではあるが稍マコーヒ豆に似た形で、大きさは十仙迷位。色は血液に富むが故に暗赤色である。

一、區別。前面は胃面、後面は腎面、上面は横隔面、下面には脾門がある。そして固有膜と脾髓とからなる。

一、作用。(作用は其の生理である)

(イ)白血球を新生す。
(ロ)老廢せる白血球を破壊す。尿酸をも製成す。
(ハ)赤血球を新生し又破壊する、所謂一種の淨血作用を營む。「血液を清淨にする臟器の名稱及作用」(昭十二年四月鹿兒島)

備考。解剖生理共に、脾臟の研究は完成せられてをらぬ。大體一言で盡くせば淋巴腺に似た腺體と考へてよいやうである。此ものは傳染病の場合には甚だしく腫大して左季肋部で觸知し得るやうに成る。「脾腺を生體で觸れ得る場合と理由を記せ」(昭三年鹿兒島)。我皇漢醫學の十四經中に脾經があつて脾臟の寒熱疾病を論述せるが如きは千數百年以前よりの事で敬服に値する。「脾臟の大きさはどれ位か」(昭四年五月兵庫實地)。此脾臟の大きさはよく動搖するもので傳染病や白血病の時には甚だしく腫大することがある。大體普通の男子では一〇瓦内外、徑一〇仙迷位のものである。

副腎の位置機能

(昭十年秋長崎、昭十二年九月滋賀、同十三
年九月富山、昭十六年四月和歌山、同福井)

- 一、位置。左右腎臓の上にある。結締組織で腎臓と結合してゐる。
- 一、形状。略三角形で重さは一瓦乃至一八瓦である。後下方に副腎門があつて神経や血管が出入する。
注意。くどいが内分泌腺だから排泄管はない。

- 一、區別。皮質と髓質から成る。
- 一、構造。皮質は外層であつて硬くして黄色である。皮質に圍まるゝ部分が髓質であつて軟かい、色は暗赤色である。皮質は、絲絨層、束状層、網状層から成る。髓質は初め交感神経質から生じたものであつて顆粒を有す。
- 一、神経。は交感神経と迷走神経(副交感神経)で、髓質には多くの神経細胞がある。
- 一、血管。動脈は大動脈幹より來る副腎動脈、下横隔膜動脈より來る上副腎動脈、腎動脈より來る下副腎動脈とである。靜脈は髓質で靜脈叢を作る。

備考。産成するホルモンは高峰博士發見のアドリナリン等である。

一、機能。副腎のホルモンのアドリナリンは、(1)血管收縮、(2)心搏亢進、(3)瞳孔散大、(4)血壓上昇、(5)胃腸蠕動抑制等の作用がある。此のホルモンは其他皮膚に色素の沈着する事を豫防する。

備考。氣管枝喘息發作は、瓦の注射で鎮靜する。
交感神経はアドリナリンに對して反應過敏である。
疾病はアジソン氏病(胃腸障礙、皮膚の特有なる暗銅色が特徴である)を來す。
經穴。腎俞。胃俞。

睪丸

- 一、位置。形状。區別。構造は其の項参照。
- 一、機能。ホルモン腺としての睪丸の機能は、睪丸の内分泌で、思春期に於て現るゝ、男性的特徴であつて、陰毛、音聲の變化、男性的情緒等所謂第二次性的特徴を完成するものである。

此のホルモンを産出する部位は、睪丸の間細胞と曲細胞と曲細精管であると考へられて居る。

- 一、神経。交感神経が血管に沿ひて叢を成すものである。
 - 一、血管。動脈は腹部動脈幹の枝別内精系動脈の末枝である。
- 備考。此ホルモンの詳細は不明であるが、スベルマチンといふ藥品は睪丸の製劑であつて、神経衰弱症催春等の治療劑として應用せられてゐる。(往年内閣の藏相高橋是清氏が、常に注射したものは、此睪丸ホルモンである)
- 睪丸に影響を及ぼす事の出來る經穴。氣海俞、小腸俞等。

卵巢 (昭十四年春大分)

- 一、位置。形状。區別。外分泌としての機能等は、其の項参照。
- 一、機能。卵細胞を四週間に産出するは外分泌である。グラッフ氏胞の破裂によつて卵細胞を排泄した痕は、黄色の細胞が出來る之を卵巢黃體といふ。此の者も或る種のホルモンを産生する。卵巢固有のホルモンは女性内外生殖器を成女(一人前の女)として完成せしめ、女性らしき情緒と嬌態を來たさしむ。

一、神經。交感神經と、腰薦髓より發する薦部自律性神經とである。

二、血管。内精系動脈の分枝である。

備考一。少年の時睪丸を剔出すると男性の特徴は消失して女性化する。思春期後に於て剔出すると、性慾は全滅せ

ないが薄弱となる。

備考二。卵巣を剔出すると、睪丸剔出が男性に及ぼす影響と大體同様である。女性の月經が無くなつて(閉止後)から剔出すると

脱落症(頭痛、眩暈、身體違和、心悸亢進等)を來すものである。

卵巣製劑。卵巣のホルモンを主とした薬品は四、五種ある。脱落症等に用ひられてゐる。

卵巣に影響を及ぼす經穴。氣海俞、大腸俞、小腸俞、關元俞、上髎、次髎等。

注意。これ以上の詳細な事は別著「實驗鍼灸病理學」後篇婦人科學參照。

攝護腺

一、位置。小骨盤内で陰莖の根部、尿道の始めを圍繞してゐる。

前面は恥骨軟骨接合に向ひ、後面は直腸の前面に相對してゐる。

二、形狀。栗の實狀で重さ十七瓦乃至二十八瓦位。

一、區別。下方を尖端、上方を底といひ、右を右葉、左を左葉、中部を峽といふ。

二、構造。胞狀管狀腺と結締組織と筋組織から成つて居る。

一、機能。外分泌としては、乳白色で一種の臭ひある攝護腺液を分泌して精液に混するものであるが、其の内分泌ホル

モンは、精細胞の産出と射精とに關係がある。又睪丸の發育を助ける。

一、神經。交感神經の下腹叢を通走する薦部自律性神經である。

二、血管。下膀胱動脈及び攝護腺靜脈である。

備考。疾病の最も多きは攝護腺炎、肥大等である。

攝護腺に作用を及ぼす經穴。大腸俞、小腸俞、上髎、次髎、中髎、會陽等。

肝 臟

(昭十六年四月大分、同宮崎)

一、位置。形狀。區別。構造。は解剖の部を參照するとよし。

一、機能。内分泌としての機能グリコーゲンの生成に關係し、又門靜脈より來る血液を消毒する。

備考。ホルモン腺の記述は位置、形狀、區別、構造、は解剖學である。機能は脈管腺の生理學である。尙其の他ホルモン製劑と疾病、經穴まで一括して記述してをいたしたのは、一面は受験生の爲の老婆心であり又一方には實地家の臨牀上の參考に供したのである。

備考二。「内分泌に就て記せ」(昭三年六月三重)

「肝臟の構造及機能」(昭十一年秋熊本)

備考三。肝臟の外分泌は、膽汁の分泌である。

第五節 循環器系統學(脈管學)

循 環 器

全身に血液、淋巴液を循環せしめて、物質代謝を成さしむるものが、循環器系であつて、血管、淋巴管を記述するのが脈管學である。それらの中樞となるものは心臓である。

備考。「循環器の名稱及び機能は如何」(昭六年三月東京)は此記事の他に生理學の「循環に就て」の記事を加ふればよい。

血管系統

血管系統とは心臓、動脈、毛細管、靜脈、の四ツをいふのである。そして心臓は其の中樞である。

動脈

動脈は、酸素と榮養物に富みたる血液を心臓から出る脈管内に流通せしむるもので、即ち動脈管をいふのである。

(但し肺循環の血液は、肺動脈に脈靜血がある。肺靜脈に新鮮なる動脈血がある。いひかへると全身循環の反對である。)

靜脈

靜脈とは、炭酸と代謝産物とを含有して、毛細管から心臓に歸る暗赤色の血液を流通する管系統をいふのである。管内の血液を靜脈血といふ。

毛細管

毛細血管に就て記せ (昭十三年三月秋田)

一、動脈と靜脈とは其の末端が、顕微鏡で見得ない極く微細な血管となる。

この血管を毛細血管といふのであつて、動脈の終端、靜脈の始端である。

一、血液は、心臓より出で動脈となり、毛細管を経て靜脈となつて、心臓に歸るものである。

心臓の位置形狀區別機能を問ふ

(昭七年四月京都、同六年十月福島、同二年十月大阪、大十五年春石川、昭八年秋徳島、同十一年四月埼玉、同十二年九月青森、其他)

一、位置。胸腔の中央の下部(横隔膜の直上)で、少し左側に偏つて、左右兩肺の間に於て、左肺の心臓痕の中にある。

一、形狀。其の大きさは各人の手拳大、蓮の苔を逆にしたやうなものである。外膜は即ち心囊である。

一、區別。心臓の内部は腔洞であるが、縦隔の爲に左右に分れ、横隔の爲に又上下に分れる、自ら四個の腔洞を作る。

其の上腔の左は左心房、右は右心房、下腔の左は左心室、右は右心室である。

左右の房室は瓣膜で交通する。

左の房室口には二尖瓣(僧帽瓣)、右の房室口には三尖瓣がある。室と血管との間(大動脈口、肺動脈口)には

三個の半月狀瓣をあつて、血液の逆流を防ぐ。

一、機能。生命の原動力である血液を其のポンプ装置によつて全身に循環せしむる血行器(循環器)の中樞である。

備考。左心室からは全身に分佈する動脈の根幹即ち大動脈を出し、右心室からは肺臓に分佈する肺動脈を出す。左心房には肺臓よ

り歸る肺靜脈が入り、右心房には全身の靜脈をあつめたる上大靜脈(上空靜脈)、下大靜脈(下空靜脈)の二大幹が遣入る。
「心臟の位置、形狀、機能を問ふ」(昭六年十月英城)

動脈の排列

動脈は心臟から出た後、樹の枝の様に數かぎりもなく無數に分れて、だん／＼細くなり毛細血管になる。動脈の分枝の仕方には二種あつて、(A)は枝が甚だ細くして幹と枝との關係のあるもの、(B)は枝が皆同じ様な太さに澤山に分れてゐて枝と幹との區別のつかぬものと二種である。

備考。動脈の末端が一定の器官に分佈するものは大てい(B)のやうになつて居る。

副動脈 (副行動脈)

幹から枝のやうに分れる動脈は、同一の幹から出る他の枝と吻合する場合が多い。

この場合には副動脈の吻合といふのである。

動脈管が閉塞しても直ちに副血行を生じて其の生理的作用を遂げんが爲に出來てゐるものである。

吻合

血管は(淋巴管も)細かく分佈する程、枝別相互の連絡を増すものである、これを吻合といふ。

脈管網

吻合枝が大小無數であつて、廣い場合には脈管網といふ。

脈管叢

その吻合枝が廣がらないで否、脈管網を作つて深部の方向に入るものを脈管叢といふ。

直達脈管

動脈の末端が毛細管とならずして、直ちに細靜脈となるものは直達脈管であつて、肝臓の皮質、腦の軟膜等にある。

終端動脈

細動脈が近隣の動脈と吻合せないで獨立するものは終端動脈であつて、腦の皮質、肺、肝、脾、腎、甲状腺等にある。

備考。終端動脈が閉塞すると其の動脈の分佈區域は壞疽する。

肺靜脈大靜脈

一、肺循環の靜脈は左右二條宛となつて左心房に。一、全身循環の靜脈は上、下二條の大靜脈となつて右心房に歸る全身の靜脈を皆一つに寄せあつめると動脈の二倍になる。

浅深静脈の區別

(A) 隨行(副行)静脈とは、動脈の一個又は兩側に沿ふて行くもの、(B) 深在静脈とは身體の深部にあるもの、(C) 浅在静脈とは皮下にあるものをいふ。

静脈網静脈叢

細小の吻合が廣く存するものは静脈網。吻合の網の目が狭くなるものは静脈叢である。

備考。「静脈とは何ぞや」に對しては肺静脈、大静脈、浅深静脈の區別と此の項とを一つにして答案とせよ。

静脈竇導血管

静脈管自身が廣く膨脹したものは静脈竇で。

顛頂孔の如き骨孔を、頭蓋腔の内外にある静脈が直接に連結するものは、導血管である。

毛細血管の配列

毛細血管は、筋纖維や神經纖維の中には進入しないけれど、細胞や細胞間質からなる組織、其他種々の組織から出來た臓器には、各々固有の配列をなして進入分佈するものである。

備考。表皮、爪、毛、骨の皮質、齒の硬部には無論毛細血管はない。

係締絲毬

種々の形に毛細管の彎曲したものを係締といひ、毛細血管が球狀の小塊をなすものを絲毬といふ。例へば腎絲毬體、腎係締の如きものである。

血管の構造

動脈管壁は、(A) 内膜、(B) 中膜、(C) 外膜から成る。(A) 内膜は單層扁平上皮細胞を主とし、(B) 中膜は滑平筋纖維と彈力纖維を主とし、(C) 外膜は主として結締組織から成るものである。

動脈は管壁厚く彈力がつよい。

静脈管はその反對である。又静脈管には逆流を防ぐ瓣がある。

自養血管

太き血管壁に、血管自己を養ふ細き血管がある、これが自養血管である。

血管鞘

動脈、静脈、時とすると神經も共に、一括して結締組織膜で包まれて居る事がある。血管鞘は即ちこれである。其の例。迷走神經は總頸動脈と共に血管鞘に包まれて側頸部を下行する。

交感神経と血管との關係

交感神経は太い血管にでも、細い血管にでも、全血管壁に纏絡して分佈する。

静脈管の構造

既述血管の構造及び後章静脈總論を見よ。

淋巴管 (水脈管)

- 一、淋巴管系統は、組織間隙から始つて、静脈と組織間隙とを連絡するものである。
- 一、淋巴管と淋巴腺から成る、淋巴管系統中を流るゝものは、淋巴液である。
- 一、淋巴液は其の性質が静脈血に似て居て、無色水様液であるのが特色であつて、一名水脈管の名のある所以である。

心臓に出入する血管

- 一、左房には左右の肺静脈が各々二條宛來たつて開口す。
- 一、右房には一條の上空静脈(上大静脈)と、下空静脈(下大静脈)の二大静脈が開口する。
- 一、左室からは一條の大動脈が出づ。
- 一、右室からは一條の肺動脈が出でてすぐ二枝となる。

備考。こゝに胎生時のボタリー氏動脈管の残存である動脈様靱帯がある。そして大動脈弓に緊張してゐる。

心臓の構造如何 (昭十年春群馬昭三年神奈川其他)

心臓は胸腔に於て、左肺の心臓截痕中にあつて、心内膜、心筋膜、心外膜、の三層から成る。

(A) 心内膜は、膠質様纖維と弾力纖維から成り、上皮細胞に被はれてゐる。

(B) 心筋膜即ち心筋は、横紋筋であるが不隨意に作用する特別の筋肉であつて、心筋細胞と心筋纖維とから成るもので横走縦走等部位によつて複雑な走行をなすものである。

(C) 外膜は、心囊漿液膜の心臓板即ち内板である。

備考。心臓には左、右心冠狀動脈といふ自養血管と同名静脈とがある。

神経は、交感神経と、迷走神経(副交感神経)と、心筋中の自働神経とである。(所謂自律性神経)

心臓によく發する疾病は、心臓瓣膜病、心筋炎、神経性心悸亢進症等で。心臓に應用する經穴は、天柱、風池、身柱、心俞、膏肓、乳根、等が主治穴で、手三里、合谷、郄門、小海等は有力なる誘導又は反射穴である。

後藤道雄博士の研究によると。

心臓疾患の場合、のへッ下氏帯は、氣舍、雲門、屋翳、膺窓、乳根、大杼、風門、肺俞、心俞、小海等である。「心臓の構造及血液循環に就て」(昭十二年四月熊本)

肺動脈 (小循環の動脈即ち肺循環の動脈)

- 一、起始。心臟右室の肺動脈口。(備考。肺動脈口、大動脈口、には三ヶの半月狀瓣がある。)
- 一、經過。上左方に昇り、第二肋間の高さ即ち大動脈弓の下で二枝に分れて左右の肺動脈となる。

備考。此の動脈管内の血液は靜脈血である。

(A) 左枝(左肺動脈)は、短く、下行大動脈幹の前にあつて、肺門に至つて二枝に分れ、肺の實質に循り毛細管となり終に肺胞に纏絡する。

(B) 右枝(右肺動脈)は、長く、肺門で三枝に分れて肺に至り、毛細管となり終に肺胞に纏絡する。

備考一、肺靜脈は毛細管網から始まつて、左、右各々二條となり終に肺動脈の下を通過つて肺門を出て、左房の後上壁から左房に入る。(血液は動脈血である)

備考二、「小循環系統を記せ」。(昭九年春埼玉)

上行大動脈を簡明に記せ

- 一、起始。左心室の大動脈口である。
- 一、經過。右側第二胸肋關節の後方で無名動脈を分つまでである。
- 一、分枝。上行大動脈の起始部より、左心冠狀動脈、右心冠狀動脈を出して心臟に分佈す。

冠狀動脈

右心冠狀動脈は、心臟の冠狀溝を通過つて、心臟の前側から右側に廻り後縱溝(腔を)下る。
左心冠狀動脈は、後側を左走して二枝に分れ一枝は心臟の後側に、一枝は前縱溝を下り終に右心冠狀動脈の末端と吻合する。

大動脈弓及び分枝の名稱 (大十二年七月宮崎)

- 一、起始。上行大動脈が第二胸肋關節の部位で後方に向ふ處。
- 一、過經。右前方から左後方に走り第三胸椎體の左側に達す。
- 一、分枝。弓の凸側即ち上部より出づるものは、(1)無名動脈、(2)左總頸動脈、(3)左鎖骨下動脈。
弓の凹側即ち下部より出づるものは、二條の上氣管枝動脈である。

無名動脈

- 一、起始。大動脈弓の始端。(胸骨手柄と氣管との間)
- 一、經過。長さ四乃至五仙速で氣管の右前側を上り、右胸鎖關節の後方まで。
- 一、分枝。此の動脈は右總頸動脈の右鎖骨下動脈とに分れる。

總頸動脈

(昭十年十月福岡、山口、同十一年秋山口、同十二年春山梨)

一、起始。(1)右は胸鎖關節後方の無名動脈の分岐部、(2)左は大動脈弓から。

二、經過。總頸靜脈、迷走神經と共に血管鞘に包まれて、左右氣管、喉頭の側方を上り、甲状軟骨上縁の高さに至り、

上頸三角部にて。

一、分枝。内頸動脈と外頸動脈となる。

備考。「頸動脈の經過に就き筋肉と神経との關係を記せ」(昭九年春京都。昭十年十月奈良)

外頸動脈分佈の概略

一、起始。甲状軟骨の上縁(上頸三角部)の總頸動脈の分岐部。

二、經過。下顎骨枝の後側に沿ひ、耳下腺に被はれつゝ上行して、主に顔面と腦頭蓋壁に分佈するもので、下顎骨髁状突起の部位で二終枝となる。

一、分枝。主なるものが七枝ある。

(1)上甲状腺動脈は、喉頭、甲状腺に。

(2)舌動脈は前方に、出でて舌に。

(3)外頸動脈は二腹頸筋後腹の内側から咬筋附着部の前を通つて顔面に出で蛇行(横顔面動脈)して内眦に至る。

(4)後頭動脈は二腹頸筋の後側に沿ふて後上方に進み、頸頭骨乳嘴突起内面の後頭動脈溝を通り僧帽筋の附着部を穿

通して、後頭の皮下に出でて後頭に分佈する。

(5)耳後動脈は耳後の皮膚に分佈する。

(6)浅頸動脈は外頸動脈の終枝の一つであつて、下顎骨髁状突起の後側から耳前を通り額骨弓の上を越へ、前枝と後枝に分れて、前枝は前頭に、後枝は額部から顛頂結節に向つて分佈する。

(7)内頸動脈は外頸動脈の終枝の一つであつて、頸筋と外翼状筋との間を通り翼状口蓋窩に達するもので、其の經過中左記の如く澤山の枝を出すものである。

内頸動脈 1、深耳動脈。2、鼓室動脈。3、中硬膜動脈。4、下前槽動脈。5、咀嚼筋動脈。

の枝別 6、後上前槽動脈。7、下眼窩動脈。8、翼状口蓋動脈。9、翼状管動脈。各々其名の如き解剖的部位に分佈する。

備考。「總頸動脈と外頸動脈の起始經過枝別」(昭五年十月福岡)

「外頸動脈の經過並に内頸動脈の起始を記せ」(昭十三年五月高知)

内頸動脈分佈の概略

(昭九年春鳥取、同十一年四月大阪、大十一年一月大分、昭四年五月奈良)

一、起始。甲状軟骨上縁の高さ、内、外頸動脈の分岐部(即ち上頸三角部)。

二、經過。腦、前頭、眼窩に分佈するものであつて(前頭部と眼窩部では大體三叉神經第一枝の分佈區域と同様で名稱もよく似て居る)外頸動脈の内側を咽頭の外側に沿ひて上り、頸頭骨岩様部の内頸動脈管を通つて、前方に曲り胡蝶骨の頸動脈溝を出てから、(1)眼と其の近隣に分佈する眼動脈と、(2)大脳前部に分佈する前大脳動脈と、(3)大脳中部に分佈する中大脳動脈、との三大枝に分れる。

眼動脈は三叉神經第一枝の枝別と略々同名で。

(A) 上眼窩動脈は、上眼窩を出でて前頭に分佈する。

(B) 涙腺動脈は、涙腺と上、下眼窩の外側に。

(C) 前頭動脈は、鼻背と前頭と上、下眼窩の内側に。

(D) 眼球には、眼動脈の四小枝即ち、(1) 網膜中心動脈、(2) 後長毛様動脈、(3) 後短毛様動脈、(4) 前毛様動脈等を分枝して、眼球の網膜と毛様體等とに分佈する。

ウイリス氏動脈環(輪)

(A) 前大脳動脈は兩側大脳半球の間に入り、視神經の前側で左右の前大脳動脈から、前交通動脈を作つて吻合する。

(B) 中大脳動脈は側大脳溝に入り、腦頭蓋内の顛額部と大脳の附近に分佈する。視神經交叉漏斗の後方、腦底の蝴蝶骨トルコ鞍の上方には基礎動脈の末梢の後大脳動脈があり、側方には中大脳動脈があり、前方には前大脳動脈があり

前交通動脈、後交通動脈があつて、ウイリス氏(Willis)動脈環(輪)を作る。

鎖骨下動脈分佈の概略 (昭十三年九月愛媛)

一、起始。右は無名動脈から、左は大動脈弓から分れ。

二、經過。肺尖の上を越へて前、中斜角筋の間を過ぎ、鎖骨の下を経て終に腋窩動脈となる。同名の靜脈は動脈の前下方にあり、膊神經叢は動脈の後上方にある。

一、枝別。(1) 椎骨動脈、(2) 内乳動脈、(3) 甲狀項軸、(4) 肋項軸、(5) 横頸動脈。

(1) 椎骨動脈は鎖骨下動脈の上から起り、長頸筋の外側を上方に昇り、第六頸椎の横突起孔より上の頸椎の横突起孔を経て、第一頸椎の横突起孔を通り、後閉鎖膜を穿通して、硬腦膜を穿ち、延髄の兩側に沿ふて上内方に進み延髄とワロリ氏橋との間で左右合して一條の基礎動脈となる。その分枝は

(イ) 脊髄枝は脊髄に (ロ) 腦膜枝は硬腦膜の後部に (ハ) 前、後脊髄動脈は脊髄の前後に (ニ) 後下小脳動脈は小腦の後下面に分佈する。

椎骨動脈の續きである基礎動脈は、左右椎骨動脈が延髄とワロリ氏橋との間で合したものであつて、延髄とワロリ氏橋の前で、左右の後大脳動脈となる。それまでの分枝は、

(イ) 橋枝はワロリ氏橋に、(ロ) 前下小脳動脈は小腦の下面に、(ハ) 内聽動脈は内聽道に、(ニ) 上小脳動脈は小腦の上面に、(ホ) 後下小脳動脈は小腦の下に分佈する。

内乳動脈分佈の状態

内乳動脈は鎖骨下動脈の下部から出て内下方に向ひ肋軟骨と肋間筋との間を下り、第六肋間で上腹壁動脈と筋横隔膜動脈の二終枝となる。此の動脈は胸骨の側縁二仙迷の外方にある。其の分枝は、

(イ) 前縦隔動脈 (ロ) 胸腺動脈 (ハ) 氣管動脈 (ニ) 胸骨枝 (ホ) 前肋間動脈 (ヘ) 穿行枝等を分佈して各々其名の如き部位に分佈する

甲狀項軸(甲狀頸幹)分佈の概略 (昭二年春奈良)

- 一、起始。前斜角筋の内側で鎖骨下動脈の上方から。
- 一、經過。直ちに四枝に分れる。
- 一、枝別。(イ)下甲狀腺動脈、(ロ)上行項動脈、(ハ)淺在項動脈、(ニ)横肩胛動脈。
- (イ)下甲狀腺動脈は甲狀腺側葉の後下面に、
- (ロ)上行項動脈は前斜角筋と肩胛舉筋に、
- (ハ)淺在項動脈は鎖骨上窩を経て後外方に向ひ僧帽筋とその附近の筋とに分佈し、
- (ニ)横肩胛動脈は鎖骨の上縁を経て棘上筋・棘下筋に循り一枝を肩峰突起に送る。

肋項軸(第一肋間動脈)分佈の概略

- 一、起始。前斜角筋の後方で鎖骨下動脈から。
 - 一、經過。弓状に少し上行して直ちに二枝に分れる。
 - 一、分枝。(イ)深在項動脈は、項部の深層の深層筋に (ロ)第一肋間動脈は第一、第二肋間に分佈する。
- ### 横頸動脈分佈の概略
- 一、起始。前斜角筋の外側で鎖骨下動脈から。
 - 一、經過。中、後斜角筋の外側に沿ふて、膊神經叢を穿通し、肩胛舉筋の前で二終枝となる。

- 一、分枝。は二終枝であつて、(イ)上行枝と、(ロ)下行枝である。
- (イ)、上行枝は肩胛舉筋、前斜角筋等に分佈する。
- (ロ)、下行枝は菱形筋と後上鋸筋との間を肩胛骨の内縁に沿ふて下行し、其の附近の筋に分佈して潤背筋に終る。

腋窩動脈の起始經過分佈

- 一、起始。第一肋骨の外端(鎖骨下動脈の續き)
- 一、經過。小胸筋の内上方から大胸筋附着の下縁まで。
- 一、分枝。胸肩峰動脈は大胸三角筋窩で、肩峰突起にゆく肩峰枝。三角筋にゆく三角筋枝。大胸筋、前大鋸筋にゆく胸筋枝に分る。
- (イ)長胸動脈は小胸筋の下から前大鋸筋に分佈す、(ロ)肩胛下動脈は數條あつて肩胛下筋に分佈して後二枝となり
- 上枝(廻旋肩胛動脈)は棘下に、下枝(胸背動脈)は潤背筋の上部に分佈する。
- (ハ)前廻旋上膊動脈は肩胛關節に、(ニ)後廻旋上膊動脈は三角筋に分佈する。

上膊動脈の起始經過を記せ

(大十一年五月佐賀。同十年二月大分、昭十一年秋岡山、同熊本、昭十三年六月鳥取)

- 一、起始。腋窩動脈の續きで大胸筋附着の下縁から。
- 一、經過。烏喙膊筋と三頭膊筋長頭との間を下方へ、二頭膊筋の内側即ち二頭膊筋内筋溝を通つて、肘窩の二頭膊筋腋

の下に至つて、撓骨動脈、尺骨動脈の二終枝となる。
一、分枝。(1) 深在膊動脈は上膊動脈の上方から出でて、三頭筋の長頭と内頭との間を通つて上膊骨の後側に廻り、三頭筋に分佈して肘關節に至る。(2) 上、下尺側動脈は尺骨神経に沿ふて下り、上、下互に吻合する。

撓骨動脈の起始經過を記せ

(大十四年五月廣島、大八年十月釜山)

一、起始。肘窩の二頭膊筋離の下で、上膊動脈から分枝する。
一、經過。膊撓骨筋と廻前圓筋の間から内撓骨筋の外側を下り、下端では撓骨莖狀突起の内方で膊撓骨筋の離と内撓骨筋の離との間に直ちに皮下に現はれる。(備考。普通脈搏を診るの部位である)次に手背の第一、第二掌骨の間にて、拇指の背面兩側と示指の拇指側に分佈する。手掌では尺骨動脈の淺、深手掌枝と吻合して淺深動脈弓を作り、手指に分佈するものは次の分枝の項で述べる通りである。
一、分枝。(1) 淺掌枝は腕骨部の手掌面で尺骨動脈の淺掌枝と共に淺掌動脈弓を作り、其の凸側から總指掌動脈を出して末梢は第二、第三、第四、第五指の掌面の兩側に分佈する。(2) 深掌枝は手掌の下端に近く尺骨動脈の深掌枝と共に深掌動脈弓を作り、二、三の枝を出だして總指掌動脈に合す。(3) 返廻撓骨動脈は肘關節に分佈する。

尺骨動脈の起始經過分佈

(昭二年十月滋賀)

一、經過。撓骨動脈と分れて廻前圓筋の内下方を通り、淺屈指筋と深屈指筋との間を斜に過ぎ、尺腕屈筋(内尺骨筋)の

撓側を下り、豆骨の撓側から手掌に出で淺深二手掌枝になる。

備考。終枝は撓骨動脈の終枝と共に淺掌動脈弓と、深掌動脈弓を作り。淺掌動脈弓の末端は第二指乃至第五指の掌面に分佈し、深掌動脈弓の末端は第二指乃至第五指の背面に分佈するものである。

一、分枝。返廻尺側動脈は上端から分れて肘關節に、總骨間動脈は深屈指筋と長屈拇筋との間に於て、前後二枝に分れ骨間の前後に分佈し。腕骨背側動脈、同掌側動脈は下端から分れて腕關節動脈網に終る。

胸部大動脈幹

一、部位。第三胸椎體の部から横隔膜の大動脈裂口まで。
一、分枝。九對の後肋間動脈を後肋間に、氣管枝動脈を氣管の上部に、食管動脈を食管に、後縱隔動脈を後縱隔洞に、上横隔膜動脈を横隔膜の上部に分つものである。

腹部動脈幹の起始經過並に枝別

(昭五年十月奈良)

一、部位。第一腰椎の前方から第四腰椎の前面までである。
一、分枝。内臟動脈軸、上腸間膜動脈、下腸間膜動脈、副腎動脈、腎動脈、内精系動脈、(以上は内臟枝であつて上腹部の内臟に分佈する。)

腰動脈は四對あつて腹壁と腰部の筋に分佈する。(以上は體壁枝であつて。體壁に分佈する)

第四腰椎の前面で、腹部動脈幹が左右の總腸骨動脈に分れる時、中央より尾呂骨に向つて分佈する中腸骨動脈を出す

備考。上腸間膜動脈 (昭五年三月北海道)

内臟動脈軸の直下から起始して、下脛十二指腸動脈・中結腸動脈・右結腸動脈・十數條の小腸動脈を分枝して、主として全腸の右側に分佈し、末端は右腸骨窩の盲腸の周圍に分佈する。

備考。下腸間膜動脈

上腸間膜動脈の下腹部動脈幹の下三分の一の部から分れて主として全腸の左側に分佈し、左結腸動脈と上痔動脈の二終枝となつて其末梢は直腸に分佈する。

備考。「腸間膜動脈の起始及分佈を問ふ」(昭十年九月滋賀)

内臟動脈軸

一、部位。第一腰椎の前方にあつて太く短い、すぐ左記の三枝に分れる。

二、分枝。(1)左胃冠動脈は主として胃に、(2)肝動脈は肝臓に、(3)脾動脈は左方に至つて脾に循る。其他膽囊、十二指腸、脾に小枝を分つものである。

總腸骨動脈

一、部位。第四腰椎の前面から左右の薦腸關節の前面までである。其の間に分枝はない。

終枝は内、外腸骨動脈となる。

内腸骨動脈 (一名下腹動脈)

一、部位。は小骨盤の側壁を下つて主として小骨盤内器關に分佈し、内陰部動脈、坐骨動脈の二終枝となる。

二、分枝。二終枝の外に腸腰動脈、側薦骨動脈、上臀動脈、閉鎖動脈、臍動脈、下膀胱動脈、中痔動脈等を分枝して各々其の名の如き部位に分佈する。

外腸骨動脈

一、部位。下肢動脈の總幹で大腰筋の下から外下方に下り内股輪までである。

二、分枝。下腹壁動脈は下腹部に、廻旋腸骨動脈はブーパルト氏靱帶の下から腸骨輪の附近に分佈する。備考。股動脈以下は後章「筋と神經脈管の關係の部」にもあり。

股動脈

(昭十二年春三重、同十二年九月北海道)

一、起始。外腸骨動脈の終枝で内股輪の部位から、即ち鼠蹊靱帶の下方を下り大腿骨内上顆に向つて下るもので。

(備考、下肢動脈の總幹である。)

二、經過。太き股靜脈の外側から大内轉筋裂口を出で膝關動脈となるまでである。

三、分枝。及び分佈。(イ)淺腹壁動脈、(ロ)淺廻旋腸骨動脈、(ハ)外陰部動脈、(ニ)深在股動脈の四枝を分つて各々其の名の

如き部位に分佈す、
但し(1)の深在股動脈は四枝の中一太くして大腿(上腿)後側の諸筋に循るもので、(1)内廻旋股動脈は恥骨筋・腸腰筋に、(2)外廻旋股動脈は腸腰筋・股鞘張筋・中臀筋・四頭股筋に分佈するものである。

膝關動脈 (昭八年秋三重)

- 一、起始。大内轉股筋裂口の下から。(股動脈の終枝即ちつゞき)
- 一、經過。膝關窩の正中を膝關筋の下まで。
- 一、分枝及び分佈。(イ)筋枝、(ニ)頭股筋・半膜・半腱様筋・腓腸筋に。(ロ)膝關節動脈。(此動脈は關節の上、下に各一對づゝ分れて分佈す)

前脛骨動脈の起始經過分佈 (昭六年五月岩手)

- (A) 起始。膝關筋の直下、膝關動脈の分枝部から。
- (B) 經過。骨間靱帯に沿ふて下り總趾伸筋と前脛骨筋との間を通つて、足跗關節の前面で足背動脈となる。
- (C) 分枝及び分佈。(イ)後返廻脛骨動脈は返廻して膝關節動脈網に、(ロ)上腓骨動脈は同じ動脈網に、(ハ)前廻旋脛骨動脈は前方から返廻して同じ動脈網に、(ニ)前脛動脈の足跗部の前脛に分佈する。

後脛骨動脈

- (A) 起始。膝關筋の下端の膝關動脈の分枝部。
 - (B) 經過。下腿後側筋の淺深二層の間を下つて内脛の後方に至り、内外足趾動脈となつて足趾の内外に分佈する。
 - (C) 分枝及び分佈。(イ)腓骨動脈は本幹の上部から分れ長屈躡筋の前を下り腓骨側の諸筋に分佈す。(ロ)腓骨榮養動脈(ハ)後内脛動脈、(ニ)内跟骨枝は各々其の如き部位に分佈する。
- 其の終枝。
- (イ) 内足趾動脈、は足の内側に。
 - (ロ) 外足趾動脈、は前方に向ひ足趾の諸筋に枝別を與へて後、内足趾動脈と吻合し足趾動脈弓となる。
 - (ハ) 足趾動脈弓、は趾側足趾の兩側に分佈するものである。

門靜脈(一名門脈)の特徴及び經過 (昭六年北海道)

門脈に就て明記せよ (昭十四年十月徳島)

門靜脈は、短大の無瓣の脈管で、脾靜脈、上腸間膜靜脈、下腸間膜靜脈、膽囊靜脈等を集合した、消化せる榮養物を滿載したる一種特別の靜脈であつて、肝門から左右の二條に別れて肝臓の實質に入り、葉間靜脈となり、終りに肝靜脈となつて下大靜脈に入る。

備考。此の靜脈の特徴。壁の厚き事、瓣のない事、太く短き事、血液中に消化せる榮養物を滿載せる事。

淺在動脈の部位を記せ (昭十二年四月長野)

- (1) 耳前から頸部へ、淺頸動脈。
- (2) 下顎骨下縁咬筋附着の前縁で、外頸動脈。
- (3) 上、下頸三角部で、總頸動脈。
- (4) 二頭筋内筋溝で、上膊動脈。
- (5) 内撓骨筋腱の外側で、撓骨動脈。
- (6) 鼠蹊窩で、股動脈。
- (7) 内髌とアキリスとの間の後脛骨動脈等である。

靜脈總論

1、靜脈管

靜脈管は、内・中・外の三層からなるもので動脈の反對で其の管壁は薄くして弱い、彈力も收縮力も少ない。靜脈血の流れる壓力も低いから血液の逆流を防ぐために無數の瓣がある。又動脈より密に吻合してゐる。

2、淺在靜脈

直ちに皮下を流るゝもので皮下結締組織の間にある。皮膚の上から青く透視出来る。

3、深在靜脈

動脈と副行する副行靜脈で二條あつて深部を流れる。

4、靜脈

(A) 起始。全身至る所の毛細血管網から。

(B) 經過。深在靜脈は動脈と併行して遂に大靜脈幹となつて心臓の右房へ。淺在靜脈は深在靜脈へ。

(C) 分枝及び分佈。深在・淺在の靜脈は全身に分佈して細きものから太きものに集合せられて。

終りに上大靜脈・下大靜脈の二大幹となる。

(イ) 深在靜脈、は多くの場合動脈と同名で細きものから太きものとなる。つまり動脈は心臓を中樞として末梢に向つて分枝するが、

靜脈は動脈と反對に大概は同じ名の靜脈が(上膊靜脈が鎖骨下靜脈に流れるように)次の太き靜脈へと流れる。

(ロ) 淺在靜脈、は皮下に分佈するものである。

備考。要するに靜脈はすべて動脈の反對である事を理解すればよい。だから各論でも單に重要なものを概論することにしてをく

靜脈各論

甲、肺靜脈

(A) 起始。肺の毛細血管網から。(註。靜脈の起始は皆毛細血管網である)

(B) 經過。肺動脈の下を通つて肺門を出で心臓の左房に入る。

乙、全身循環の靜脈

(A) 起始。心臓筋・上半身・下半身の末梢から。

(B) 經過。心臓筋から始まるものは心臓靜脈となり、上半身から始まるものは上大靜脈幹となり、下半身から始まるものは下大靜脈幹となつて心臓の右房に入る。

1、上大靜脈

- (A) 起始。右第一肋軟骨の後面、左・右無名動脈の會合部。
- (B) 經過。上行大動脈幹の右側を下つて右房の後上壁に開口する。
- (イ) 無名靜脈、は胸鎖關節の後面で内頸靜脈と鎖骨下靜脈との會合したもので上大靜脈に入る。
- (ロ) 内頸靜脈、は鎖骨下靜脈と合して無名靜脈となる。頭蓋腔内の靜脈は内頸靜脈に入る。
- (ハ) 外頸靜脈、は後頭部から始まつて頸部の淺靜脈等を集めて無名靜脈に入る。
- (ニ) 鎖骨下靜脈、は上肢靜脈の總幹で無名靜脈に入る。

備考。上肢の淺靜脈

- 1、頭靜脈、は拇指側から始まつて撓側を上行して大胸三角筋窩(モーレンハイム氏窩)で腋窩靜脈に入る。
- 2、貴要靜脈、は手背尺側から始まつて、尺側を上行し二頭膊筋内筋溝の中央部で上膊靜脈に入る。
- 3、中靜脈、は手掌から始まつて肘窩で二條に分れ、頭靜脈と貴要靜脈に入る。

又此の分岐部に一條の深中靜脈があつて直ちに上膊靜脈に入る。

備考。肘窩の靜脈は醫師が好んで靜脈注射を行ふ部位である。

備考。胸部の靜脈

胸椎前方の奇靜脈は肋間靜脈の流れ入るもので、上は大靜脈幹に連り、下は腰靜脈に連る。

右を奇靜脈、左を牛奇靜脈といふにある。

- 1、奇靜脈、は胸椎の右を上つて上大靜脈に入る。
- 2、牛奇靜脈、は胸椎の左にあつて上半奇靜脈、下半奇靜脈が胸椎體の前側で奇靜脈に入る。

2、下大靜脈幹

- (A) 起始。第四腰椎の前で左、右總腸骨靜脈の會合部。
 - (B) 經過。腹部動脈幹の前を経て上行し横隔膜の大靜脈裂口を上り右房の後下部に開口する。
 - (イ) 體壁靜脈、は腰靜脈・下横隔膜靜脈で下大靜脈に入る。
 - (ロ) 内臟靜脈、は腎靜脈・内精系靜脈・肝靜脈・總腸骨靜脈で下大靜脈に入る。
- 備考。門靜脈(一名門脈)第一〇七頁を見よ。

3、總腸骨靜脈

總腸骨靜脈は、下肢から來る靜脈と骨盤内の靜脈とを集めたものである。

(A) 起始。薦腸關節の前面、内外腸骨靜脈の會合部。

(B) 經過。總腸骨動脈の經過と一致する。

- (1) 内腸骨靜脈、は痔靜脈叢・膀胱靜脈叢・恥骨靜脈叢が流れ入る。
- (2) 外腸骨靜脈、は淺深二種あつて深靜脈は足より來る靜脈を集めた總幹で下肢の動脈と一致して分佈してゐる。
- (3) 下肢の淺靜脈。

(イ) 大薔薇靜脈は足より起つて大腿の内側を経て股靜脈に入る。「大サフエナ靜脈の経路を問ふ」(昭九年春千葉)

(ロ)小叢靜脈は外髀の後側から下腿後面を経て膝靜脈に入る。
備考。靜脈の疾患で一等多いものは靜脈炎である。

動脈と靜脈の區別 (大十二年十一月長野)

(A)動脈は。

- (1)動脈血がある。
- (2)全身靜脈の1/2の太さである。
- (3)瓣がない。
- (4)末梢は毛細管となる。

(但し肺循環だけは特別で、肺動脈内には靜脈血、肺靜脈内には動脈血がある)。

(B)靜脈は。

- (1)靜脈血がある。
- (2)全身動脈の二倍の太さである。
- (3)無數の瓣がある。
- (4)毛細管から始まる。

第六節 神經學

腦髓の位置形狀區別

(A)位置。腦は稍々卵圓形で腦頭蓋腔内にある。

(B)形狀。澤山の廻轉と淺溝とがあり、前縱裂で左、右の兩半球に分れる。

(C)區別。大脳、前腦、中腦、後腦に區別する。

大 腦

大脳は稍々卵圓形で穹隆をなして、中央には前後に互つて深い縦の溝がある。此の溝を大脳縱裂といふ、之を分界點として左右の兩半球に分つものである。

大脳の表面には澤山の廻轉と淺溝、裂溝等がある。此の廻轉や裂溝の爲に前頭葉、顛頂葉、後頭葉、顛頂葉の四葉に分れる。

左右半球の正中部に一致して稍々深い溝がある此の溝を正中溝といふ。正中溝の前の廻轉を前正中廻轉といひ、後の廻轉を後正中廻轉といふのである。

又左右半球の下面から斜に上行して、正中溝に向つてあるシルウィス氏溝といふ溝がある。

前頭葉の後方は正中溝、下はシルウィス氏溝を界とした大脳半球の前部をいふのであつて、正中溝の前には前頭溝があつて前正中廻轉との隔となり、更に前進して上下の二條の溝となつて、前頭葉を上前頭廻轉、中前頭廻轉、下前頭廻轉の三部に區別してゐる。下前頭廻轉はシルウィス氏溝の分溝と共に眼窩部、三角部、瓣蓋部の區別をなす。

顛頂葉は、前頭葉と前正中溝を以て界し、後正中廻轉の後に顛頂溝があつて顛頂間溝となつてゐる、此顛頂間溝の爲に、顛頂葉は更に上下の二廻轉が出来てゐる。顛頂葉との分界部には隅角廻轉がある。

後頭葉は、後頭裂の鉛直部から後部をいふのであつて其の形は楔状である。(つまり後頭葉といふのは大脳の後端である)

顛頂葉は、シルウィス氏溝の下部である、此の顛頂葉の表面には上下二條の顛頂溝があるが故に、上顛頂廻轉、中顛頂廻轉、下顛頂廻轉の三箇の廻轉がある。そして顛頂葉の尖端は鉤廻轉、下端は海馬廻轉といふ。

大脳内面。大脳の内面は大脳天幕(鎌状膜)の爲に左右兩半球に分れて居て、前方には前頭葉の内面、中央には前後正中廻轉の内面と、其の下には胼胝體溝と胼胝體廻轉がある。此の部より下は、胼胝體の上面であつて大脳左右兩半球の連合部である。後方には、顛頂葉と後頭葉の界である處の地平後頭裂と鉛直後頭裂とがある。下方には海馬廻轉があり、海馬廻轉の下には後頭顛葉がある。

大脳の下面。大脳の下面はシルウィス溝の始めの部分で、ライル氏島、前穿行質、嗅葉を區別する。ライル氏島(一名島葉)は卵圓形の小廻轉で前頭葉と顛頂葉との間にある。前穿行質はライル氏島の内側で視神経交叉の外側にある、三角形をなす部である(此處には澤山の血管の穿行孔がある)。嗅葉は、嗅球、嗅三角、嗅索の三部から成るもので前穿行質の前面である。

再び大脳の位置形状區別竝に機能

解題。大脳はムツカシイ故に初心受験者の爲にこの章では前項の「大脳」をすつと省略してみる。

(A)位置。大脳は頭蓋腔内で、殆んど前部から側方と後方に向つて腦髓の大略を覆ふものである。
(B)形状。卵圓形で、澤山の淺溝と、大脳廻轉があり、眞中には大脳縦裂といふ截痕があつてその爲に左右兩半球となる。

(C)區別。左、右の半球に分れた大脳は表面にある淺溝の爲に、前頭葉、後頭葉、顛頂葉、顛頂葉に別れる。其大部分

は皮質と髓質から成る。皮質は主として灰白質で神経細胞から成り、髓質は主として白質で神経纖維から成る。又髓質中には處々に灰白質の塊がある。此の大脳には運動性皮質中樞、感覺(知覺)性皮質中樞、綜合中樞。等がある。要するに運動、感覺、精神作用は皆大脳皮質の神経細胞の働きである。

備考。「大脳の細胞の作用」(昭十二年十月岡山)

前 腦

主として視神経床、と第三腦室から成る部分で、四疊體の前上部にある。

中 腦

其の中央にある狭き水管は大脳導水管、前方は大脳脚、後方は四疊體である。

後 腦

延髓、小腦、ワロリ氏橋、第四腦室であつて、後頭蓋窩の底部で斜臺の近くにある。

小腦の位置形状區別竝に機能 (昭十一年九月富山、昭十年秋奈良)

(A)位置。小腦は後頭蓋窩で、ワロリ氏橋(各體橋、又腦橋)と、延髓の後上方にあつて。

- (B) 形状。卵を横にしたやうな形の稍々扁平なものである。
- (C) 區別。大脳後頭葉とは小脳天幕(小鎌状膜)で隔てられて居て、上面、下面、前縁、後縁を區別する。上面は上齒下面は下齒、といふ。溝と廻轉がある。(備考。大脳の表面に外見が似てゐるから小脳といふのである)
- (D) 機能。小脳の機能は身體位置の平衡を保つものである。

(昭十六年四月、朝鮮平南、同年五月平壤、昭十四年三月東京、昭十二年春福岡、同十月長崎、昭九年秋愛媛、同十六年春徳島、昭十三年四月熊本、同五月鹿児島、昭十六年春三重)

延髓の位置形状並に機能

延髓の位置形状及諸中樞

(昭十六年春宮崎、昭九年春三重、昭十一年春栃木、昭五年八月山縣、昭十二年五月群馬)

- (A) 位置。延髓は腦の後下部で、腦蓋底の斜臺の前部に乘つて居る、上方腦に對する方は太く、下方脊髄とは第一頸椎神經の長さで一つになつてゐて、脊髄と延髓との區別がつかぬ位である。
- (B) 形状。尖端は、圓くなれる圓錐形である。
- (C) 延髓とワロリ氏橋との間、及び其の上外側から、十二對の腦末梢神經が出て知覺、運動等、固有の傳導機能を營む。又延髓には、呼吸中樞、血管運動中樞、心臟機能調節中樞、グリコーゲン中樞等の自動中樞及び、嚥下中樞、眼瞼閉鎖中樞、嘔吐中樞、咳嗽中樞等の反射中樞があつて、夫々重要な作用を營む。

「延髓の自動中樞及名稱」(昭六年九月北海道廳) 「延髓の機能」(昭十年春栃木、昭十二年五月佐賀)

脊髄の位置及機能を記せ

(昭十年十月宮城、同福岡、同奈良)

脊髄に就て略述せよ

(昭十二年九月北海道、同十三年五月静岡、昭十年十月兵庫、昭十三年四月埼玉、昭十三年九月三重)

- (A) 位置。形状。區別。脊髄は脊髄管内にあつて、上は第一頸椎から判然たる區別なくして延髓となり、下は第二腰椎の下端で腰部膨大を作つて終線となる。脊髄は前後に壓せられた様な圓柱形で、頸部と腰部の二箇所で膨大部を作り、又前縦裂、後縦裂の爲に左右の二部に分れ、横にある前側溝と後側溝で、前索、側索、後索の三索になる。前側溝から前根(運動)の神經、後側溝から後根(知覺)の神經が出る。
- (B) 構造。外部は白質で知覺、運動の傳導路であり、内部はH字形の灰白質で種々の反射中樞がある。そのまん中は脊髄正中管で漿液があり、此の漿液は大後頭孔を通じて腦室の漿液と交通して居る。

備考。「脊髄の構造」(昭十二年十月福井)

- (C) 被膜。脊髄は硬膜、蜘蛛膜、軟膜の三膜で包まれて居る。

- (D) 機能。白質は知覺、運動の傳導路で、腦と末梢器關とを聯絡するものである。其の他瞳孔散大、脱糞、利尿、射精、分娩、勃起、膝蓋髓反射、血管擴張、縮小、發汗中樞等の反射中樞の作用をなすものである。(昭十四年春大阪)

備考一。「大後頭孔を通過するもの、名稱」(昭二年十月兵庫)。脊髄、脊髄正中管、椎骨動脈、靜脈、副神經。

備考二。「脊髄の機能」(昭十二年四月石川、昭十三年九月青森、昭十三年十月長野)

腦神經の名稱 (昭十六年春大分、昭十年秋福井、同神奈川、昭十二年九月滋賀、昭九年春東京、昭十三年十月大分)

腦神經の名稱を擧げて且運動神經知覺

神經の區別をなせ (昭六年四月臺北州)

腦髓神經を機能的區別に列擧せよ (昭和十年春静岡)

解題。腦神經とは腦末梢神經の事である。

此問題も試験には相當によく出る、簡易平明で此所に集録する必要もないが掲げて其例を示す事にする。

第一對、嗅神經(感覺) 第二對、視神經(感覺) 第三對、動眼神經(運動)

第四對、滑車神經(運動) 第五對、三叉神經(知覺及び運動) 第六對、外旋神經(運動)

第七對、顏面神經(運動) 第八對、聽神經(感覺) 第九對、舌咽神經(知覺及び運動)

第十對、迷走神經(知覺及び運動) 第十一對、副神經(運動) 第十二對、舌下神經(運動)

備考。此答案は名稱の他に各々生理學上の機能を其下に()に入れて書き加へて参考にしておいた。

感覺は感覺神經、知覺運動は混合神經である。

此十二對の末梢神經の起始經過分佈の概略は受験生は必ず知つて居らねばならぬ。

序に此神經記憶歌を書いておく。

嗅で見る、動けば滑る三の外、顏聽て舌迷に副し、舌十二。(これで十二對の神經が皆讀込まれてある。)

備考。「腦髓の神經に就て」(昭六年十月茨城)「腦神經の名稱と分佈」(昭八年春栃木)「腦神經の名稱及分佈部位」(昭十年春三重)

嗅神經 (第一對)

嗅球を出で篩骨篩孔を通り、鼻孔上側壁の嗅部に分佈して、嗅覺を主宰する。嗅部は黃褐色を呈するものである。

視神經 (第二對) (昭十二年十月山形)

視丘から起り、視神經交叉を経て胡蝶骨の視神經孔を通り眼窠に出で眼球の網膜に分佈して視覺を主宰する。

動眼神經 (第三對)

延髓の上外側、大腦脚底部の内側を通りて、前上方に向ひ上眼窠破裂を経て眼窠に入り、上、下の二枝となつて上枝は上直筋と上眼瞼舉筋に、下枝は内直筋、下直筋、下斜筋に分佈し眼筋の運動を主宰する。又一小枝を三叉神經の毛様神經節に送つて瞳孔括約筋に分佈する。

滑車神經 (第四對)

四疊體から起り、上眼窠破裂を経て眼窠に入り、上斜筋に分佈して運動を主宰する。

備考。「眼筋及之に分佈する神經の名稱」(昭九年春鹿兒島)

三叉神經分佈の状態 (昭十三年五月富山、昭十三年秋福井、昭十二年五月廣島)

三叉神經の起始經過分佈の概略

(第五對)

昭九年春長野、昭九年秋長崎、昭五年十一月
岩手、昭十一年十月佐賀、昭十二年春三重、
昭八年六月宮城、昭十二年十月福島、昭十三
年四月山形、昭十三年四月愛知、和歌山其他

三叉神經の起始分佈及び作用

(昭十六年春宮崎、昭八年六月宮城)

三叉神經に就て知る處を記せ

(昭十年春鹿兒島)

解題。此の神經も鍼灸醫學には極めて重要な神經である。殊に毛様神經節、鼻神經節、耳神經節、顎下神經節を有するが故に、大層複雑になるが、問題は「概略」であるから簡明に答案を作つてよい。

三叉神經は大(知覺)、小(運動)二根を以て、延髓の上外側、ワロリ氏橋の外下方の後部より起始する大きな神經であつて僅に前方に出で、顎顎骨岩様部の前面で半月狀節を作つて直ちに三枝に別れ、運動性の小根は第三枝に混入する。

(1) 第一枝(眼神經)は、海綿竇を経て上眼窠破裂を通り眼窠に入り、鼻毛様神經、上眼窠神經、涙腺神經の三枝に分れて主として其の名の如く眼と眼の上部に分佈する。

(2) 第二枝(上顎神經)は、僅に前方に行き胡蝶骨の正圓孔を出で、翼狀口蓋窩で、下眼窩神經、楔口蓋神經の三枝となつて、顔面の中部及び上顎齒に分佈する。(註。竇、窩、字義同じ)

(3) 第三枝(下顎神經)は、三枝中最大の神經で、外下方に向ひ胡蝶骨の卵圓孔を出て外翼狀筋の内側で、知覺枝と運動枝とに分枝する。「三叉神經第三枝に就て」(昭十一年十月奈良)

(イ) 知覺枝、の下齒槽神經は下顎枝の内面の後顎骨孔に入り、齒に分佈して後前顎骨孔を出て頤神經となり、耳顎神經は下顎骨頸に沿ふて後方に至り、上方に廻轉し顎顎の外皮に分散して淺顎顎神經となる。

舌神經は舌下腺の上部から口腔に出で舌の粘膜、舌下腺に分散する。

(ロ) 運動枝、は咀嚼筋神經であつて左記の如く枝別を分つ。

(一) 咬筋、 (二) 深顎顎筋、 (三) 内、外翼狀筋、 (四) 頤筋神經である。

其他、毛様神經節は眼窠脂肪中に、鼻神經節は翼狀口蓋窩に、顎下神經節は顎下腺の上部に、耳神經節は主幹の側にあつて各々節を作るものである。

備考。檢定試験の問題は一枝を記せ、二枝の分佈を記せ、第三枝に就いて記せ、などときまかい時もある。

然る時は右の答案から、部分的に答案を作ればよい。

附たり、生理學上の三叉神經、又は三叉神經の機能、或は作用。

三叉神經は混合神經で、前方小根は運動纖維を、後方の大根は主として知覺神經纖維を含有する。

知覺性神經纖維は半月狀神經節を作つて後、

其纖維は、脊髓神經節の様に、一方は中樞に一方は末梢に向ふものである。

(イ) 知覺纖維は、顔面及び頤筋の全部、眼、鼻腔、口腔、腦被膜の前方等に分佈して知覺(感覺)を主宰する。

(ロ) 運動纖維は、顔面咀嚼筋及び顎舌骨筋、二腰顎筋前腹の運動を主宰する。

(ハ) 分泌纖維は、各神經節で自律神經より混入したるものであつて、顔面の汗腺、鼻粘膜腺、涙腺に分佈して分泌を主宰する。

(ニ) 血管收縮纖維は、結膜と虹彩とに分佈する。

(ホ) 味覺纖維は、舌尖で甘味と酸味を舌咽神經に媒介する。但し鼓索神經を通過す。

「三叉神經の作用」(昭十三年五月群馬)
病理。三叉神經痛は各種の神經痛中の最も代表的のもので、實際臨牀上甚だ多いものである。咀嚼筋痙攣は膜炎、子癇、ヒステリー發作等の場合にはそれ等の病氣の一分症(一ツの症候)として必ず來るものである。

外旋神經を記せ (第六對)

ワロリ氏橋と延髓の間を出て上眼窩破裂を経て外直筋に分佈し、同筋の運動を主宰する。

顔面神經に就て

顔面神經經過の概略及分佈を問ふ(第七對)

(昭十五年十月京都、昭六年十月栃木、昭四年四月大阪) 昭五年十月奈良、昭十年十月山形、滋賀、昭十一年春福井、昭十一年春朝鮮慶南、昭十二年春徳島、昭十二年五月滋賀、昭十三年五月高知、其他

解題。各府縣にてよく出る解剖學である。解剖學上の神經學中の第十二對の末梢神經第七對の神經を思ひ起して書けばよい。但し無暗に解剖學の通り書くの必要を認めない。簡單明瞭に認めて差支へない。此問題以下類題を少々例解しておくから、解剖學上の神經の簡單な問題は余が説明するまでもあるまい。受験生諸君は第十編の類題を幾らでも自ら試みて答案を作らばよい。

顔面神經は脳末梢神經の第七對で、延髓の上外側を出て聽神經と共に内聽道に入り、其の底部で分れて岩様部の顔面神經固有管に入り膝狀節を作り、下つて莖乳孔を出て其の附近に枝別を分ちて後、終枝は耳下腺部で耳下腺叢を作つて咀嚼筋を除く外の全顔面筋に分佈して其の運動を主宰するものである。但し顔面神經管の内外で枝別を分つ。

- (A) 顔面神經管内の枝別。 (1) 馬鐙骨筋神經。 (2) 鼓索神經。 (3) 迷走神經交通枝、
- (B) 同管外の枝別。 (1) 耳後神經。 (2) 莖狀神經。 (顔面神經解剖終り)

備考一。顔面神經生理 (顔面神經の生理作用、又は生理學上の顔面神經) この神經の機能は。

(1) 顔面筋、眼輪匝筋、鼻筋、頬筋、口裂筋、前頭筋、莖狀舌骨筋、二腹顎筋後腹、馬鐙骨筋に運動纖維を分佈して運動を主宰する。

(2) 顎下腺、舌下腺、耳下腺、涙腺、口腔に分泌纖維を分佈して分泌を主宰する。

(3) 又(2)に記したる腺體の血管に收縮纖維を送る。

(4) 三叉神經の味覺媒介纖維は、鼓索神經の中を通過するものである。

備考二。病理。顔面神經痙攣、顔面神經麻痺あり、麻痺は奇怪醜な顔相を呈するものである。

古書に口眼喎斜と謂ふのは顔面神經麻痺である。

「顔面神經の經過及び其分佈する臓器を説明せよ」(昭六年十月鳥取)

「顔面神經及三叉神經の作用と分佈」(昭十三年四月大阪)

「顔面に分佈する神經並に其作用。昭十六年春大阪」 1、三叉神經は顔面の知覺と、咀嚼筋の運動を主どり。2、顔面神經は顔面筋、即ち表情筋の運動を主宰する。

聽神經 (第八對)

延髓の外側から起り内聽道に入り、前庭神經と蝸牛殼神經との二枝となり。

前庭神經は前庭に分佈して頭首の位置を感ぜし、

蝸牛殼神經は蝸牛殼のコルチ氏器官に分佈して聽覺を主宰する。

舌咽神經 (第九對) (昭十三年十月岡山)

延髓の上外側を發し頸靜脈孔の前から頭蓋を出で、岩様部小窩で節を作つて二終枝となり(舌枝、咽頭枝)、舌、鼓室、咽頭等に分佈し主に味覺を主宰するものである。

迷走神經(第十對)の起始經過分佈の状態を記せ

(昭十六年四月長崎、昭十年十月兵庫、昭十一年春栃木、昭十二年九月北海道、昭四年五月奈良、昭十二年十月福島、昭十三年四月福岡、昭十年秋徳島、同埼玉)

迷走神經に就て

(昭四年春北海道、同十一年四月富山、昭十二年春大阪)

解題。迷走神經は三叉神經、副神經等と共に、我が鍼灸醫術と關係の深き神經であつて、筆記試験に又實地の口頭試験によく出題せられる。

迷走神經は詳しくいふと副交感神經の頭部自律性神經と共に、主として内臓に分佈する神經である。迷走神經は舌咽神經の後方から延髓の上外側即ち後側溝を出で舌咽神經と共に頸靜脈孔に達し、感覺性神經は頸靜脈節を作り、孔を出れば副神經の前枝を受けて節狀神經節(節狀叢)を作り、内頸動脈、靜脈の間に沿ひて共に血管鞘に包まれて側頸部を下り、大動脈弓の前側を過ぎて胸腔に入り、横隔膜の食管裂孔を通り腹腔に入り、胃、肝、脾、小腸、大腸、腎等に分散する。

其他、小枝は硬腦膜、咽頭、喉頭、食管、氣管、氣管枝、心臟、及びそれ等にある腺に分佈する。(以上の四行を以て答案とする)

るもよい。「迷走神經の徑路」(昭五年九月沖繩)

迷走神經一覽表

一 幹	二 節	三 叢	四 交通枝	五 枝
1 迷走神經幹は延髓の上外側より起り頸靜脈孔に向つて下る	1 頸靜脈節即ち迷走神經節は耳枝と、舌咽神經交通枝を出す。 2 節狀叢即ち迷走神經節は副神經、舌下神經、交感神經の上頭節と交通す。	1 肺叢は、前、後肺叢となつて肺臓に分佈する。 2 食管叢は、食管に連絡する。 3 胃叢は、前、後胃叢となつて胃に分佈する。	1 舌咽神經交通枝。 2 副神經交通枝。 3 舌下神經交通枝。 4 交感神經上頭節交通枝	1 耳枝は、耳後、及耳翼の外皮に。又硬腦膜に細小枝を與ふ。 2 咽頭枝は、咽頭叢を作り同粘膜に。 3 上喉頭枝は、内、外二枝となり喉頭の諸筋と粘膜に。 4 心臟枝は、心臟に。 5 下喉頭神經は、喉頭に分佈する。

備考一。右の六號活字は、記憶表であるが、本文と記憶表だけを答案としても差支へない。
備考二。「迷走神經の起始、經過分佈並に血管筋肉との關係」(昭九年春奈良)

附たり迷走神經生理

迷走神經の作用機能

(昭六年四月長崎、昭八年秋鹿兒島、昭十三年五月群馬、昭十三年四月岐阜、昭十四年春愛知)

迷走神經は重要な神經(一種の内臟神經)であつて腦神經系統に屬する感覺性神經、運動性神經よりも、自律性神經系統の副交感神經を多く含むが故に、内臓、血管、腺等に對して種々なる機能を營んで交感神經と拮抗的に作用する。

(1)上喉頭神經、下喉頭神經は、咽頭筋群、口蓋筋、食道筋、氣管及び氣管枝の筋に運動纖維を送つて運動を主宰す

る。其の他一部の感覚をも主宰する。

(2) 心臓に、心運動制止纖維を送る、又心臓に知覺纖維を送る。

(3) 胃、小腸、大腸に運動纖維を送る。

(4) 肺臓に、呼吸調節纖維を送る。

(5) 胃、腸、脾、肝、腎、等に分泌纖維を送る。備考。「肺臓、心臓、胃の神経の名稱を擧げよ」(昭五年十月福岡)

(6) 嚥下、吃逆、嘔吐、咳嗽等の反射媒介纖維を送る。

備考。病理、迷走神経緊張症(Vagotonia)は、徐脈、不正脈、喘息、胃痙攣等を來す。

頸部に於ける迷走神経の経路

頸部は節狀叢から下喉頭神経を分枝するまでで、始めは副神経の後方を下るが、後には内頸動、靜脈と總頸動脈の間を(總頸動靜脈と共に血管鞘に包まれ)つまり側頸部を胸廓に向つて下行し胸腔に入る。咽頭枝、上、下喉頭枝、心臓枝等を此の部で分枝する。

備考。「迷走神経の経過及び作用」(昭九年秋熊本)

副神経(第十一對)の経過及機能 (昭十一年九月富山)

副神経の起始経過並に同神経の分佈する筋の名稱 (昭六年四月大阪)

解題。解剖學上の問題だが我が鍼灸醫術とは大層關係の深いものであつて、足の太陽膀胱經の背部の經穴が僧帽筋

中に澤山にある。殊に著明な經穴が多い。

副神経は運動神経であつて、迷走神経の下方延髓の後側溝から出でて上行し、後頭骨の大後頭孔を通じて頭蓋腔に入り

舌咽神経、迷走神経と共に、頸靜脈孔を出でて内外(前後)二枝に分れ、

内枝即ち前枝は、下神経節にて迷走神経に合して後、外枝(後枝)は外下走して胸鎖乳嘴筋の内面で之に筋枝を與へ。終枝は鎖骨上窩の後方を經て外下方に至つて僧帽筋に分散する。

備考。生理學上の副神経は、内外二枝に分れ、内枝は迷走神経中に混入して脊髄性副神経となりて所謂迷走神經に一種の運動性を與へ。外枝は胸鎖乳嘴筋と僧帽筋とに分佈して運動を主宰する。

舌下神経 (第十二對)

延髓と脊髄の間から起始し、舌下神経縮を作りて舌骨大角の所から、舌、舌上、舌下諸筋に分佈して舌の運動を主宰する。

自律性神経に就て (昭九年大阪、昭十三年三月北海道)

交感神経に就て知る所を記せ

(昭十六年四月佐賀、昭九年秋滋賀、昭五年四月愛知、昭十一年四月富山、昭十一年十月島根、昭十二年四月福岡、昭十三年三月長野、其他各縣)

解題。交感神経は認識に關係のない。(但し間接には幾分影響を蒙る)一神経系統であつて、現今自律性神経系統又は植物性神経系統等と稱せられ、内臓、血管壁、心臓筋、腺に分佈して、夫れ等の機能を、主宰するものである。

交感神経中樞を左記の如く區別する。

自律性神經系統

(甲) 胸腰部自律性神經系統……即ち交感神經系統
(乙) 頭部自律性神經系統……即ち副交感神經系統
鷹部自律性神經系統

(甲) 胸腰部は、所謂交感神経系統である。其の中樞は脊柱の前兩側に二十乃至二十四個の節を作る。交感神経節、状索と腹腔神経節、上腸間膜神経節、下腸間膜神経節等である。

(乙) 頭部自律性神経系統は、延髄及び中脳に中樞を有し、多くは迷走神経に混入して胸腹部内臓に分佈する。鷹部自律性神経は、腰髄の下端と鷹髓上部の灰白質の前縁に中樞を有し、それ等より出づる纖維は下腹及び骨盤内臓に分佈する。

備考。自律性神経系統は、主として遠心性で其の各器關に於ける作用は、心臓に於ては、頭部自律性神経(迷走神経)は制止神経となり、交感神経は鼓舞神経となれるが如く、多くの場合、此の交感、副交感の二神経は、各内臓や腺に分佈して、拮抗作用、即ち相反對する働きを致して吾人の生命現象を調節するものである。

備考。「交感神経の作用」(昭十二年十月茨城) 交感神経及副交感神経に就て(昭十六年四月山形)
病理。頭部自律性神経所謂(迷走神経)の緊張症は、ヴァゴトミーといひ(迷走神経の部参照)交感神経緊張症をシンパチゴトミーといふ。交感神経緊張症の場合には血管擴張、胃液分泌減少、胃腸の弛緩、瞳孔散大、等の諸症を來す。迷走神経緊張症は、その反對の症候を來すものである。

脊髓神經の區別並に分佈

(昭十二年六月栃木、同十月宮城) (昭十三年秋岐阜、同富山)

脊髓神經は三十一對あつて左記の如く區別する。

- (1) 頸椎神經 八對、(上四對の前枝は頸神經叢、下四對の前枝は膊神經叢を作る)——主として上肢と胸背に分佈す。
 - (2) 胸椎神經 十二對、(此の神經の前枝は叢を作らず肋間神經となる)——内外肋間筋を主とし、一部は上腹部に分佈す。
 - (3) 腰椎神經 五對、(此の神經の前枝は腰神經叢となる)——主として下腹と大腿に分佈す。
 - (4) 鷹骨神經 五對、(此の神經の前枝は鷹骨神經叢を作る)——主として下肢に分佈す。
 - (5) 尾呂骨神經 一對、(尾呂骨附近の筋と皮膚とに分佈する)——主として尾呂骨附近に分佈す。
- 但し、後枝は皆其の部の皮膚と筋に分佈するが、第一、第二頸椎神經の後枝は特に大きい。即ち後頭下神經及び大後頭神經といひ、後頭から顛頂結節に向つて分佈するものである。

備考。鷹骨神經叢から第三鷹骨神經の半分と第四鷹骨神經とを分離せしめて、陰部神經叢(總陰部神經と其分枝)として論述する學者あり。「神經一覽表」百三十五頁参照。

上頸叢の分佈と其枝別

(昭十六年春、静岡)

上四個頸椎神經の前枝から成るものであつて顔面、舌下、迷走、副、交感神経と細小枝を以て交通する。其分枝は、皮枝四條、筋枝二條からなるものである。

(A) 皮枝。(1) 小後頭神經は後頭の皮膚に、(2) 大耳神經は耳翼と耳の後下部の皮膚に、(3) 下頸皮下神經は前頸部の中部以下に、(4) 鎖骨上神經は前胸部の上端と肩胛部の皮膚に分佈する。

(B) 筋枝。(1) 下行項神經は舌下神經下行枝と吻合して、胸骨舌骨筋、胸骨甲狀筋、肩胛舌骨筋等に、(2) 横隔膜神經は前斜角筋の前縁を下り胸廓の前壁の後面を下行して横隔膜に分佈して其の運動を主宰する。

但し第二頸椎神經の後枝は大後頭神經といつて、後頭部から顛頂部に分佈し、第一頸椎神經の後枝は後頭下神經といつて、廻旋椎と後頭骨との間の諸筋に分佈する。

備考。「上膊に於ける主要神經の名稱を列擧し其の經路に就て述べよ」(昭十三年十月和歌山)

下頸叢 (一名膊神經叢) (昭九年春奈良、昭八年春東京、昭十三年四月福井、昭十六年春靜岡)

下四對の頸椎神經の前枝(即ち第一胸椎神經の大部分を加へて)より成るもので前、中斜角筋の間で叢を作り、胸廓と上肢とに分佈するものである。

(イ) 胸筋枝。(1)前胸廓神經 (2)後胸廓神經 (3)側胸廓神經。各々其の名の如く胸壁の前部、側部、後部の筋に分佈する。

(ロ) 肩胛筋枝。(1)肩胛上神經 (2)肩胛下神經 (3)鎖骨下神經 (4)腋窩神經。各々其の名の如き部位に分佈す。

(ハ) 皮枝。(1)内膊皮下神經 (2)中膊皮下神經 (3)外膊皮下神經は、各々膊(上肢)の皮膚に分佈する。

三神經幹。三神經幹は上、下、後の三幹で、上、下、の二幹からは正中神經、下神經幹からは尺骨神經、後神經幹からは撓骨神經が生じて、上肢の主要なる神經となる。

備考。「頸神經叢の位置並に分枝の名稱及び其分佈」(昭三年奈良)の答は此下頸叢と上頸叢とから抄出すればよい。

尺骨神經の起始經過分佈 (昭十六年五月山口、昭六年十月岐阜、同年九月大阪、昭十二年十月秋田、昭十二年十月茨城、昭十二年十月和歌山)

尺骨神經は、下神經幹の連続である。

上膊部では、二頭膊筋内筋溝で上膊動脈の内側を三頭膊筋の後側に沿ふて下つて内上髁の尺骨神經溝に入る。

前膊部では、内尺骨筋に沿ふて下り豆骨の内側に至る。其の間同筋と深屈指筋に枝を分散す。

手掌部では、淺深二枝となつて、深枝は小指球、骨間筋、内轉拇筋に分散し、淺枝は第五指の兩側と第四指の尺側に分佈する。

備考。疾病は、尺骨神經痛、同麻痺等である。備考。「尺骨神經の分佈作用」(昭十年秋熊本)

經穴。小海・陰郛・通里・靈道・支正・養老・神門・少府・後谿等。

正中神經 (昭十六年五月群馬、昭九年春長崎、昭九年春福岡、昭六年四月香川、昭十二年十二月京都)

上、下の二神經幹から生じ、其の起始部では腋窩動脈を挟む。上膊部では、二頭膊筋内筋溝に於て上膊動脈の前を肘窩の内側に下る(此の神經は上膊部では枝を出さない)。前膊部では、廻前圓筋の二頭間を経て淺深屈指筋の二層間を、それ等の筋に枝を與へて下り手掌に至る。又前骨間神經を生じて前骨間を手掌に向つて下る。手掌では筋枝は拇指球と蟲様筋に分佈し、皮枝は第一乃至第三指の兩側と第四指の撓側に分佈する。

備考一。正中神經の分佈及筋との關係。(昭十六年五月山口)

備考。疾病は正中神經痛、麻痺等。

經穴。天泉・曲澤・小海・郛門・間使・內關・大陵・中衝等。

撓骨神經 (昭十一年十月和歌山、同十二年六月栃木、昭十二年十月秋田)

後神經幹の連続で、深在膊動脈と共に三頭膊筋の長内二頭間を出で、撓骨神經溝を下り肘窩の外側で淺深二枝となる。前枝(淺枝)は、膊撓骨筋に沿ふて下り其の筋の腱の下から手の背面に出で、拇指示指の兩側と中指の撓側に分散する。後枝(深枝)は、撓側諸筋(長外轉母筋、膊撓骨筋、短廻後筋)一名短外撓骨筋に枝を分つ、一枝は撓、尺骨間に分佈する後骨

間神經を生ずる。

備考一。疾病は撓骨神經麻痺、撓骨神經痛等である。

經穴。天鼎・消深・曲池・三里・上廉・下廉・合谷・魚際・少商等。

備考二。昭九年春兵庫縣の「前膊神經の名稱」は尺骨、正中、撓骨、神經の大概を答案すればよい。

肋間神經を解剖的に説明せよ (大九年十月徳島)

十二對の胸椎神經の前枝は、所謂肋間神經で肋骨溝に沿ふて肋間に分佈するものであつて、上七對は外肋間筋に枝別を與へ、側部で前大鋸筋を穿通して皮膚に分佈する穿行枝を出し、本幹はそれから前方に進み胸骨の側縁を穿通して胸骨前面の皮膚に前穿行枝となる。下の五對は測背筋の肋骨部で側穿行枝を出し、本幹は前方に進み直腹筋の側縁を穿つて前面に出で前穿行枝となるものである。

備考。肋間神經痛は此の神經の主として左側の第五、六、七、八の神經に來る疼痛である。其の詳細は第七編病理學篇の部を見よ。

腰神經叢 (昭十年春栃木、昭十一年十月靜岡)

腰神經の分佈經路 (昭十年春愛知)

五個の腰椎神經の前枝であつて、方形腰筋と腸腰筋の間で叢を作り、主として下腹部と大腿に分佈する。

(A) 下腹部。

- (1) 腸骨下腹神經は、主として臍以下の下腹部に、
- (2) 腸骨鼠蹊神經は、腸骨柎と鼠蹊部に、
- (3) 陰部股神經は、二枝となつて精系の皮膚と大腿内側の外皮に分佈する。

(B) 大腿部。

- (1) 外股皮下神經は、腸骨前上棘の下から大腿外側の外皮に、
- (2) 閉鎖神經は、大腿内側の諸筋に、
- (3) 股神經は、腸骨筋に筋枝を與へて下行して大腿前側の諸筋に分佈す。内枝は内股及び前股皮下神經となりて、それ等の皮膚に分佈する。又サフエナ神經は下腿内側の皮膚に分佈する。

「股神經の經過に就て」(昭五年十月京都、昭十年秋長野)

薦骨神經叢とは何ぞや分佈の概略

薦骨神經の前枝は、

前薦骨孔を出て梨子狀筋の前で叢を作る、細小枝は骨盤の内外に分佈する。而して叢の分枝は、

- (1) 上髀神經は、中、小髀筋に、
- (2) 下髀神經は、大髀筋に、

- (3) 總陰部神經は、肛門括約筋、會陰内外の筋と皮膚に、其の末梢は陰莖背神經となつて陰莖の背側に(女性は陰核に)
 - (4) 後股皮下神經は、大腿後側の皮膚に分佈する。
 - (5) 坐骨神經は、最大の神經で上腿の後側より、下腿を足部に向つてそれ等の筋に分佈する。
- 備考。坐骨神經の詳細は病理學の神經痛の部及び後に記せる筋と神經脈管の問題の部をも参照せよ。
よく出るものだから縦横自在に論じてある。

坐骨神經の起始經過枝別分佈

昭九年春青森、昭十年十月宮城、同佐賀、同鹿兒島、同岡山、昭十一年春岩手、同十月秋田、昭十二年四月愛知、昭五年十一月長崎、昭十三年十月奈良、昭十三年四月兵庫、昭十三年四月山梨、同新潟、同六月廣島、同鳥取、昭十二年四月京都、同十月島根其他

坐骨神經の經路分佈及び作用

(昭五年十月熊本、昭十一年春靜岡)

解題。これは恐らく一等よく出た、又今後もよく出題せらるゝであらう。「下肢に於ける筋と神經及び脈管の關係」で概論してあるが、重複を厭はずもう一度こゝで詳解する。概論の答案なら「下肢に云々」の部でよい。

坐骨神經は薦骨神經叢の前枝から成れる薦骨神經が結束したもので太き處では其の幅一仙迷程ある。梨子狀筋の下方から小骨盤外に出てそれから内鎖筋、方形股筋と大臀筋の間を大轉子と坐骨結節との中間に下り、次に大腿後面の正中を大内轉筋と二頭股筋長頭との間を眞直に下行して、膝窩高の上方大内轉筋裂孔で脛骨神經と總腓骨神經となる。(以上坐骨神經幹經過の詳細、又筋との關係)

其の終枝は、既記の如く二枝となるが、經過中坐骨神經は内鎖筋、方形股筋、股關節、半腱様筋、二頭股筋長頭、大内轉筋に筋枝を分つものである。(以上大腿部の筋枝)

神經一覽表

甲、腦神經

- 1、嗅神經 (鼻腔粘膜に)
- 2、視神經 (主として網膜に)
- 3、動眼神經 (上、下の二枝となつて眼筋に)
- 4、滑車神經 (主として滑車筋に)

坐骨神經は始め坐骨神經隨行動脈を(一名坐骨動脈)伴ひ、大體に於て中部以下は股動脈と同方面に下行する。(以上血管との關係概略)

備考。「坐骨神經の經過及脈管、筋肉との關係」(昭十年秋新潟)

其の作用。(即ち生理)

坐骨神經は主として、下肢後側筋の運動神經であるが血管擴張神經をも伴つてゐる。(以上作用即ち機能)

備考。「坐骨神經の作用」(昭十三年五月滋賀)

5、三叉神經

- (イ) 第一枝 眼神經
 - 滑車上神經
 - 前頭神經
 - 鼻毛樣神經
 - 篩骨神經
 - 滑車下神經
- (ロ) 第二枝 上顎神經
 - (一) 下眼窩(竈)神經 (前上・後上齒槽神經)
 - (二) 眼窩(竈)神經 (上枝・下枝) 注意、竈と窩同義。
 - (三) 楔口蓋神經
- (ハ) 第三枝 下顎神經
 - 知覺枝
 - (一) 下齒槽神經
 - (二) 耳顳顯神經
 - (三) 舌神經
 - 運動枝
 - 咀嚼筋枝 (即ち咀嚼筋神經)

6、外旋神經 (外直筋に)

7、顔面神經 (膝狀節を附す)

- (イ) 顔面神經
 - (一) 淺大岩様部神經
 - (二) 馬鐙骨筋神經
 - (三) 鼓索神經
 - (四) 迷走神經交通枝
- (ロ) 同管外の枝
 - (一) 耳後神經
 - (二) 莖狀神經
- (ハ) 終枝
 - (一) 數條の顔面筋枝
 - (二) 下顎皮下神經
 - (三) 上顎皮下神經

8、聽神經

- (一) 前庭神經
- (二) 蝸牛殼神經

9、舌咽神經 (岩様部節あり)

- (一) 舌頭枝
- (二) 咽頭枝
- (三) 迷走神經交通枝
- (四) 鼓室神經

10、迷走神經

解剖學一・二・四頁の迷走神經の部の一幹、二節、三叢、四交通枝、五枝、所謂迷走神經一覽表を見よ。

11、副神經

- (一) 外枝
 - (イ) 胸鎖乳嘴筋枝
 - (ロ) 僧帽筋枝
- (二) 内枝 迷走神經交通枝

12、舌下神經

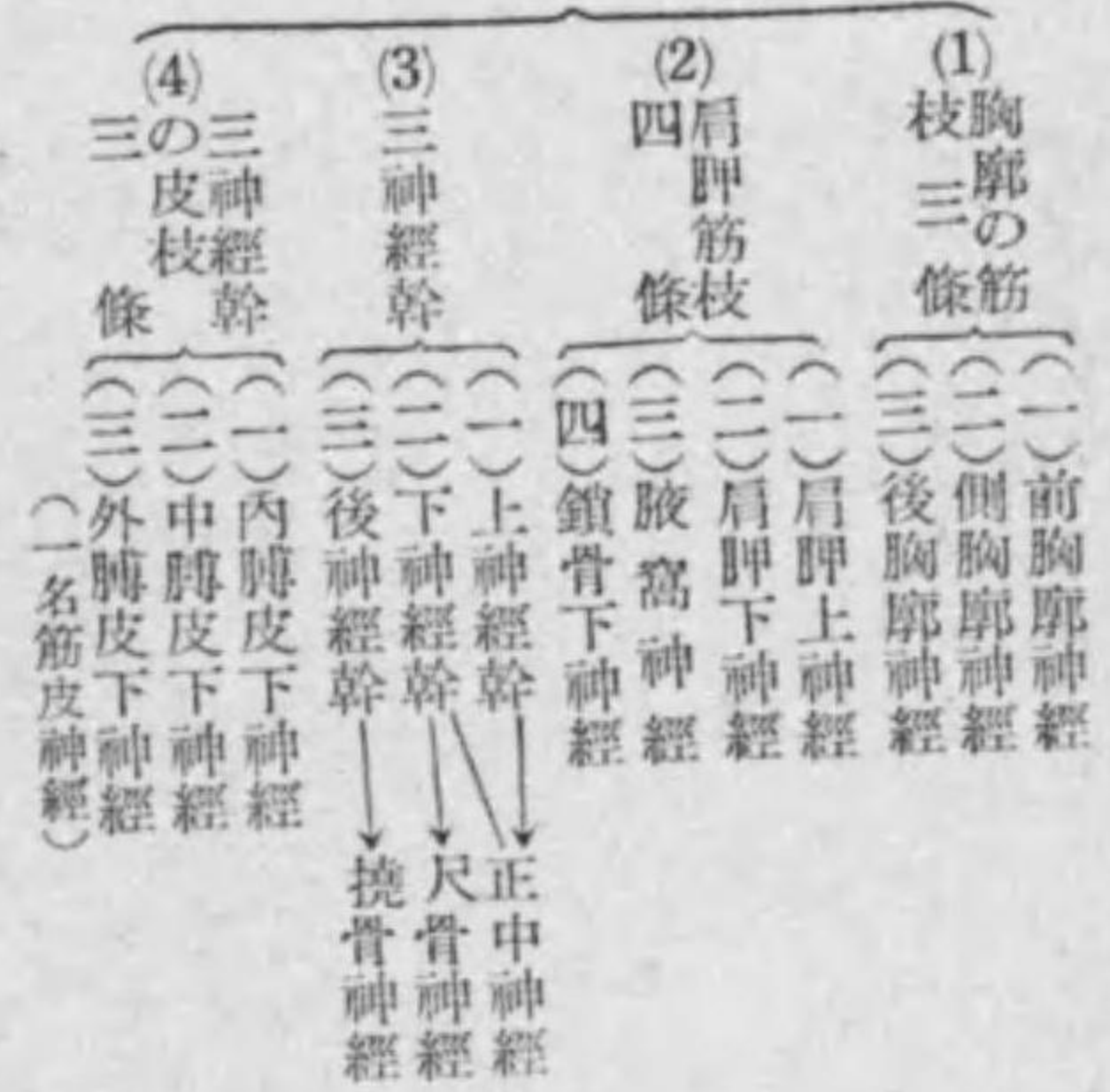
- (一) 下行枝
- (二) 舌骨甲狀筋枝
- (三) 舌枝

乙、脊髓神經

1、頸神經叢 (上頸神經叢)

- (一) 大耳神經
- (二) 小後頭神經
- (三) 下頸皮下神經
- (四) 下行項神經
- (五) 橫隔膜神經

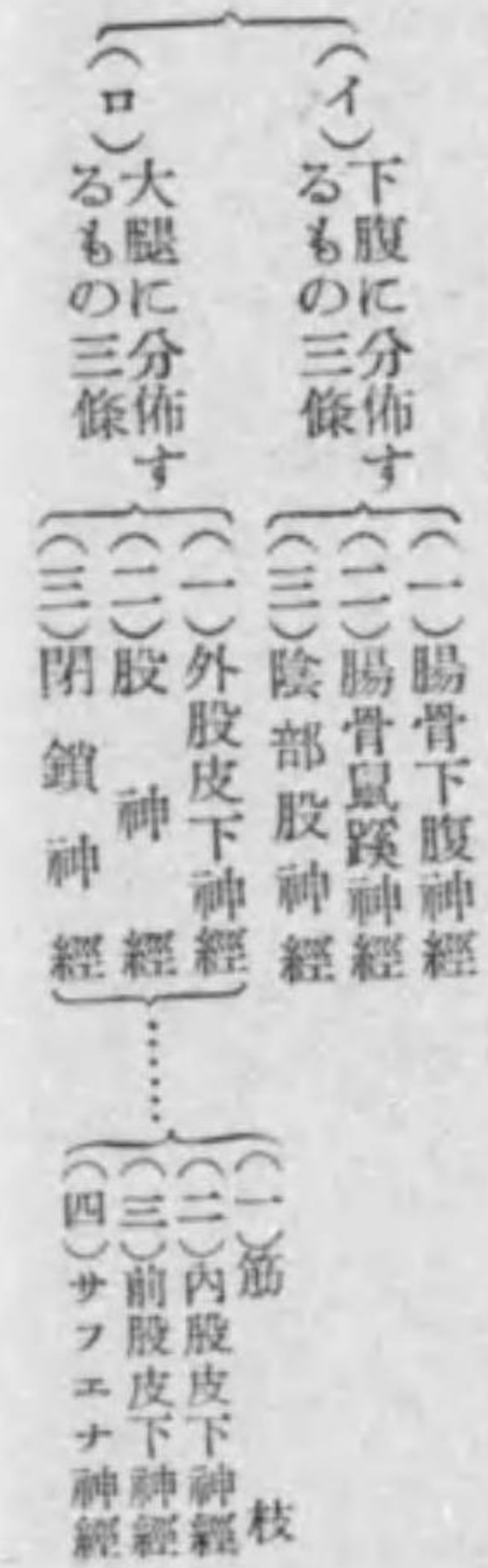
2、膊神經叢
(下頸神經叢)



3、肋間神經 (十二對)

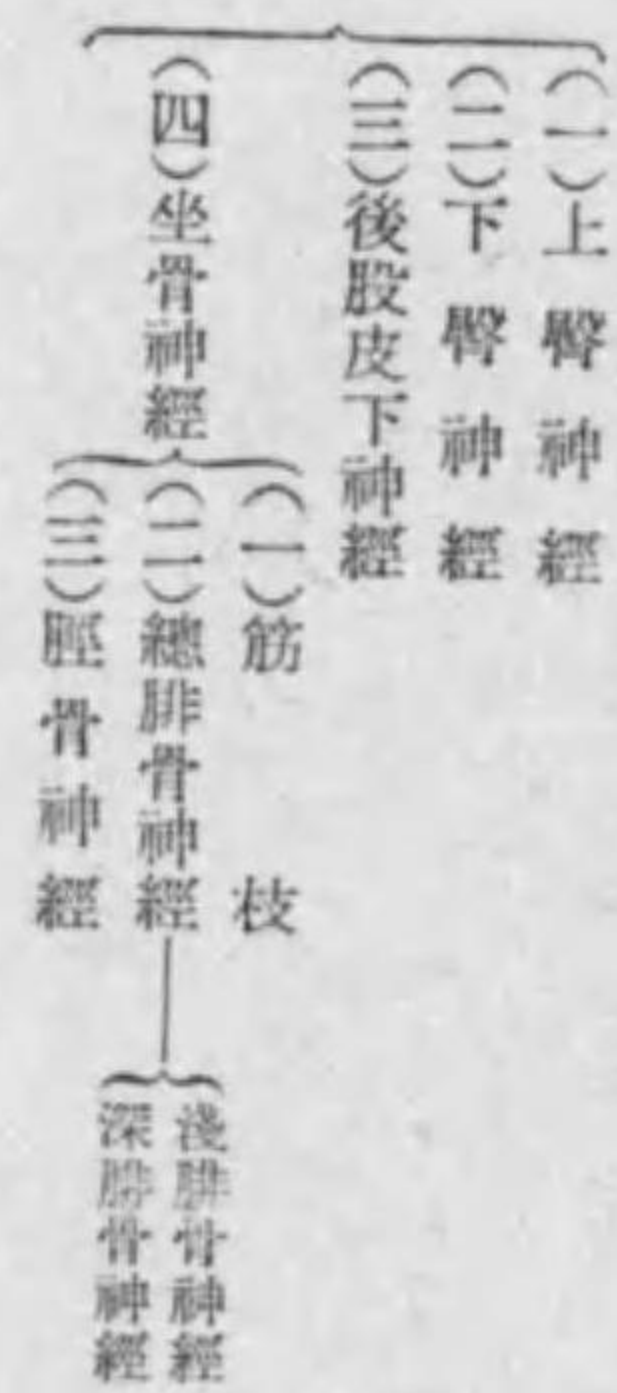
- (一) 筋枝
- (二) 側穿行枝
- (三) 前穿行枝

4、腰神經叢



備考。「腰神經叢より出づる主なる神経の名稱」(昭五年十一月長崎)

5、薦骨神經叢



6、陰部神經叢
(總陰部神經)

- (一) 下痔神經
- (二) 會陰神經
- (三) 陰莖背神經 (陰核背)
- (四) 中痔神經
- (五) 下膀胱神經

7、尾呂骨神經叢 (尾呂骨附近に)

丙、自律性神經
(植物性神經)

1、交感神經 (胸腰部自律性神經) 第一頸椎より第二腰椎までの間に於て脊柱の兩側に二十四、五の神経節が下方に連続して、交感神経節状素をなすものである。

2、副交感神経

- (イ) 頭部自律性神経
 - (一) 動眼神経 瞳孔収縮筋、毛様筋に
 - (二) 顔面神経 顎下腺、耳下腺、涙腺、口腔、咽頭、粘膜に
 - (三) 舌咽神経 耳神経節から舌下腺に、又鼓索神経に
 - (四) 迷走神経 心臓、気管、肺、胃、腸、脾、腎等に
- (ロ) 膈部自律性神経
 - 所謂骨盤神経にし
 - て下行結腸、盲腸、
 - 内生殖器、外陰部、
 - 膀胱、等に
- (藪部副交感神経)

第三章 生活體に就て

顔面各部の名稱 (大十四年九月東京)

- (A) 側部。額部、顴骨弓部、左右頬部、眼窩部、額骨部、耳下腺部、各々左右あり。
- (B) 正面部。眉間、鼻部、口部、上顎部、下顎部である。

生活體の前頸部の著明なる部を説明せよ (將來實地、又は學說で出さうな問題)

前頸部の上端胸骨上縁の中央の凹部は胸骨頸截痕。其の外側の關節は胸鎖關節。肩部外端肩峰突起から後上方に上る筋肉の隆起は、前頸部と後頸部とを境する僧帽筋の前縁。正中線中央の上の軟骨性隆起は、結喉即ち甲状軟骨隅角。其の上の凹部は上甲状軟骨截痕。更に其の上の一横溝で隔てられる骨は舌骨。結喉と甲状軟骨との下では、環状軟骨と氣管

が觸れる。

生活體の前胸壁に就て (同前)

胸骨正中線の上縁は、胸骨頸截痕(天突穴)。胸骨下端は劍狀突起で上腹部の上端である。胸骨手柄と體との境は、ルイズ氏角が横隆起をなして第二肋骨を定むる目標となる。胸骨の左右外側では、大胸筋が著明に分り。乳房は大胸筋上に固座してゐる。左右鎖骨の外端(鎖骨の下)は鎖骨下窩で。其の中に指を入れると鎖骨下動脈の搏動を觸れる事が出来る。

脳頭蓋の外表に於ける神経脈管

(A) 神経。前額即ち眉弓の上の前頭筋部から顛頂結節までは三叉神経第一枝の上眼窩神経が眉弓の上眼窩孔を出でて分佈し。前頭筋部では同じ神経の分枝前頭神経も分佈す。側部即ち額部では、顔面神経の額部枝と、三叉神経の額部神経が顛頂結節に向つて分佈し。後頭部即ち後頭筋部と、帽状腱膜の後方部では、大後頭神経が顛頂結節に向つて分佈し。後頭筋の下端と頭夾板筋には、小後頭神経が分佈する。

(B) 血管。前額前頭筋部からは顛頂結節に向つて上眼窩動脈が循り。前頭筋の起始部から髮際に入るまではこの外に前頭動脈も分佈する。側方額部は耳前から淺颞動脈が上行して額角の附近で前後の二枝に分れ前枝は前頭部に。後枝は額部から顛頂結節に向つて分佈す。後頭部では、乳嘴突起内側の後頭動脈溝を出た後頭動脈は、胸鎖乳嘴筋と僧帽筋との間を出て、後頭の外皮を循つて顛頂結節に至るものである。

備考。此等の記述を暗記すると頭部の經穴は其名と部位丈記憶へると神経、筋、血管は此他に無いのだから樂に記憶出来る。

第四章 筋と神経脈管の関係

背部筋の名稱竝に血管神経との關係 (大十五年春京都、昭十二年四月宮崎)

解題。これは大變範圍の廣い問題であつて、一種の解剖學上の應用問題で相當むづかしい問題である。たゞ暗記的に教科書を無理に記憶して居る人は到底書き得ない筈である。此の答案を書くには筋學、脈管學、神經學の三つを思ひ浮べて局所解剖的に書くのが正當であるが、それは無理であるから概念的に書いても差支へない。

淺層筋(六筋)。僧帽筋、潤背筋、菱形筋、後上鋸筋、後下鋸筋、夾板筋。
深層筋(六筋)。鷹骨脊柱筋、棘筋、横棘筋、横突起間筋、棘間筋、肋骨舉筋。
血管は僧帽筋の下には淺在項動脈が分佈し、菱形筋及び後上鋸筋には横頭動脈の下行枝が分佈す。潤背筋の上部には肩胛下動脈の下行枝が分佈し、後下鋸筋には、腰動脈の背枝が分佈す。深層諸筋には、九對の後肋間動脈の分枝が後方より前側方に向つて分佈する。
神經は僧帽筋には副神經が上方より來たり。菱形筋には後胸神經が來たり。潤背筋には肩胛下神經の分枝胸背神經が來たり。後上鋸筋には後胸廓神經、後下鋸筋、夾板筋には背椎神經が分佈する。深層諸筋は全部背椎神經に主宰されて居る。

腹筋と神経及び脈管との關係 (大十五年十月奈良、昭四年五月山口)

筋。直腹筋、三稜腹筋は縱走纖維を以て上方より下方に、横腹筋、内斜腹筋、外斜腹筋は、横走斜走纖維を以て腹壁を構成する。
動脈。内乳動脈の終枝上腹壁動脈は直腹筋の後面を下行して臍に至り、外腸骨動脈の分枝下腹壁動脈は直腹筋の後面に沿ふて上行して、臍の附近に至つて上腹壁動脈と吻合する。
四對の腰動脈は、方形腰筋の前方から内、外斜腹筋、横腹筋に分佈し。股動脈の分枝前腹壁動脈は、股輪を出でて上行して直腹筋部の皮下で吻合する。又腹部の皮下には皮下靜脈が種々吻合して居る。
神經。肋間神經前枝の五對は、内、外斜腹筋、横腹筋に分佈し。其の一部分は、臍より上の直腹筋鞘を穿つて皮膚に分佈する。
腰神經叢の腸骨下腹神經は、横腹筋に分佈し、前穿行枝は下腹の皮膚に分佈する。
又腸骨鼠蹊神經は腰神經叢より來たつて、腸骨櫛の部で側枝を出して皮膚に分佈し、前穿行枝は腹筋を下行して鼠蹊部に至るものである。

備考。「腹筋の名稱と血管神経に就いて」(昭六年十一月三重)

肩胛に分佈する神経の名稱 (昭十年春兵庫)

肩胛筋の名稱竝に分佈する神経 (大十五年奈良、昭二年十一月和歌山、昭十年六月千葉)

解題。此問題は京都府(十五年の春)の「背部淺層筋の名稱竝に之に分佈する神経と血管を記せ」と比較すると大同小異の感はあるが

奈良縣の方が大層樂である。元來内務省令第十一號、鍼術灸術取締規則第三條に於て試験を規定せる第一項に「一、人體の構造及び主要器關の機能と脈管神經の關係」と明かに指示して居るから、「前膊に於ける」「下腿に於ける」「頸部に於ける」「腹部に於ける神經及び筋と脈管の關係」といふ様な試験問題は必ず遭遇するものであるとして、檢定を受けむとする人はよく勉強して居なければならぬ。

- 一、三角筋には、外後方より腋窩神經が。
- 二、棘上筋には、肩胛截痕を経て肩胛上神經が。
- 三、棘下筋には、肩胛上、及び肩胛下神經が。
- 四、小圓筋には、腋窩神經が。
- 五、大圓筋には、上方より肩胛下神經が。
- 六、肩胛下筋にも同じく肩胛下神經が分佈して居る。

肘關節に於ける前側及内側の筋と之を通過する

血管神經の名稱 (大十一年三月富山)

肘關節前面即ち肘窩に於ける筋と神経脈管の關係 (昭十三年四月熊本)

外側の筋は、膊撓骨筋、内側には前膊の淺屈指筋、及び廻前圓筋、前側では皮膚の下にて二頭膊筋の終腱が二つに分裂して、一つは前膊筋膜に、一つは撓骨結節に附着する。
上膊動脈は二頭膊筋腱の下で、尺骨動脈と、撓骨動脈とに分れる。

皮下には、外側に頭靜脈、内側に貴要靜脈が上に向つて流れ、此の部で頭中靜脈と中貴要靜脈とで結合せられる。
正中神經は、廻前圓筋の淺深二層間を通じて前膊正中に下り、尺骨動脈とは同筋の深層を挟んで隔つ。
尺骨神經は、二頭膊筋の内筋溝から尺骨神經溝に入り。

撓骨神經は、膊撓骨筋の起始部と内膊筋の間から、此の部に來つて二枝となり、淺枝は撓骨靜脈の外に沿ふ。
備考一。肘關節の後面では三頭膊筋の腱が上方より來つて、小肘筋と共に尺骨鷹嘴突起に停止し、内側即ち小指側に於ては、尺骨神經が尺骨神經溝を通過す。

備考二。「肘關節に於ける血管及び神經の經過並に相互の關係」(昭六年十月福岡)は此の記事を主として考へよ。
「肘窩を通過する主要なる血管及び神經の名稱」(昭十一年五月山口)
「肘關節の直上で切斷すると如何なる筋、神經、血管を切るや」(昭十二年六月栃木)

腋窩を通過する神経血管筋の關係 (昭三年五月香川、同十一年春熊本)

腋窩動脈の起始經過並に靜脈神經との關係 (昭九年秋奈良、昭四年四月福岡、昭六年十月奈良)

腋窩動脈は鎖骨下動脈の續きであつて、小胸筋の上方即ち第一肋骨の外側縁に始まり、靜脈は動脈の前にあり。神經は三神經幹(上・下・後)が其の後側にある。
次に腋窩動脈は小胸筋の後側に轉じ、此の部では正中神經の上下二根に挟まれ、更に腋窩動脈は小胸筋の外下方に至り、上肢の三神經幹と共に三皮枝とに圍繞せらる。
腋窩靜脈は、同名動脈の經過と一致して、動脈の前内側に沿ふてゐる。そして腋窩動脈は大胸筋附着の下縁から上膊動

脈となる。

備考。此問題は局所解剖的問題である。

上肢の血管神経の名稱

（大十二年春福井、大十五年四月兵庫、十五年九月青森、大十五年四月滋賀、十五年十月茨城、其他）

解題。一、神経 一、血管と分類して其の名稱だけ書けばよい。

一、神經。撓骨神經、正中神經、尺骨神經（以上筋神經） 内膊皮下神經、中膊皮下神經、外膊皮下神經（以上皮神經）

備考。「上肢に分佈する主なる神経の名稱」（昭五年十月滋賀、昭十年春慶南）

一、血管。動脈と靜脈を區別す。

（イ）動脈は、上膊動脈及び其の分枝深在膊動脈（以上は上膊部）。撓骨動脈、尺骨動脈、前、後骨間動脈。（以上前膊部）

（ロ）靜脈は、上膊靜脈、尺骨靜脈、撓骨靜脈。（以上深在靜脈）。頭靜脈、貴要靜脈、中靜脈、頭中靜脈、中貴要靜脈（以上淺在靜脈）

脈（以上淺在靜脈）

備考一。以上の血管と神経及び筋との關係となると少し複雑となる。受験生は此の點をも考へよ。

備考二。「上肢の動脈及び靜脈を説明せよ」（昭六年十月鳥取）

備考三。「前膊に分佈せる血管神経を問ふ」（昭十二年四月福井）

上肢及下肢に分佈する主なる神経の名稱を記せ（昭九年春慶尚南道）

上肢に分佈する血管と其の經過並に下肢に分佈する神経の經過（大十五年四月千葉、昭十五年秋福島）

解題。これはまた、とんでもない、大きい問題だ、大體前項の問題や前々項の問題と同工異曲である。こんな問題に對しては、

1「上肢に分佈する血管と其經過」、2「下肢に分佈する神経の經過」。の二種に分類して考へて答案を書く。

(1) 上肢に分佈する血管の經過。

(A) 上膊動脈は、大胸筋附着の下縁から上膊骨の前内側に沿ひて二頭膊筋内筋溝を肘窩に向つて下り、二頭膊筋終腱の下縁で。

(B) 撓骨動脈と尺骨動脈の二終枝となり、撓骨動脈は撓骨筋と廻前圓筋の間を下方に向ひ、更に同筋と内撓骨筋の間を下り、下端は皮膚と筋膜との直下に現はれて、普通檢脈の部位となる。

(C) 尺骨動脈は、略々尺骨に沿ひて下行し内尺骨筋髓の内側に至る。

始め短き總骨間動脈を分ちて、直ちに前、後骨間動脈の二枝に分れて、前骨間と後骨間に分佈する。

備考。「上膊に存する主なる神経の名稱及び其の經過」（昭十年十月栃木）

「上肢に存する骨筋の名稱並びに神経血管の分佈概要を述べよ」（昭十二年十月福井、昭十二年四月長野、同五月滋賀、同十三年十月熊本）

(2) 下肢に分佈する神経の經過。

備考。「下肢に分佈する神経血管の經過」（昭二年秋京都、昭十年九月青森） 「前膊動脈の經過筋肉との關係」（昭三年五月奈良）

(A) 坐骨神経は、坐骨結節と大轉子の間より大内轉股筋の後面に沿ひ大内轉股筋の裂孔部を下れば、脛骨神経と總腓骨神経との二終枝となる。

(B) 脛骨神経は、膝窩中央同名靜脈の後外側に沿ひ、其の部の淺、深二筋層の間を内踝（足關節の）に向つて下る。

(C) 腓骨神経は、一名總腓骨神経といひ、腓骨上端を廻つて淺、深腓骨神経となる。淺腓骨神経は、長腓骨筋を穿通して長總趾伸筋の外前面に出で、下腿下三分の一の部で筋膜を穿つて皮下に現はれる。深腓骨神経は、長總趾伸筋と前脛骨筋の間に出現、同名動静脈に沿ひて下り足背に至る。其の經過中數條の筋枝を出して其の部の筋に分佈する。

備考。此(2)は大體に於て下腿に於ける筋と神経脈管の關係といふ問題ともなり得る。十五年春香川縣の「上膊に於ける血管神経の経路並びに筋肉との關係」とあるのも、四頁前からこの邊まで讀んで考へよ。同年四月新潟縣の「下腿に於ける血管神経に就て問ふ」は此答案でよい。「上膊の神経の経路及び其の枝別」(昭六年十月岩手)

下腿の血管 (大十五年九月青森 昭二年十一月京都)

解題。前項と手と足の差丈である。先づ下腿とは何ぞやを考へる。即ち膝關節から下方足跗關節までである。そして此問題は神経はいらぬ血管丈でよい。

下腿の血管には動脈と静脈とがある。

- 一、動脈。前脛骨動脈は、下脛骨間膜を穿つて下腿前面に出で、前脛骨筋と長總趾伸筋との筋間を足背に向つて下行する。後脛骨動脈は、比目魚筋の下で前脛骨動脈と分れ、下腿後側筋の淺深二層間をアキリス腱の内側に向つて下る。此の動脈は膝關節の下方で腓骨動脈を分枝して、腓骨に沿ひアキリス腱の外側に向つて下る。
- 一、静脈。淺、深二種の静脈あり。深静脈は殆んど動脈と一致す。淺静脈は跗趾側から大サフエナ静脈が外股輪に向つて流れ、小サフエナ静脈は小趾側から膝關節靜脈に歸流する。

備考。「下肢に分佈する血管神経の名稱を記せ」(昭二年十一月臺北州)

「下肢に分佈する主なる血管神経の名稱及び其の經過を記せ」(昭八年秋沖繩、昭十一年六月和歌山)

股神経と血管筋肉との關係 (昭十六年十月奈良 昭二年十一月徳島)

股神経は、第二、第三、第四腰椎神経の前枝より出でたるものであつて、腸骨筋の上を前外方に走りて鼠蹊靱帯の下を通りて、大腿の前面に出るもので、始め股動、静脈に沿ひ膝關節の内側を下り、大サフエナ静脈に伴ひ下腿の内側に分佈するサフエナ神経、大腿前面の皮膚に分佈する前股皮下神経と、其他大腰筋、腸骨筋、四頭股筋、縫匠筋等に分佈する筋枝とを出すものである。

備考。此の神経は坐骨神経に對して前側にあるが故に、又前坐骨神経ともいふ。

備考。大正十五年の春奈良縣の、「大腿前側に於ける神経の名稱並びに其の起始經過分佈を述べよ」といふ灸術の學說の問題は、股神経といふ字(固有名詞)がかくされてゐるのである答案はこれでよい。又昭和六年十一月長崎縣の「下肢に分佈する血管神経の名稱並びに其の經過を記せ」は「下腿の血管を問ふ」以下此の記述までを充分に考察せよ。

備考。「股神経の起始及、經過、分佈、並びに筋と脈管との關係を記せ」となると此の他に股動脈を書き加ふればよい。股神経に對する、病理學、治療學ではよく股神経痛が問題となる。それは病理學の部で後述する。

頸部を通過する血管及び神経 (昭十六年春熊本、昭六年十月福岡、昭十一年五月奈良、昭十年十一月朝鮮、昭十二年四月埼玉、昭十三年九月富山)

- 一、血管。總頸動脈、内頸動脈、外頸動脈、椎骨動脈(以上動脈)

二、神經。迷走神經、副神經（以上完全に通過するもの）

總頸靜脈、内頸靜脈、外頸靜脈、椎骨靜脈（以上靜脈）備考。「頸部の動脈」（昭九年春滋賀）

舌咽神經、舌下神經、各頸椎神經、交感神經の上・中・下神經節（以上は其の或部分は通過すともいひ得べきもの）

備考。「頸筋の名稱並びに頸部を通過する血管神經との關係」（昭十年秋福島、昭十一年秋熊本、昭九年春大分、昭九年秋愛媛）

前胸壁に於ける筋と神経脈管

一、筋は淺層より記すと。

- (1) 大胸筋、 (2) 小胸筋、 (3) 鎖骨下筋。（以上淺層）
- (1) 外肋間筋、 (2) 内肋間筋、 (3) 横胸筋である。（以上深層）

一、神經。膊神經叢の前胸廓神經は約二條あつて鎖骨上窩を経て下方に向ひ、大、小胸筋の間に行き大、小胸筋に分佈し。頸神經叢の鎖骨上神經は、側縁の下部より來たつて胸の上部の皮膚に分佈し。

胸椎神經前枝の第一乃至第七肋間神經は、後方より來たつて内、外肋間筋の間を前方に向ひて、内、外肋間筋に分佈し、胸骨の側縁では前穿行枝を出して胸骨部の皮膚に分佈する。

一、血管。胸肩峰動脈の胸筋枝は大胸筋に分佈し、三角筋枝の下端も大胸筋に來たり、内乳動脈は胸骨上端の側縁の約一仙迷側方を第六肋間に向つて下り、其の經過中、前肋間動脈を分つて、各肋間に二條づゝ肋骨の上

縁と下縁に沿ひ内外肋間筋に分佈して外方に走る。

靜脈は。肋間靜脈が半奇靜脈に入る。

備考。「胸部に存する血管神經の名稱」（昭十年秋朝鮮慶南）

顔面に於ける筋と神経脈管の關係

（此の内の一部は十二年の春東京其の他の問題、昭十二年四月熊本）

一、筋。前頭筋（頭部）。眼輪匝筋（眼部筋）。口輪匝筋、頬筋、方形上唇筋、額骨筋、三角頰筋（以上口部筋）等。

及び咀嚼筋等にして、顔面筋は一部は骨に、一部は皮膚に附着す。

一、神經。三叉神經は三枝に分れて、(1) 第一枝眼神經は眼と前頭に、(2) 第二枝上顎神經は上顎部即ち顔面中部に、(3) 第三枝は顔面の下部即ち下顎附近に分佈して其の知覺を主宰す。顔面神經は耳下腺叢を作つてそれより全顔面の筋肉に分散し各筋枝となつて顔面筋の運動を主宰す。三叉神經の咀嚼筋神經は咀嚼筋に分佈して咀嚼筋の運動を主宰する。

備考。「顔面に分佈する神經並びに其の作用」（昭十一年十月宮城）

一、血管。外頸動脈の分枝内頸動脈の筋枝、咬筋動脈、深顔頸動脈、内、外翼狀筋動脈、頬筋枝、顳動脈枝や、外頸動脈の横顔面動脈が、澤山の筋枝の小なるものを出して顔面に分佈する。

靜脈は、大方動脈に一致して、後、顔面靜脈、總顔面靜脈となつて、外頸靜脈に注ぐものである。

備考。こんな範圍の大きな問題は此の答案のように概論しなければとても三十分や一時間で答案は書けない。

（大十二年春東京）「咀嚼筋の名稱及び之に分佈する神経の名稱」の答はこの中にふくまれてゐる。

拇指に分佈する神経動脈並びに經過

一、神經。撓骨神経の前枝（淺枝）は、

膊撓骨筋腱の下より手背に出でて、拇指の背面の兩側に分佈して指尖に至り、

正中神経の前骨間神経の末枝は、筋枝となつて拇指球の諸筋と拇指の掌面に分佈する。

一、動脈。

撓骨動脈の終枝の一つである第一指掌動脈は、拇指球の下で三枝に分れて拇指掌面の兩側に分佈して指尖に至る。（註、但し一枝は示指の撓側に分佈す）

淺掌動脈弓より出でたる拇指背側動脈は、拇指背面の兩側に分佈するものである。

跖趾に分佈する神経と動脈の經過

（A）神經。淺腓骨神経の終枝が、足背から足趾背面の脛骨側（内側）に分佈し、

深腓骨神経の終枝が、第一、第二趾骨の間から筋膜を穿つて、跖趾と第二趾の對側に分佈する。

脛骨神経の終枝である内足趾神経は、跖趾の兩側に分佈する。

（B）動脈。

前脛骨動脈の末梢第一背骨間動脈が、跖趾背面の兩側に分佈し、後脛骨動脈の末梢、第一總趾趾動脈が、跖趾趾面の兩側に分佈する。（註、後脛骨動脈一名脛骨動脈）

備考。神經は淺、深腓骨神経の末梢が背側に、脛骨神経の末梢が趾面に分佈し。動脈は前脛骨動脈が背側に、後脛骨動脈が趾面に

分佈する。手の拇指と對照して考へよ。且つ残りの指趾の神經と動脈とを記憶するがよい。わざと省略しておく。其の生理作用は脊髄の末梢神經は皆混合神經であるが筋枝は主として運動を主宰し、皮枝は感覺を主宰するものである。又手の淺掌動脈弓、深掌動脈弓、足の足趾動脈弓、足背動脈弓、をも考へて、よく記憶するがよい。これらも、わざと記さないでおく、他人より一行でも多く勉強する人は、他人より一日も早く合格の榮冠を得る人である。

正中神経と筋肉及び脈管との關係

（昭十五年秋山口
昭三年五月山口）

解題。此の問題を解答するは稍々重複するけれど、學生に此の種の問題の答案をよく書かしめんが爲もう一度ここに答案を作成する。

正中神経は、上、下二神經幹から起り、其の間に腋窩動脈を挟む、下るに従ひ二頭膊筋内筋溝を上膊動脈、靜脈に沿ひて下る。其の經過間では枝を分たすに肘關節の前側を通り、廻前圓筋の二頭間を貫き、前膊前面の淺、深屈指筋の間を尺骨動脈と共に手腕關節の前に至り、手掌腱膜の下にて數條の筋枝、皮枝となり尺腕屈筋を除く他の其の部の諸筋に分佈し、手の拇指球（但し内轉拇筋を除く）諸筋、第一、第二、第三蟲様筋、手掌撓側過半の皮膚に分佈する。

備考。「正中神経の作用」（昭四年五月滋賀）正中神経は運動を主とし知覺を混じたる混合神經である。主に前側淺深諸筋を運動せしむる他、第一指乃至第四指に分佈する。又皮枝は感覺（知覺）神經である。疾病は正中神経痛、痺痺等がある。設問。尺骨神経と筋と脈管との關係、撓骨神経と筋との關係を記せ。

備考。四肢の皮下を走る血管及び神經に就て説明すべし（昭四年十一月山口、昭十二年十月山口）

解題。これは主として四肢に於ける淺在靜脈と皮神經を記述すればよいが一寸煩雜である。多少他の記述と重複する點もあるが初學者の爲に記す。

(甲) 血管。

上肢。頭靜脈は、手背の撓側から始つて、前膊の撓側を上膊に上行し、大胸三角筋窩で腋窩靜脈に入る。

貴要靜脈は手背尺側に始り、前膊正中を上行し上膊内側の稍中央で（二頭膊筋内筋溝の稍中部）上膊靜脈に入る。

中靜脈は手掌の皮下に始り、前膊前面の中央を上行し肘窩で二條に分れ、前記二靜脈と吻合し、又別に一分枝を生じて肘窩の深靜脈に入る。

下肢。大サフエナ靜脈（大齋薇靜脈）は、足背から始つて内髁の前側を上行し大腿の内側に上り股靜脈に入る。

小サフエナ靜脈（小齋薇靜脈）は、同じく足背に始り、外髁の後側から下腿の後面を上り膝窩窩で膝靜脈に入る。

(乙) 神經。

上肢。外膊皮下神經は、上神經幹から起り、二頭膊筋と内膊筋の間を外下方に至りそれ等の筋に枝別を與へ、終に肘窩の外側にて（經穴曲池の部）筋膜を穿過して、皮神經となり前膊撓側の前後の皮膚に分佈する。

内膊皮下神經は、下神經幹の内側から下方に至り、上膊内上部の皮膚に分佈する。

中膊皮下神經は、上膊動脈の前内側を下つて上膊の中部で皮下に現れ前膊尺側の皮膚に分佈する。

下肢。外股皮下神經は、腸骨前上棘の下から大腿外側の外皮に分佈する。

前及内股皮下神經は、股神經の皮枝で大腿の前側及び内側に分佈する。

後股皮下神經は、大坐骨孔を出て、大腿後側の皮膚に分佈する。

サフエナ神經は、大サフエナ靜脈に同伴して下腿及び上腿の内側に分佈する。

其他、脛骨神經、腓骨神經の小枝は下腿及び足趾の皮膚に分佈する。

備考。「上膊に於ける血管及び神經の經過を記せ」（昭九年春廣島）
「下肢に於ける主要なる血管神經を問ふ」（昭十三年四月福井）

第五章 著名なる筋窩

上頸三角部

上境、二腹頸筋後腹。

前境、肩胛舌骨筋。

後境、胸鎖乳嘴筋前緣。

底部、喉頭、咽頭。

からなるものであつて、總頸動脈が内外頸動脈に分るゝの部である。

備考。經穴人迎は此の部にある。

下頸三角部

前境、胸鎖乳嘴筋。

後境、僧帽筋。

下境、鎖骨。

備考。下頸三角より上頸三角に向つて總頸動脈は上る。此の間は總頸動、靜脈、迷走神經は血管鞘に包まれる。

又經穴水突は此の部に在る。

「頸部に於ける貴要血管に就て」（昭六年十月岩手）

頸下三角部

上境、下顎骨下縁。
後境、二腹顎筋後腹等。
前境、二腹顎筋前腹等。

からなるもので下顎骨の直下である。其の部に顎下腺がある。

備考。顎下三角の直下甲狀軟骨頸截痕の上には經穴は廉泉がある。

胸骨上窩

上境、環狀軟骨。

下境、胸骨頸截痕。

左右、胸鎖乳嚢筋。

底部、胸骨舌骨筋等。

備考。經穴は天突である。

鎖骨上窩

部位。胸鎖關節の直上、胸鎖乳嚢筋の外側、鎖骨下動脈、靜脈、膊神經叢の通路である。

備考。經穴は缺盆である。

鎖骨下窩 (大胸三角筋窩、モーレンハイム氏窩)

鎖骨外端の下、大胸筋と三角筋との間隙部である。

頭靜脈は此處に於て鎖骨下靜脈にそゞぎ、鎖骨下動脈は此の部から腋窩動脈となる。

備考。經穴は雲門である。

腋窩を構成する筋肉の名稱並びに腋窩を通過する

神經脈管の名稱と位置 (昭九年秋和歌山、昭十年秋栃木、昭十一年春香川、昭十二年五月群馬、昭十三年十月、昭十五年秋熊本、昭十四年春秋田、昭十六年四月秋田)

部位。上肢と側胸壁上部との凹める部。

前境、大、小胸筋、烏喙膊筋、二頭膊筋。(短頭)

後境、肩胛下筋、潤背筋、大圓筋。

内境、前大鋸筋。

腋窩動、靜脈は其の正中を。上、下、後三神經幹は、此部に於て上膊に至る神經束として動、靜脈と相前後する。通過する神經脈管。腋窩動、靜脈、正中神經、尺骨神經。

備考。經穴は極泉である。動脈は烏喙膊筋の内側から上膊動脈となる。

肘窩 (昭五年九月青森)

上境、二頭膊筋、内膊筋。